

熊本県文化財調査報告 第207集

鞠智城跡

—第22次調査報告—

2002年3月

熊本県教育委員会

序 文

鞠智城跡は、アジア情勢が緊迫した7世紀後半に、大和朝廷により築城された古代山城の一つです。鞠智城跡の他に、九州では大野城跡、基肄城跡、金田城跡と3つの城跡が確認されていますが、いずれも国の特別史跡となっており、鞠智城跡もこれらと肩を並べるほどの非常に重要な史跡と言えます。

この鞠智城跡について、熊本県教育委員会では、昭和42年からこれまで21次の発掘調査を実施してきました。調査の結果、貴重な遺構や遺物が発見され、鞠智城跡は「県総合計画」において「歴史公園化を目指し調査と整備を促進する」と位置づけられ、これまで歴史公園化にむけて調査と整備を実施してきました。

本書は、昨年度に実施した第22次調査で、鹿本郡菊鹿町大字米原所在の池跡と菊池市堀切所在の堀切門跡を実施しましたが、その調査成果をまとめたものです。

最後に、調査を実施するにあたりまして、文化庁及び鞠智城跡整備検討委員会の先生方からご指導をいただくとともに、菊鹿町教育委員会並びに菊池市教育委員会、また、地元の皆様など多くの方々のご協力を承りました。ここに厚くお礼を申し上げます。

平成14年3月31日

熊本県教育長 田 中 力 男

例 言

1. 本書は熊本県教育委員会が平成12年度に実施した国庫補助事業の発掘調査報告書である。
2. 調査現場での遺構実測・写真撮影・遺物取り上げについては、各調査員が主に行い、池跡出土の木組遺構の実測については、(株)埋蔵文化財サポートシステム熊本支店の補助があった。
3. 本書使用した方位とグリッドは、国土座標を用いた。
4. 遺物の整理・実測・拓本と遺構・遺物のトレースは、西住欣一郎、矢野裕介・古閑敬士が主に行い、曾我敬子、金光里美、川上寧子、徳永澄子、中内百恵、野満彩子、原山智沙、尹善暎の補助があった。
5. 図版の遺物写真の縮尺は、軒丸瓦、網代、木筒状木製品、手斧約1/2、平・丸瓦、木製品約1/5、その他の遺物約1/4に設定した。
6. 付論の種子同定、微細物分析はパリノ・サーヴェイ(株)によるものである。
7. 本書の執筆は、主に矢野が行い、第2章第2節の瓦の記述を古閑敬士が担当した。
8. 本書の編集は熊本県教育庁文化課で行い、矢野が担当した。

本文目次

第Ⅰ章 調査の概要	
第1節 調査の組織	1
1 発掘調査	
2 報告書作成	
第2節 調査の経過と方法	2
1 調査箇所及び期間	
2 堀切門跡の調査	
3 池跡の調査	
4 報告書作成	
第Ⅱ章 遺跡の概要	
第1節 地理的環境	5
1 立地について	
2 城域について	
3 地形について	
第2節 歴史的環境	5
1 年代について	
2 周辺遺跡について	
第Ⅲ章 調査の成果	
第1節 堀切門跡の調査	9
1 堀切門跡の立地について	
2 トレンチの設定について	
3 各トレンチの成果について	
4 遺物について	
第2節 池跡の調査	26
1 基本層序と調査区	
2 遺構について	
3 遺物について	
第Ⅳ章 まとめ	
第1節 堀切門跡について	56
第2節 貯水池跡について	56
(付論)	
鞠智城跡貯水池跡出土の種子同定・微細物分析	59

挿図目次

第1図	鞠智城跡全体図	3
第2図	周辺遺跡分布図	7
第3図	堀切門跡トレンチ配置図	10
第4図	4Cトレンチ掘り下げ部断面図	11
第5図	10トレンチ実測図	12
第6図	15トレンチ実測図	13
第7図	16トレンチ平面図	14
第8図	16トレンチ断面図	15
第9図	16トレンチ柱穴実測図	16
第10図	17トレンチ実測図	17
第11図	17トレンチ城壁加工痕模式図	17
第12図	17トレンチ加工痕拓影図(1)	18
第13図	17トレンチ加工痕拓影図(2)	19
第14図	17トレンチ加工痕拓影図(3)	20
第15図	18トレンチ実測図	21
第16図	19トレンチ実測図	22
第17図	20トレンチ実測図	23
第18図	21トレンチ実測図	24
第19図	堀切門跡出土遺物実測図	25
第20図	第22次調査箇所配置図	27
第21図	28TC・F地区土層断面ポイント	28
第22図	F地区掘り下げ箇所断面図	29
第23図	堰堤土層断面図	30
第24図	F地区SX01実測図	31
第25図	木組遺構実測図	32
第26図	F地区南西端部断面図	33
第27図	F地区南西端部実測図	34
第28図	E地区南東端部実測図	35
第29図	縄文土器実測図	36
第30図	石器実測図	37
第31図	弥生土器実測図	38
第32図	須恵器実測図	40
第33図	土師器実測図	41
第34図	軒丸瓦瓦当実測図	42
第35図	丸瓦実測図	43
第36図	平瓦実測図(1)	44
第37図	平瓦実測図(2)	45

第38図	平瓦実測図 (3)	46
第39図	瓦二次加工品実測図	46
第40図	鉄製品実測図	47
第41図	木製品実測図 (1)	48
第42図	木製品実測図 (2)	49
第43図	木製品実測図 (3)	50

表目次

第1表	調査進行表	4
第2表	周辺遺跡地名一覧	8
第3表	池跡基本層序表	26
第4表	木組遺構計測表	31
第5表	遺物観察表	51

図版目次

図版1	堀切門跡全景 (北から)
図版2	池跡28トレンチF地区全景 (北東から)
図版3	上 堀切門跡4Cトレンチ拡張部 (南から)
	下 堀切門跡10トレンチ拡張部 (東から)
図版4	上 堀切門跡15トレンチ (北東から)
	下 堀切門跡16トレンチ柱穴 (北西から)
図版5	上 堀切門跡17トレンチ城壁 (南東から)
	下 堀切門跡18トレンチ (南東から)
図版6	上 堀切門跡10、15、18トレンチ (南東から)
	下 堀切門跡19トレンチ (北東から)
図版7	上 堀切門跡16、20トレンチ (西から)
	下 堀切門跡登城道 (北から)
図版8	上 池跡28トレンチE地区全景 (西から)
	下 池跡28トレンチF地区柵状柱列 (西から)
図版9	上 池跡28トレンチC地区堰堤断面 (北東から)
	下 池跡28トレンチF地区木組遺構 (北東から)
図版10	上 木組遺構木材No.3 えつり孔 (南から)
	中 木組遺構木材No.3 加工痕 (南東から)
	下 木組遺構木材No.4 加工痕 (南西から)
図版11	縄文土器
	弥生土器

図版12 須恵器

土師器

図版13 土師器

鉄製品

図版14 軒丸瓦瓦当

図版15 軒丸瓦瓦当

丸瓦

平瓦

図版16 平瓦

図版17 平瓦

瓦二次加工品

堀切門跡出土遺物

図版18 木製品

図版19 木製品

第 I 章 調査の概要

第 1 節 調査の組織

1 発掘調査

調査主体	熊本県教育委員会
調査責任者	阪井大文（文化課長）
調査総括	大田幸博（課長補佐）
調査担当者	西住欣一郎（参事） 矢野裕介（学芸員） 古閑敬士（囑託）
文化財整備係	上村修治（参事） 小佐井栄一（主任主事）
調査指導	堀内清治（熊本県保護審議会会長・熊本大学名誉教授） 坪井清足（元興寺文化財研究所長） 岡田茂弘（東北歴史博物館館長） 小田富士雄（福岡大学教授） 澤村 仁（九州工業大学名誉教授） 甲元眞之（熊本大学教授） 北野 隆（熊本大学教授） 出宮徳尚（岡山市教育委員会） 乗岡 実（岡山市教育委員会） 田中淳也（長崎県美津島町教育委員会）
調査事務	川上康治（課長補佐） 中村幸宏（主幹・総務係長） 廣瀬泰之（参事） 杉村輝彦（主事）
調査協力者	菊鹿町教育委員会 菊池市教育委員会 菊鹿町米原地区 菊池市堀切地区

2 報告書作成

総括	大田幸博（課長補佐）
報告書担当者	村崎孝宏（参事） 矢野裕介（主任学芸員） 古閑敬士（囑託）

第2節 調査の経過と方法

1 調査箇所及び期間（第1図）

鞠智城跡の第22次調査は、第21次調査に引き続き堀切門礎石周辺〔木野1781-2ほか〕（以下、「堀切門跡」とする。）と池跡〔米原553-1ほか〕の確認調査を実施した。調査の期間については、堀切門跡の調査を平成12年4月17日から平成12年11月21日まで、貯水池跡の調査を平成12年8月2日から平成13年3月29日まで実施した。これらの調査と並行して、遺物の水洗い、注記、接合を進め、報告書作成については、平成13年度に実施した。

2 堀切門跡の調査

堀切門跡では、門礎石の原位置の確定、城壁中段のテラス状平坦面と登城道の関係と登城道の経路の把握を主目的に確認調査を実施した。上記三つの目的を達するため、既設トレンチの拡張（4、10トレンチ）と新規トレンチ（15～21トレンチ）を設定した。各トレンチの掘削はすべて人力により行い、掘削により生じた廃土はアルミコンベア、キャリアダンプを使用して丘陵頂部の廃土場まで搬送した。第19・20次調査時に竹根を腐敗させる薬剤を注入していたため竹根の除去は容易であったが、調査箇所が急傾斜地であるため廃土処理がうまくいかず、結果的に多大な時間を要した。

調査は、各トレンチとも層位的に掘削を行い、層位の把握困難な箇所については部分的に小トレンチを設け、古代の面の把握に努めた。調査地は、後世に畑、道路として利用され、一部に攪乱されている箇所があり、また、傾斜地でもあるため各トレンチの層位は一律ではなく、トレンチ相互の層位の把握に苦慮した。

調査の結果、門の支柱に比定できる柱穴1基を検出した（16トレンチ）。後世の道路の造成で攪乱を受けており柱穴1基のみの検出となったが、柱穴付近は下からの登城道の比較的急な傾斜が緩やかになる変化点で、門の所在としては適当な箇所といえる。登城道と城壁中位のテラス状平坦面との関係については、後世の畑で攪乱され、確証を得るには至らなかった。登城道については、19トレンチにおいて道路跡が検出されたことにより、現在の枡形状の屈曲を伴う道路跡が古代に形成されたことが確認された。この他、凝灰岩壁の礫面に工具による加工痕跡が確認された（17トレンチ）。

以上の調査成果が得られたため、平成12年10月29日に一般公開を実施し、その後、土砂の崩落を防ぐための防護措置をとり、調査を終了した。

3 池跡の調査

池跡では、第21次調査で設定した28トレンチE・F地区の未掘削部分の確認調査を実施した。このうち、F地区については、第19次調査時に、28トレンチC地区南西壁面に木組遺構の一部が露出していたため調査が急がれ、調査中途から木組遺構全体を検出するための小トレンチ（450cm×425cm）を設定し、掘削を実施した。両地区の掘削については、第21次調査時にすでに表土から基本層位⑥層中途までの粘土層が除去されていたためすべて人力で行い、脆弱な木製品が包含されているため、竹籠を使用した。廃土については、アルミコンベア、キャリアダンプを使用して北東側の所定の廃土場まで搬出した。出土遺物については光波測距機を用いて出土地点を記録した。また、木組遺構を含めた木製品類については、乾燥防止に多大の注意を払い調査を進めた。

調査の結果、一部露出していた木組遺構については、方形に組まれた遺構で、湧水地点を囲った「水汲み場跡」であることが判明した。また、C地区の「堤防状遺構」（第19次調査）と位置付けられていた遺構を再調査したところ、土層観察により人為的な高まりが新たに確認された。この高まりは池の堰堤であること



鞠智城パンフレット（発行：平成9年7月）に追記



第1図 鞠智城跡全体図

が予想され、この堰堤を挟んで上方に木組遺構、下方に貯木場（第19次調査）が位置することとなり、池の構造解明に向けて大きく前進する結果となった。

E・F地区ともに完掘できず、未掘削部分を残して調査を終了した。調査終了後、木組遺構については土嚢で固定させた上に山砂による30cm程の保護盛土を行い、現地で仮保存して今後の措置を検討することとなった。

4 報告書作成

平成12年度に出土遺物の水洗い・注記・接合などの作業を行い、平成13年度に遺物の実測、実測図のトレース、挿図のレイアウト、執筆、写真撮影・焼付など報告書作成に伴う作業を実施した。

第22次調査報告の内容については第22次調査の成果を主に掲載しているが、前回報告できなかった第21次調査時に検出された柵状柱穴群（池跡28トレンチE・F地区）を加えた。また、堀切門跡出土遺物並びに池跡28トレンチA・B地区出土木製品の一部など未報告の遺物についても本報告に加えた。

第1表 調査進行表

調査区・内容	H12 4	5	6	7	8	9	10	11	12	H13 1	2	3
堀切門跡	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> 準備 調査 保存処置 </div>											
池跡28トレンチ E・F地区	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> 調査 保存処置 </div>											

第II章 遺跡の概要

第1節 地理的環境

1 立地について

鞠智城跡は、菊池川の河口から直線距離で北東方向に約27km離れた菊池川中流域に位置する。菊池川の北岸にあたる標高70～80m程の台（うてな）台地の基部、標高100～168mの鹿本郡菊鹿町米原にその中心域がある。北は福岡県との県境に連なる山々（主峰、八方ヶ岳）を望み、南は菊池川により形成された肥沃な土壌をもつ平野（菊池・山鹿平野）が広がる。南の菊池平野からの比高差は約100mと同時期に築城されたとされる大野城跡、基肄城跡が400m級の山に築かれているのに対して低い立地となっており、鞠智城跡の地理的特徴といえる。

2 城域について

城域は、鹿本郡菊鹿町米原の長者原地区を中心に東西約1.6km、南北約1.3kmの範囲で、外郭線の総延長約3.7km、総面積約120ヘクタールの規模を持つ。そのうち、中心域である内城地区（約55ha）と自然地形をとり込んだ外縁地区（約65ha）に区分される。城域については、これをさらに包括するような広域説があるが、最大直径3.6kmで総面積約120ヘクタールと他の古代山城と比較して余りに広大であるため、内城地区に限り城跡と見なすのが有力である。

3 地形について

鞠智城跡の内城地区の地形は、その中心域である比較的広い平坦面が城域の北東側に拡がり（長者原地区）、その平坦面のやや北寄りに端を発する支谷が北西方向から途中で向きを変え北方向に延びる。この支谷は外郭線付近ではかなり急峻な谷となる。その谷を挟んで西側には高い丘陵が南北に延びるが、これが城域の西限となる。また、長者原地区の南にも東から西に延びる支谷があり、その南に細長い丘陵が東西に延びる。この丘陵が南限となるが、その南側は急峻な崖線で区切られており、さながら天然の要害といった印象を受ける。城域の東側については現地地形から判断してこれといった特徴は見出せず、やや急な傾斜地である。地盤については南側は阿蘇熔結凝灰岩で形成され、南限丘陵の頂部付近にまで達しており、南側斜面には凝灰岩の断崖が随所に見られる。また、西限丘陵には花崗岩の露頭があり、南側との地盤の違いが見られる。

第2節 歴史的環境

1 年代について

鞠智城跡は文献上に記載がみられ、遺跡の場所が比定されている数少ない遺跡の一つである。よって、文献から大まかな築城年代及び存続年代が与えられる遺跡である。

鞠智城跡の初見は『続日本紀』で、文徳天皇2年（698年）5月の条に「甲申、大宰府をして大野・基肄・鞠智の三城を繕い治めしむ」とある。大宰府に命じて大野城、基肄城、鞠智城の3城を修理したという内容である。他の2城については、『日本書紀』天智天皇4年（665年）秋8月の条に築城記事があり、修復時期が同じであることから、鞠智城の築城も同時期とする説が有力である。

また、平安時代に編纂された国史書にも記載がみられ、『文徳天皇実録』天安2年(858年)閏2月の条には「丙辰、肥後国言す、菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る」とあり、「丁巳、又鳴る」と相次いで奇怪な事件があったことが肥後国府から報告されている。また、その年の6月20日には「兵庫の鼓自ら鳴った」後、「不動倉」11棟消失する火災が発生している。この後にも、『日本三代実録』元慶3年(879年)3月16日の条に「兵庫の鼓自ら鳴る」という記事が見え、文献上からその記載が無くなる。

これらのことから概ね7世紀後半～9世紀後半まで存続したというのが現在の見方であり、検出遺構に伴う出土遺物もその年代に比定できるものが多数見られ、存続年代については大過ないものと思われる。しかし、近年の調査でその年代に該当しない遺物も出土しており、さらなる検討が必要となっている。

2 周辺遺跡について

鞠智城跡周辺には古代の遺跡が多数所在する。これら遺跡のうち鞠智城跡と密接に関連すると思われる古代の官衙関連遺跡としては、御宇田遺跡群(鹿本町)、上鶴頭遺跡(七城町)、西寺遺跡、うてな遺跡(菊池市)がある。以下にこれらの遺跡の概要について紹介する。

御宇田遺跡群

鞠智城跡の西方の御宇田丘陵上に立地する。昭和60年～61年度にかけて調査が行われており、西久保、虎ヶ迫、妙見第Ⅰ、妙見第Ⅱ、妙見第Ⅲの5つの調査区からなる。このうち妙見第Ⅱ区の調査で、3間5間の庇付き建物、3間4間の建物、2間4間の建物などの掘立柱建物群(8c～9c)が中央広場を挟んで規則的に配列されて検出された。また、遺物でも、石製巡方、円面硯など官衙的色彩の強い出土品や、三彩、越州窯青磁、緑釉陶器などの貴重な交易品が出土している。これら建物配置や出土遺物からこの妙見第Ⅱ区周辺が官衙跡に比定されている。

上鶴頭遺跡

菊池川の左岸、標高70～100mの洪積段丘(通称、花房台地)上に立地する。昭和57年度に調査が行われ、30メートル四方の中央広場を囲むように16棟の庇付き大型建物群(9c前半)が検出された。このことから、官衙跡に比定されている。遺物でも、「正」、「西正」など20数点の墨書土器が出土している。

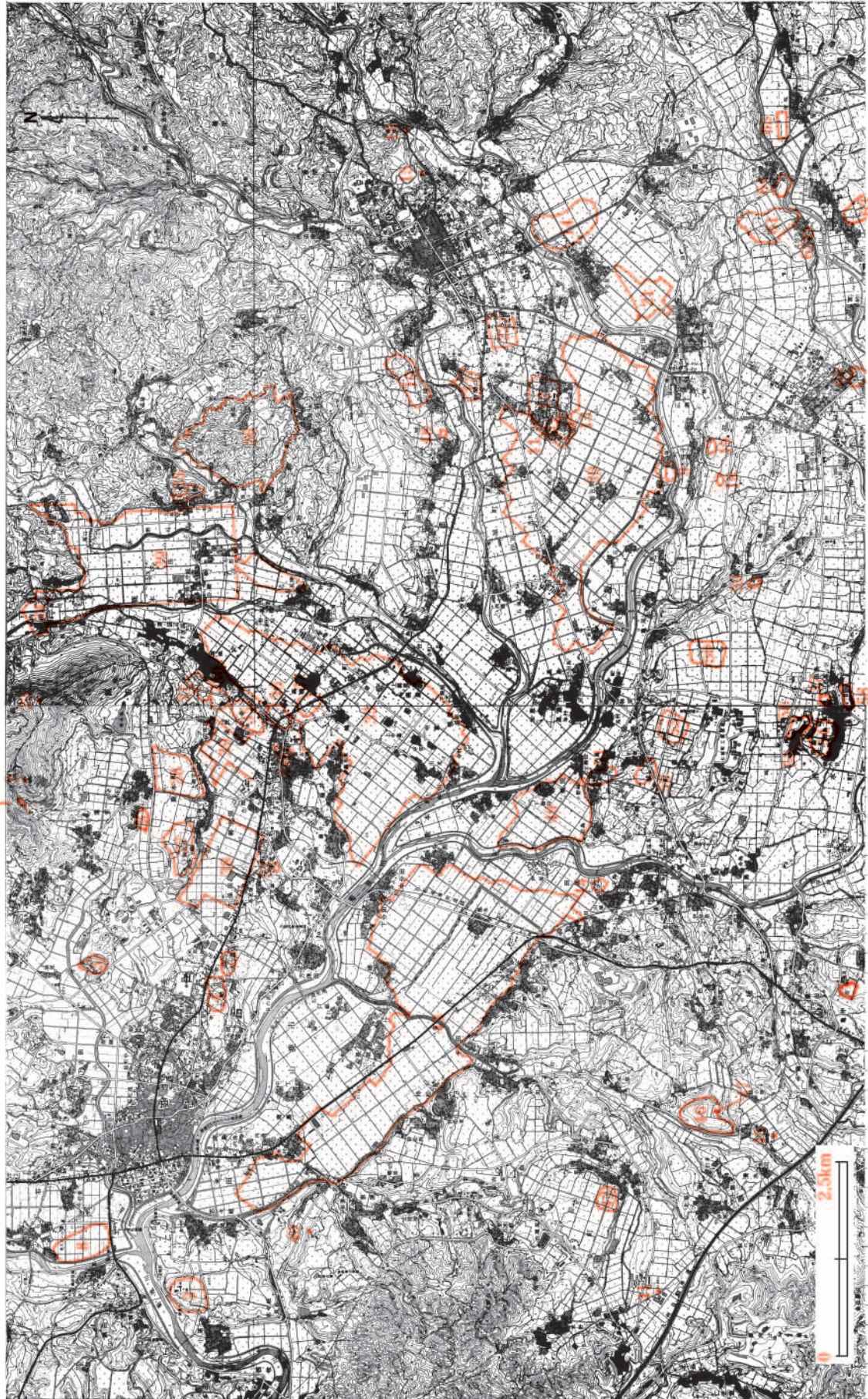
西寺遺跡

菊池川左岸、菊池平野の平野部に立地する。現在、「西寺」という集落になっているが、集落の北側と西側に土塁が残存する。北側は100～130mで、幅5～6m、高さ1.5mの規模で、西北隅で西に直角に曲がり、長さ20～30mの土塁となる。その内側に瓦葺の建物跡(8c頃)が想定されている。また、集落の南西側300程の南園と呼ばれるところから多量の布目瓦(8c末～9c初頭)が出土しており、これら土塁や出土瓦等からこの辺一帯が菊池郡家(官衙)の所在地とされている。

うてな遺跡

菊池川右岸、標高70～80mの台地の西側端部に立地する。3度の調査が行われており、七ツ枝Ⅰ・Ⅱ区、大原Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区の5つの調査区からなる。そのうち七ツ枝Ⅱ区から検出された掘立柱建物群(8c後半～9c前半)については規則的な配置が見られ、また、出土遺物も三彩壺片、銅椀片、墨書土器が出土していることから、官衙関連施設に比定されている。

上記の遺跡及びこの他の古代遺跡の所在地等については「周辺遺跡分布図」(第2図)、「周辺遺跡地名一覧」(第2, 3表)として掲載した。これら同時代の遺跡と鞠智城との関連を解明していくことが、今後の課題といえる。



第2图 周边遗迹分布图

第2表 周辺遺跡地名一覧

No.	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
1	凡道寺	蒲生 福原	古代	包蔵地	県	経筒(滑石)が県指定 久安元年銘
2	不動岩	蒲生	古代～現代	祭 祀	市	
3	原ノ山	小原 原の山	古墳～古代	包蔵地		
4	白石・古閑ノ上	古閑	弥生～古代	包蔵地		野辺田式土器、箱式石棺
5	沖	古閑 沖	縄文～古代	包蔵地		
6	蒲生	蒲生 宮の下・宮の上	古代	包蔵地		
7	白石	方保田 白石	縄文～古代	包蔵地		
8	条里跡		古代・中世	生 産		
9	大塚	長田 (通称大塚)	弥生～古代	包蔵地		弥生後期土器、土師器
10	竹ノ上原	袈裟尾 竹ノ上原	古代	集 落		
11	西寺郡家及び土埜跡	西寺 (通称高田)	古代・中世	包蔵地	市	布目瓦出土、菊池郡家か?
12	西寺	西寺 (通称高田)	古代・中世	包蔵地		
13	南園	西寺 南園	古代・中世	包蔵地		布目瓦・土師器
14	赤星福土・水溜	赤星 福土・水溜	縄文～古代	集 落		
15	東福寺	亘 堂山	古代	寺 社	市	本堂裏、青磁・白磁壺の蔵骨器
16	亘の経筒出土地	亘 道ノ上	古代	包蔵地		青銅経筒の一部、緑釉
17	神来	大琳寺	古代	包蔵地		
18	西原B	木柑子	古代	包蔵地		
19	東山ノ上	木柑子	古代	包蔵地		
20	条里跡		古代・中世	生 産		
21	条里跡		古代・中世	生 産		
22	日の岡	下内田 下日の岡	縄文～古代	包蔵地		
23	来民駅家跡	下内田 下島田	古代	交 通		
24	腰(輿)掛松	木野 (通称迫)	縄文～古代	包蔵地		
25	鞠智城跡	米原 長者原	古代	城	県	古代山城
26	西久保	御宇田 西久保	弥生～古代	包蔵地		集落
27	御宇田成竹	御宇田 成竹	古代	集 落		
28	野地	来民 野地	縄文～中世	包蔵地		
29	鹿本平野条里跡	庄 大草ほか	古代・中世	生 産		庄地区水田全面に及ぶ
30	高橋神社裏	高橋 八郎丸	弥生～古代	包蔵地		
31	内原	高橋 内原	弥生～古代	包蔵地		
32	鬼丸	来民 鬼丸	縄文～古代	包蔵地		
33	内田川流域条里跡	高橋 古閑ほか	古代～中世	生 産		高橋全域に及ぶ
34	前田	来民 前田	弥生～古代	包蔵地		鹿本中学校々庭
35	笹本	来民 笹本	縄文～古代	包蔵地		
36	香細工	高橋 香細工	弥生～古代	包蔵地		
37	蛭塚	高橋 蛭塚	弥生～古代	包蔵地		
38	条里跡		古代・中世	生 産		
39	条里跡		古代・中世	生 産		
40	岩原の土馬出土地	岩原 塚原	古代	包蔵地		1点
41	駄の原長者屋敷跡	合里 駄の原	古代・中世	包蔵地		古墳長者伝説地
42	西屋敷	広 西屋敷	平安～中世	包蔵地		
43	条里跡		古代・中世	生 産		
44	大橋	田底 八郎丸	縄文～古代	包蔵地		
45	ササ塚	内 粕道	古代・中世	包蔵地		
46	伝習農場	清水 堤が平	縄文・古代	包蔵地		縄文早期・前期土器
47	伝習農場火葬墓地	清水 堤が平	古代	埋 葬		蔵骨器
48	十連寺跡	水次 久保ノ上	奈良・平安	寺 社	町	奈良・平安期、塔心礎・布目有文多数
49	橋田条里遺構	橋田	古代・中世	生 産		菊池川、合志川の合流一帯
50	上鶴頭	小野崎 上鶴頭	平安	官 衙		
51	四面神社横	蘇崎 岩田	古代	包蔵地		布目瓦
52	鬼丸	打越 鬼丸	縄文・平安	包蔵地		
53	大久保	林原 大久保	縄文・平安	包蔵地		縄文・平安集落跡
54	岡A	田島 北原	古代・中世	包蔵地		布目瓦
55	岡の礎石群	田島 岡宅地	古代・中世	包蔵地		礎石群
56	岡B	田島 北原	古代・中世	包蔵地		布目瓦
57	田島廃寺跡	田島 坂口	古代	寺 社		土師器・須恵器
58	陣塚	田島 陣塚	古代	包蔵地		蔵骨器・須恵器
59	油屋長者屋敷跡	亀谷 中出	古代・中世	包蔵地		
60	村吉	吉富 高島	古代	包蔵地		蔵骨器・須恵器
61	城山	住吉 城山	縄文～古代	包蔵地		蔵骨器・条痕文・御領式・青磁・西平式・野辺田式
62	住吉日吉神社	住吉 北小路	古墳～中世	包蔵地		須恵器・土師器・滑石釜・円面硯
63	東駄飼城	住吉 東駄飼城	古代	包蔵地		蔵骨器
64	飛熊	住吉 城下	古代	包蔵地		経筒
65	条里跡		古代・中世	生 産		

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 堀切門礎石周辺の調査

1 堀切門跡の立地について

堀切門跡は、東西に延びる舌状丘陵から南東方向に開口する浅い谷地形に所在する。ここは、古くから堀切集落（菊池市）と米原集落（菊鹿町）とを結ぶ連絡路としての役割を果たしており、現在の地形からも三つの道があったことが確認できる。一つは谷の開口部から延びてきており、南西壁際の堀切状地形を通る道である。もう一つは、これも谷の開口部から延びてきており、城壁中段のテラス状平坦面を通る中央斜面をつづら折れ状に登る道である。両者は中央斜面（城壁）上位付近で合流し、上方へと向かう。また、丘陵の尾根筋を通る「御倉払い」と呼称する道がある。この道も中央斜面上位で他の2道と合流し、北東方向へと抜ける。

このように、堀切門跡周辺は後世においても交通の要所としての役割を果たす。これは、ここが丘陵の南斜面のうち唯一の谷地形で、南から北への丘陵越えの最も容易な箇所であることに起因するものと思われる。

2 トレンチの設定について

第21次調査までの調査で城壁及び道路の構造については把握されたが、門礎石の原位置、城壁中段のテラス状平坦面と登城道との関係、登城道の経路の問題が課題として残されていた。今回の調査では上記3つの問題の把握を主目的とし、調査トレンチを設定した（第3図）。

門礎石の原位置の検出については、堀切状地形の底の傾斜が比較的緩やかになる変化点に直交する形で16、20トレンチを設定した。また、城壁中段のテラス状平坦面と登城道との関係を把握するために、9トレンチ（第21次調査）に隣接した15トレンチを設定した。15トレンチ以外にも10トレンチ（第21次調査）の拡張、その上方の堀切状地形の底に18トレンチを設定した。登城道の経路の把握については、4Cトレンチの一部掘り下げと19トレンチを設定した。このほか、城壁中段のテラス状平坦面とその上方のつづら折れ状の道の関係を把握するために17トレンチを設定した。

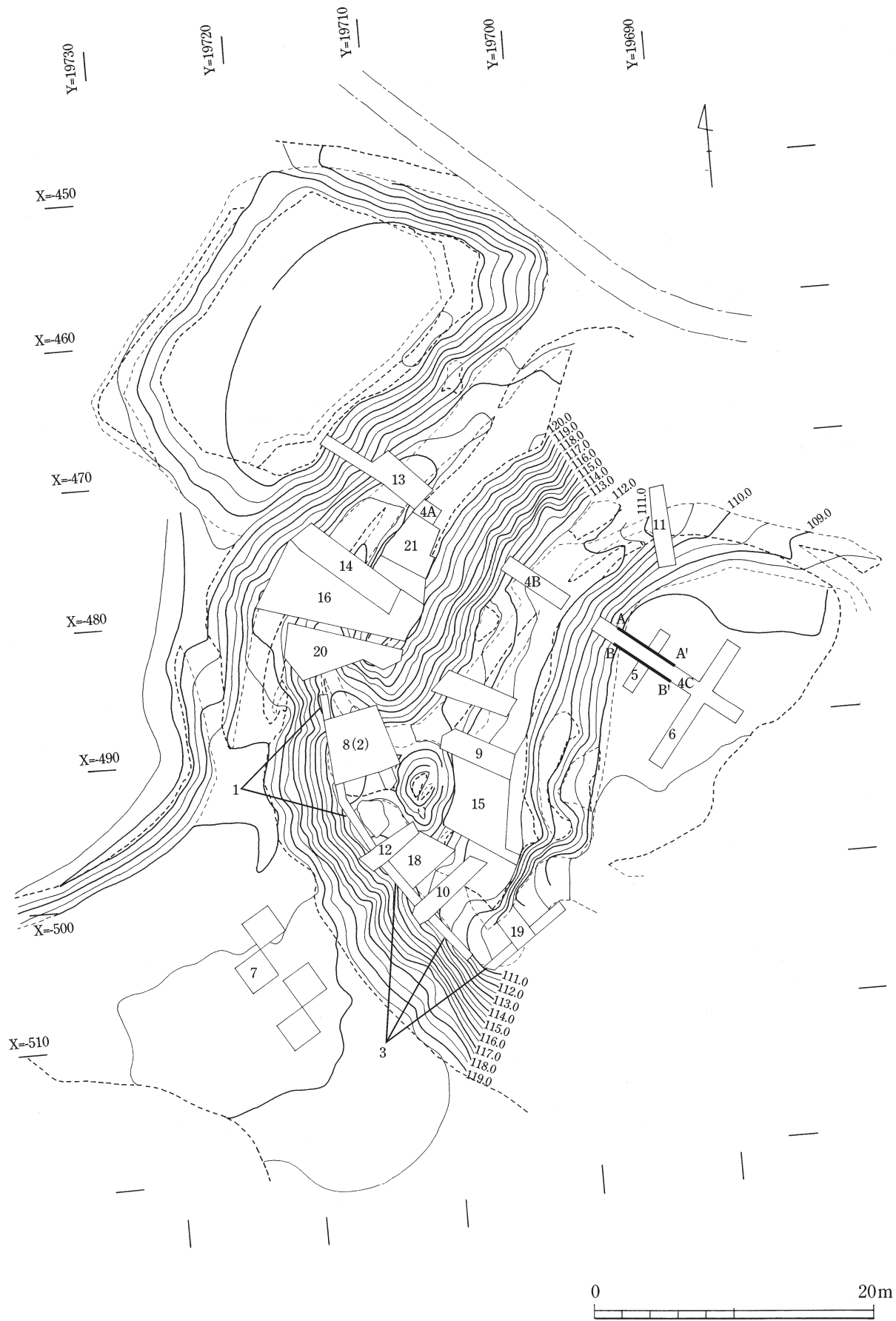
3 各トレンチの成果について

4Cトレンチ掘り下げ部（第4図）

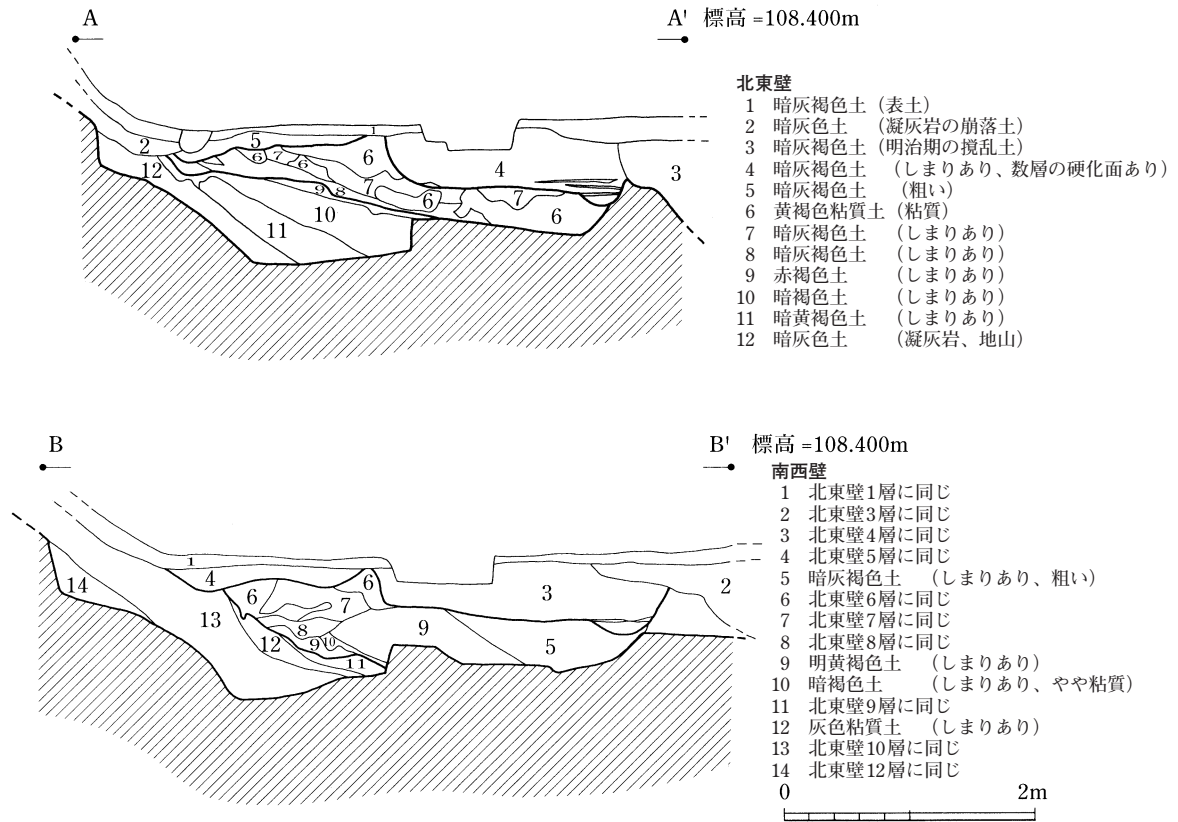
城壁下位に所在する比較的広い平坦面上に、谷の軸線に沿った形で細長く設定したトレンチが4Cトレンチ（第20次調査）である。調査時にトレンチ西際に硬化した面が確認されており、その硬化面が道路跡であるかを確認するため、トレンチ西際のみ部分的な掘り下げを実施した。

調査当初、確認された硬化面を地山と判断していたが、その下層から、北東壁断面上で底幅155cm、南西壁断面上で幅213cmの掘り込みが検出され、その掘り込みの東際にはそれぞれ幅34cm、深さ10cm（北東壁断面）、幅48cm、深さ10cm（南西壁断面）の溝状の掘り込みが検出された。また、その下層の北東壁6～8層、南西壁5～10層が覆土であることを確認した。

検出した掘り込みは断面的には片側溝を有す道路跡に似るが、平面的なプランを検出したわけではないため、現段階で道路跡と判断するのは難しい。また、時期的にも、遺物の出土が無いことやその下層が覆土であったため、古代の段階まで遡るか検証する必要がある。



第3図 堀切門跡トレンチ配置図



第4図 4cトレンチ掘り下げ部断面図

10トレンチ北東側拡張部 (第5図)

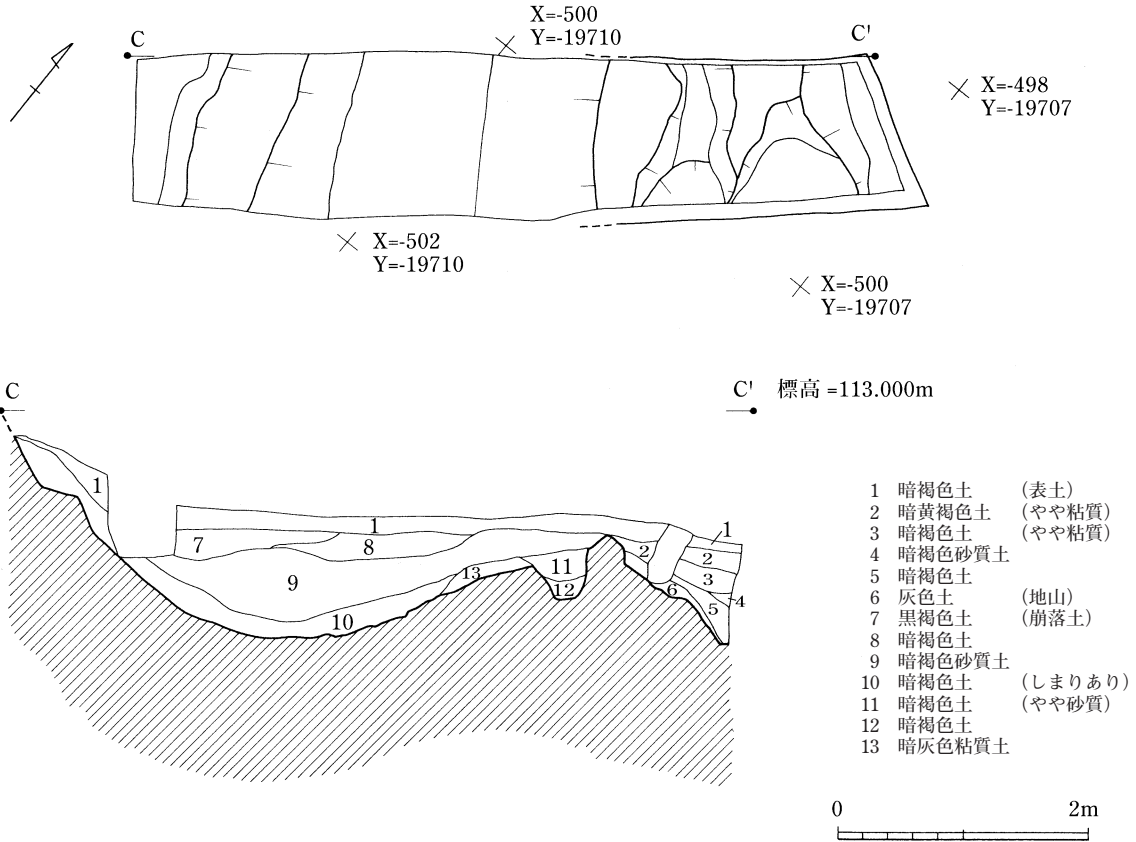
城壁中段のテラス状平坦面南西端の堀切状地形に直交する形で設定したトレンチが10トレンチ (第21次調査) である。今回の調査では、その北東方向のテラス状平坦面に向かい2.0m程拡張した。その結果、第21次調査で「東側への掘込み」としていたものが側溝の壁面であること、また、「堀跡」としていた箇所は道路面が水流により碗状に欠落したものであることが判明した。

東側溝の形状は残存部から幅42.0～58.0cm、深さ34.0cmの断面台形を呈し、底幅は34.0cmを測る。また、残存部から道路幅は283～304cmと想定される。西側溝は確認できなかった。東側溝のさらに北東側はテラス状平坦面方向に傾斜し下がる。この傾斜に伴う覆土は新しく、テラス状平坦面の開墾時の掘削により削平を受けたものであろう。

15トレンチ (第6図)

城壁中段のテラス状平坦面の南西隅に、9トレンチ (第21次調査) に隣接して設定したトレンチ (東西676cm×南北492cm) である。9トレンチ調査時に3面の貼り土 (黄褐色粘質土) を確認しており、その最上面の貼り土の平面的な検出を目標に掘削を開始した。しかし、最上面の貼り土の大半は開墾時の削平により消失しており、次面の貼り土まで掘り下げたところ、貼り土がトレンチ北東端から2/3程の範囲で確認された。このほか、トレンチ南西隅において堀切の道路面と同レベルの平坦面が確認された。

テラス部の貼り土は黄褐色粘質土で形成されており、ほぼ水平を保つ。また、南西隅の平坦面はテラス部の貼り土面から約80cm高くに位置し、開墾時の削平を受け平面三角形の形状で残存していた。表面には黄



第5図 10トレンチ実測図

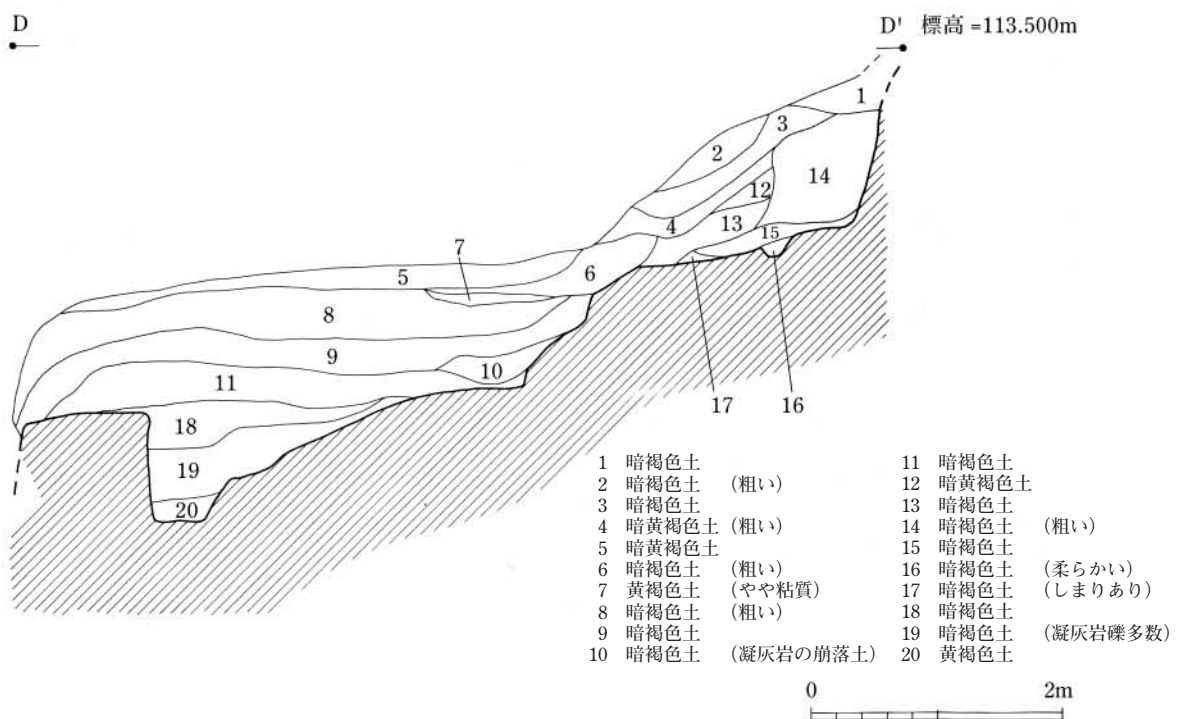
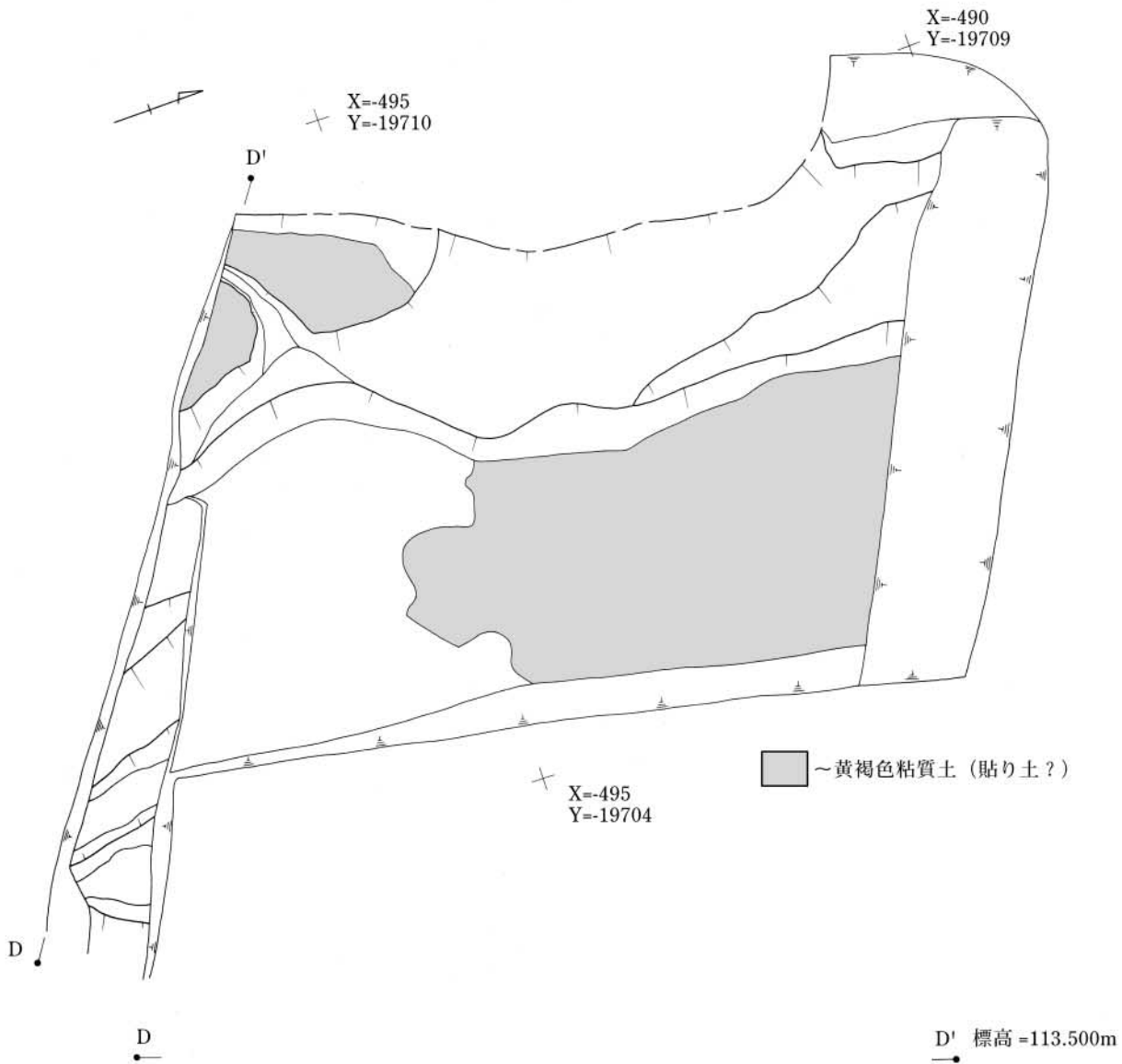
褐色粘質土が一面に見られるが、貼り土の可能性が高い。

開墾時の削平でその大部分が消失していたため、検出遺構相互の関連を判断するのは難しい。残存する南西隅の平坦面はテラス部方向に抜ける通路として機能していた可能性もあるが、その場合、テラス部貼り土面との比高差の検討が今後の課題として残る。

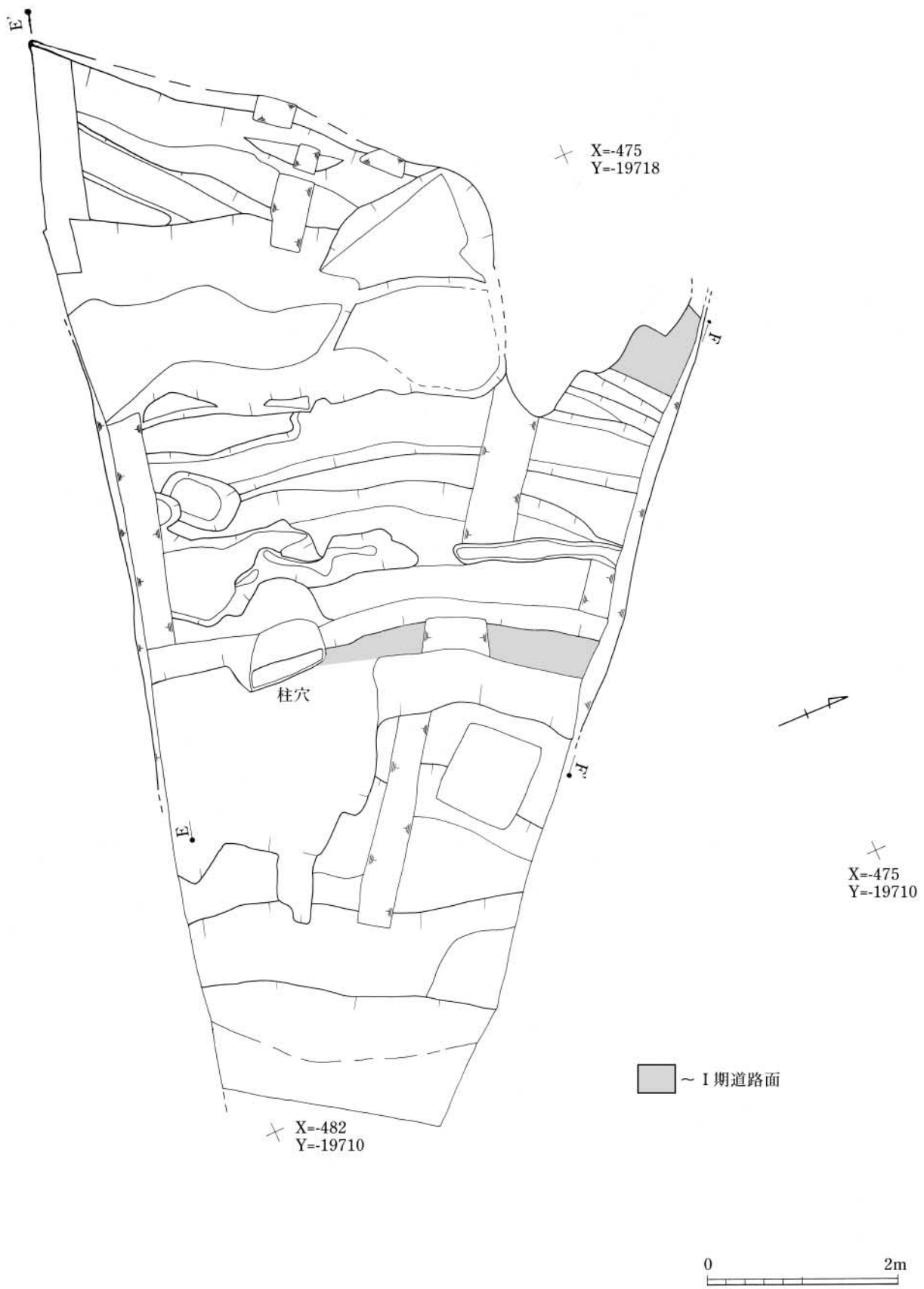
16トレンチ (第7～9図)

南西壁際の堀切状地形の傾斜が比較的緩やかになる変化点に直交する形で設定したトレンチ (1118cm×137～560cm) である。14トレンチ (第21次調査) に隣接する。当該箇所を設定した理由として、堀切状地形の傾斜の変化点であることや門礎石の以前所在した場所に近いことなどの諸条件から門跡が検出される可能性が高かったためである。調査の結果、古代の道路面の中央を掘り下げて後世の道路が造成されて、道路跡の大半は消失していたが、両肩部に道路跡が僅かに残存していた。また、柱穴1基も半載された状況で検出された。

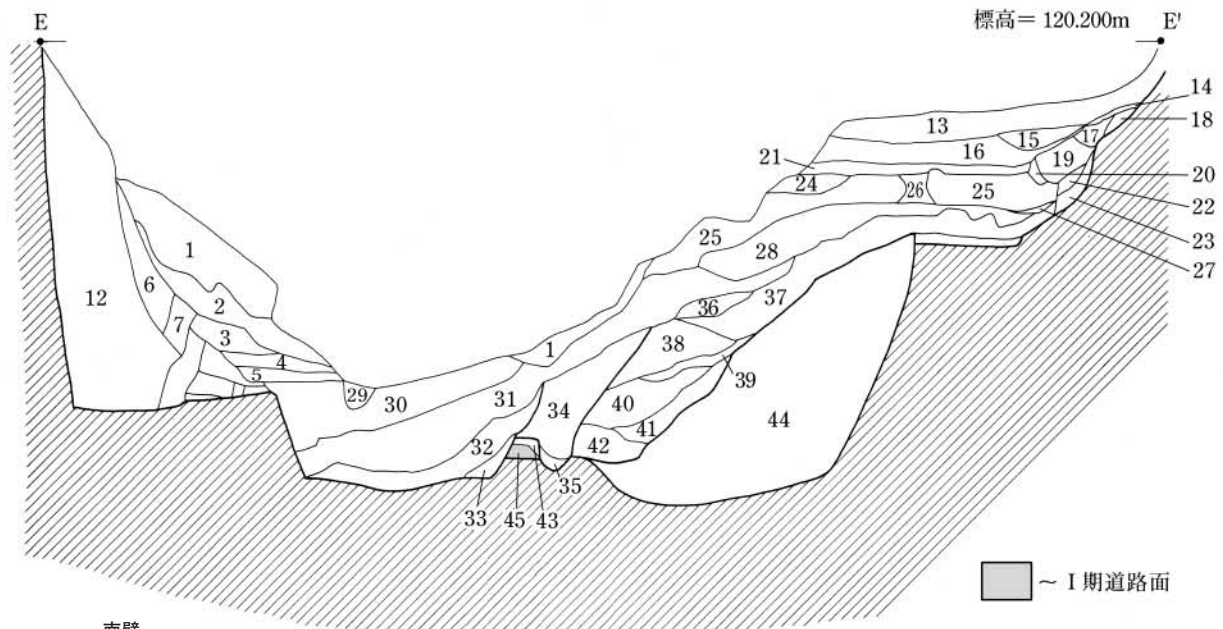
道路跡の幅は北壁近くの残存部から363～375mと想定され、南東側に僅かに傾斜するものの、ほぼ水平を保つ。柱穴は2/3程消失しており、残存部から柱穴の掘形は一辺82cmの方形で、深さは新しい道路跡の壁面において約96cmを測る。その壁面で径38cmの柱痕跡も確認された。埋土はしまりの強い灰黄色粘質土で、明確な分層は認められなかった。道路沿いで柱穴を検出したのはこの1基だけである。対になる柱穴が想定される箇所には大規模な攪乱 (南壁44層) を受け、その痕跡は消失していた。柱穴は1基のみの検出であったが、柱穴周辺はほぼ平坦で門礎石を置くのに十分な広さがあり、門跡に伴う柱穴の可能性は高い。門



第6図 15トレンチ実測図

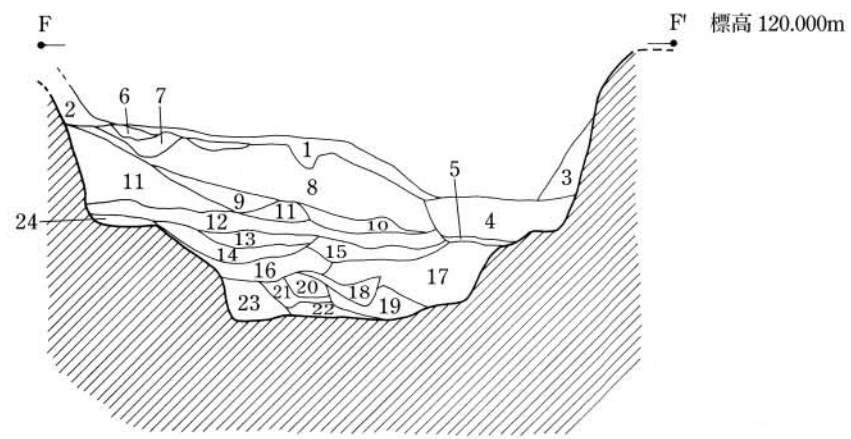


第7図 16トレンチ平面図



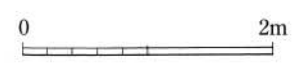
南壁

- | | | |
|--------------------|-------------------|------------------|
| 1 茶灰色土 (表土) | 16 黒茶色土 | 31 明赤褐色土 |
| 2 黄褐色粘質土 | 17 明橙色土 | 32 淡茶褐色土 |
| 3 灰茶褐色粘質土 (しまりあり) | 18 灰黄褐色土 | 33 灰白色土 |
| 4 灰黒色砂質土 | 19 灰茶褐色土 | 34 灰白色土 |
| 5 赤褐色粘質土 (しまりあり) | 20 茶褐色土 | 35 濃灰白色土 |
| 6 淡茶褐色粘質土 (しまりあり) | 21 灰黄褐色土 | 36 灰茶褐色土 |
| 7 淡黄褐色粘質土 (しまりあり) | 22 灰褐色土 | 37 灰白褐色土 |
| 8 灰黒色砂質土 | 23 灰白色粘質土 (しまりあり) | 38 濃茶色土 |
| 9 淡黒灰色砂質土 | 24 赤橙色土 | 39 赤橙色土 |
| 10 淡黄褐色弱粘質土 | 25 白茶色土 | 40 黄灰色土 |
| 11 灰黄褐色粘質土 (しまりあり) | 26 濃茶色土 | 41 淡灰色土 |
| 12 灰褐色粘質土 (砂粒多量) | 27 濃茶色土 | 42 淡茶褐色土 |
| 13 灰茶褐色土 | 28 黒茶色土 | 43 濃茶色土 |
| 14 黒茶褐色土 | 29 淡黒褐色土 | 44 濃灰茶色土 (しまりあり) |
| 15 赤褐色土 | 30 灰白色土 | 45 淡赤褐色土 |

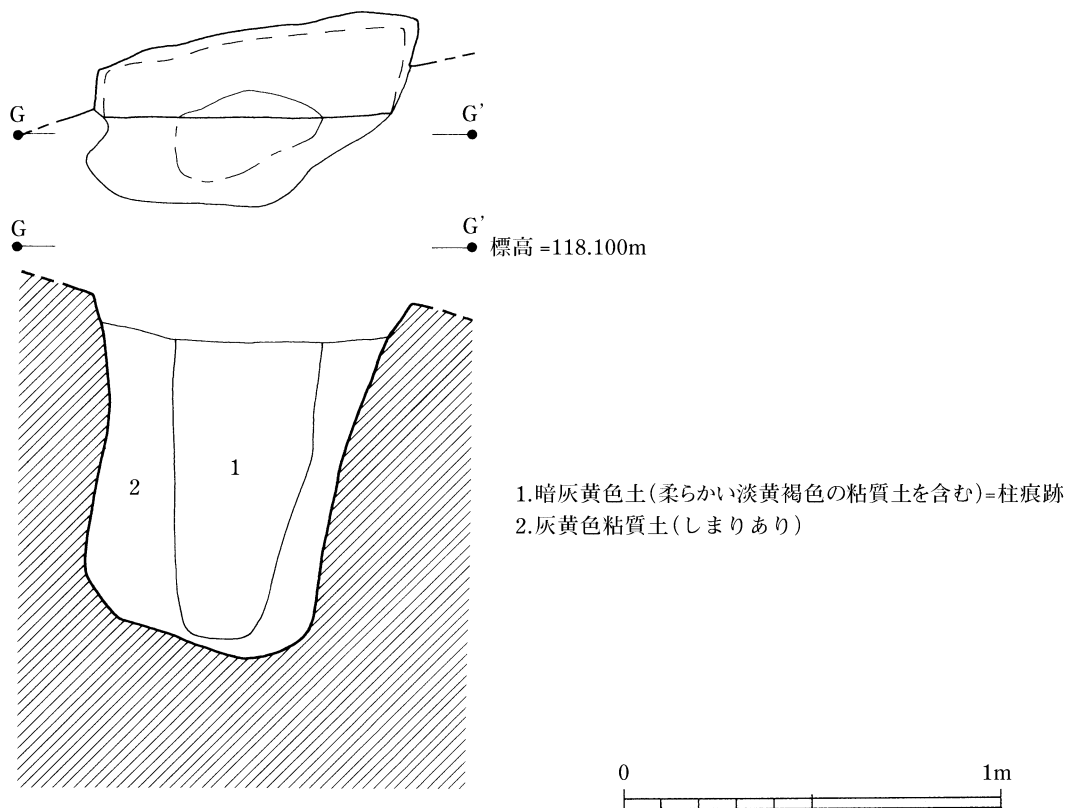


北壁

- | |
|-------------------|
| 1 暗褐色土 (しまりあり) |
| 2 淡褐色粘質土 (しまりあり) |
| 3 灰色土 |
| 4 茶褐色土 |
| 5 暗灰色土 |
| 6 灰色土 (しまりあり) |
| 7 暗褐色土 (しまりあり) |
| 8 灰白色土 (しまりあり) |
| 9 淡黄褐色粘質土 (しまりあり) |
| 10 淡黄褐色粘質土 |
| 11 灰白色土 (しまりあり) |
| 12 茶褐色土 (しまりあり) |
| 13 灰色土 (しまりあり) |
| 14 灰色土 (しまりあり) |
| 15 暗灰色土 (しまりあり) |
| 16 灰色土 (しまりあり) |
| 17 暗灰色土 (粗い) |
| 18 淡褐色粘質土 (しまりあり) |
| 19 暗褐色土 (しまりあり) |
| 20 灰色土 |
| 21 茶褐色土 (しまりあり) |
| 22 暗褐色土 (しまりあり) |
| 23 茶褐色土 (しまりあり) |
| 24 暗灰色土 (しまりあり) |



第8図 16トレンチ断面図



第9図 16トレンチ柱穴実測図

礎石の据え付け穴は確認できなかった。

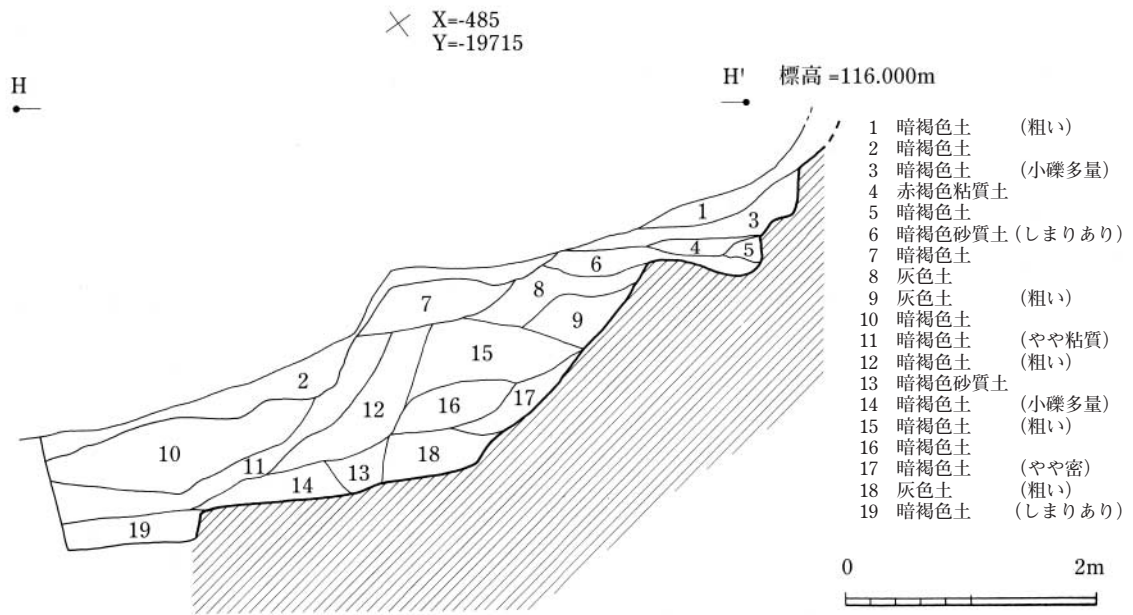
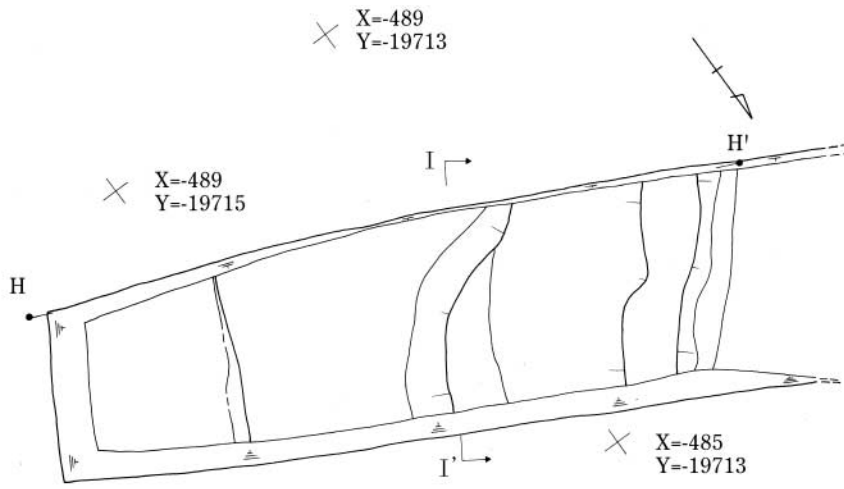
また、検出した柱穴より約1.2m下方のトレンチ南壁断面では後世の道路跡（Ⅲ・Ⅳ期）の掘り込みを除く2時期（Ⅰ・Ⅱ期）の道路跡が僅かに検出された。いずれも、柱穴上面の道路跡より約1.0m低い。Ⅰ期の道路跡については、一部に淡赤褐色粘質土の貼り土（南壁45層）が検出された。Ⅱ期の道路跡はⅠ期に比べ道路幅が狭くなり、深さ18cmの側溝を有する。これら道路跡は北東方向には延びず、南壁付近で終わり、柱穴上面の道路跡へと通じるものと思われる。これら2時期の道路跡から比高差1.0m、奥行き1.2mの柱穴上面の道路跡への連絡についてはⅢ期の道路の造成により消失していることから判然としないが、壁面が凝灰岩で形成されていることから、凝灰岩削り出しの階段が想定される。

17トレンチ（第10～14図）

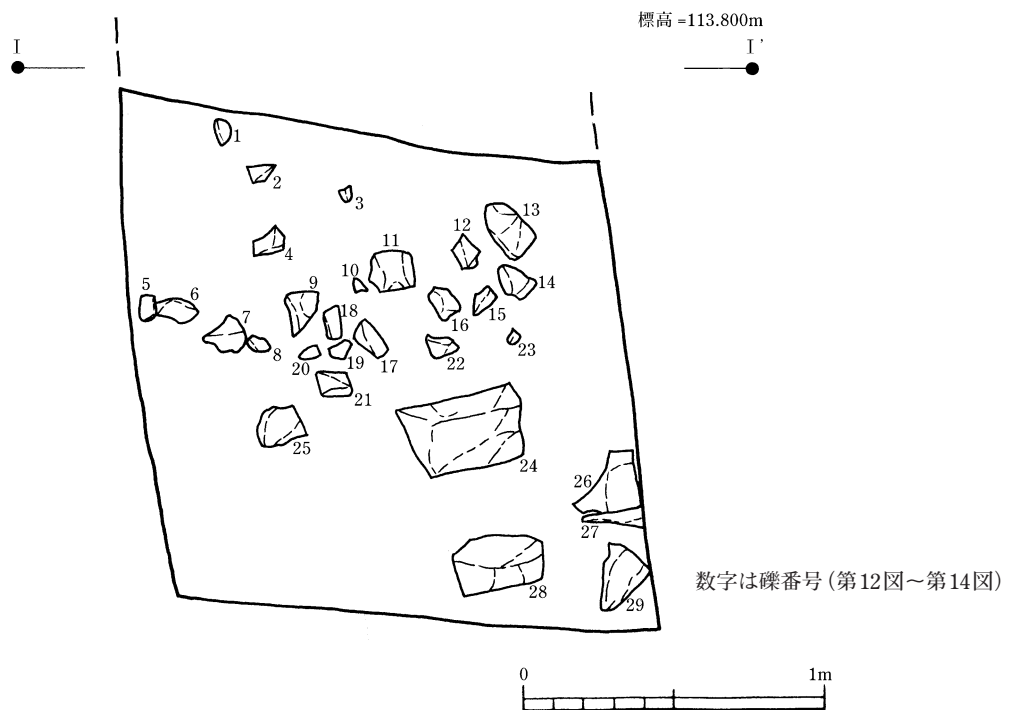
城壁中段のテラス状平坦面からその上方のつづら折れ状の道まで達するように細長く設定したトレンチ（136.0～182.0cm×640.0cm）である。城壁中段のテラス状平坦面では最上面の貼り土（黄褐色粘質土）までの掘削を実施したが、凝灰岩削り出しの城壁が検出され、その礫面に加工痕が確認された。

城壁の加工痕については、幅3.0～6.5cmで調整を加える方向は基本的には斜め上から斜め下へとなるが、左下がりか右下がりかについては一定性はない。

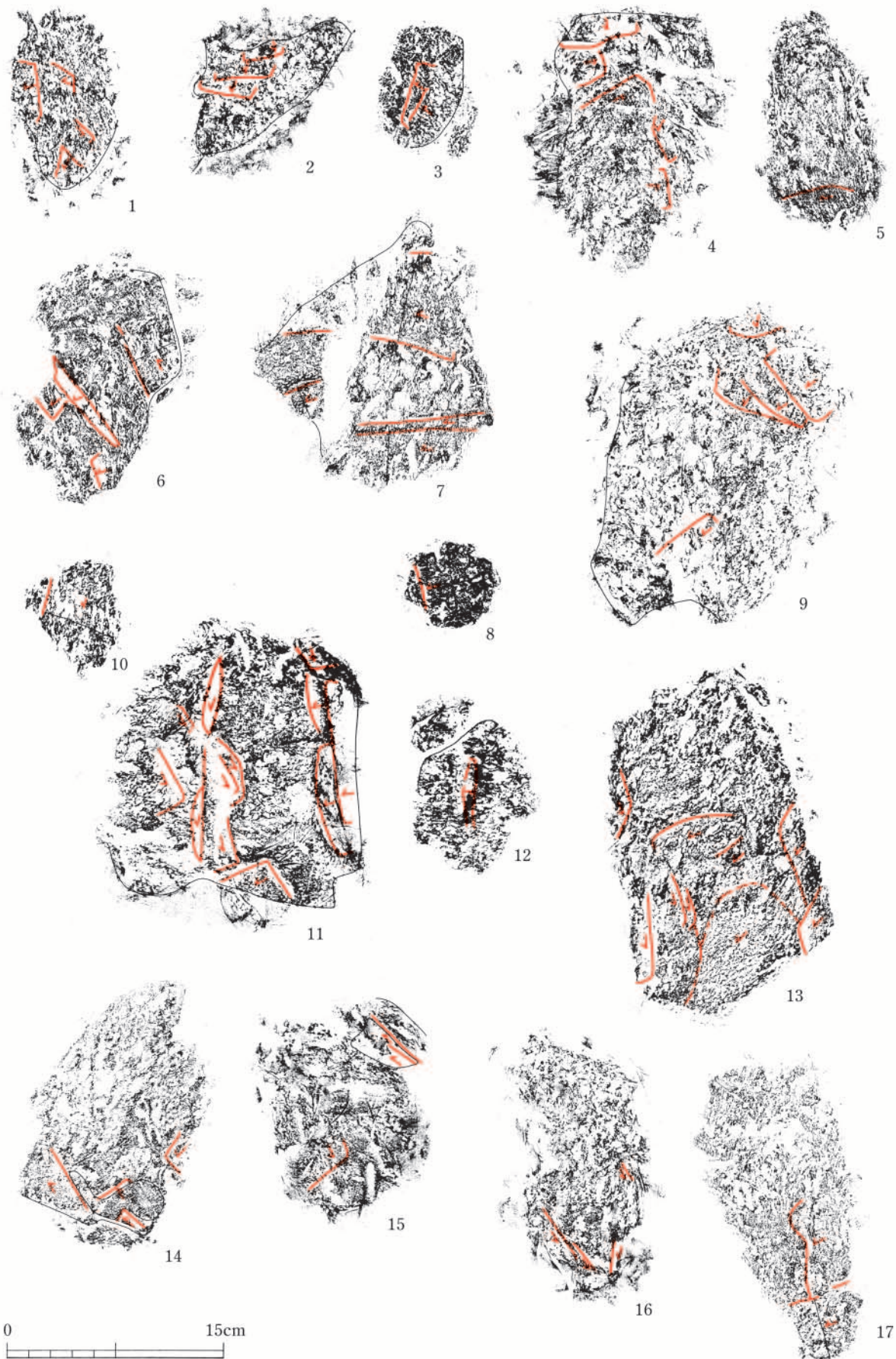
また、つづら折れ状の道については、幅1.62mの道路跡（6層上面）が検出されたが、城壁を明かに削って造成していることが確認された。



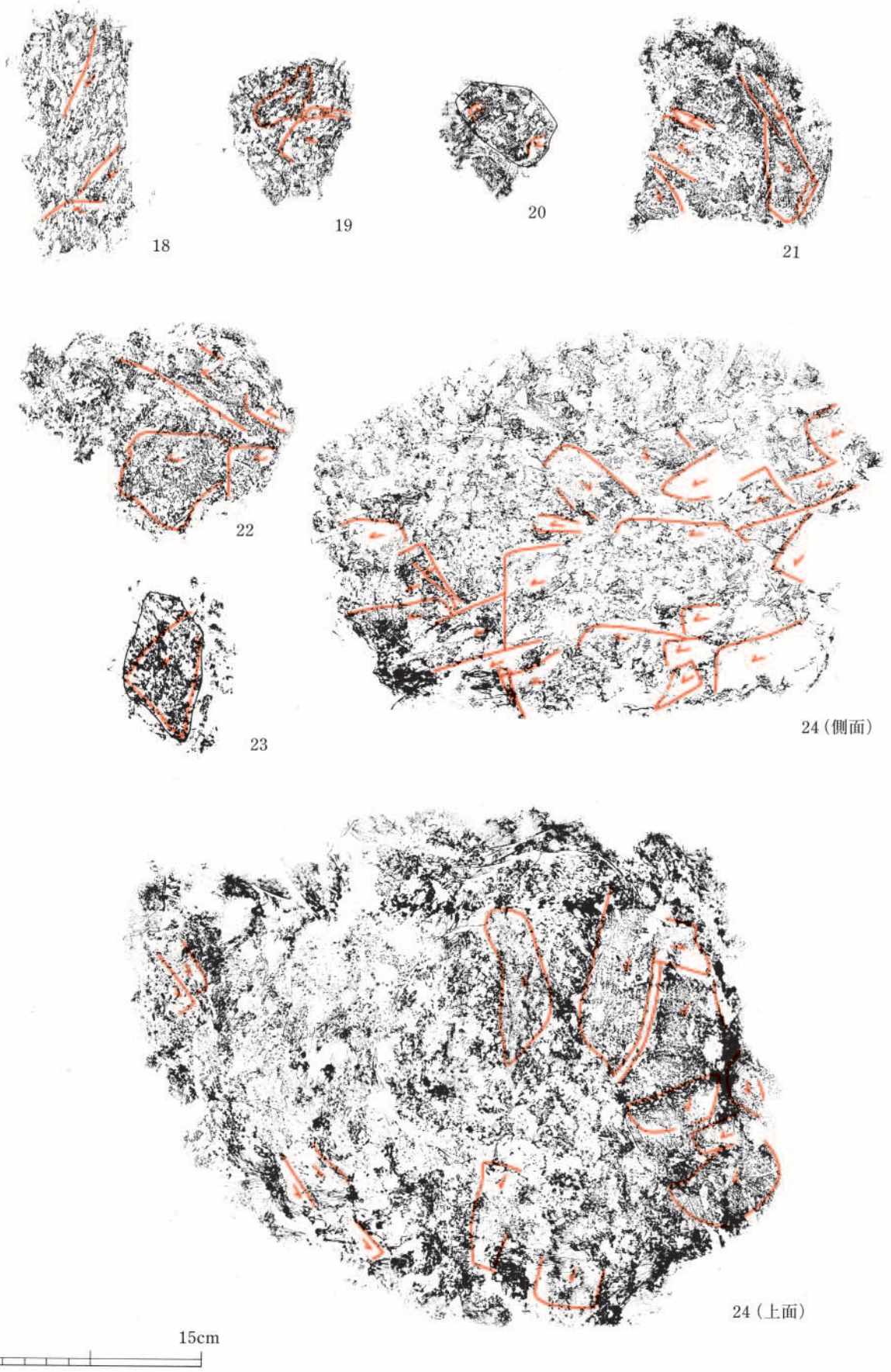
第10図 17トレンチ実測図



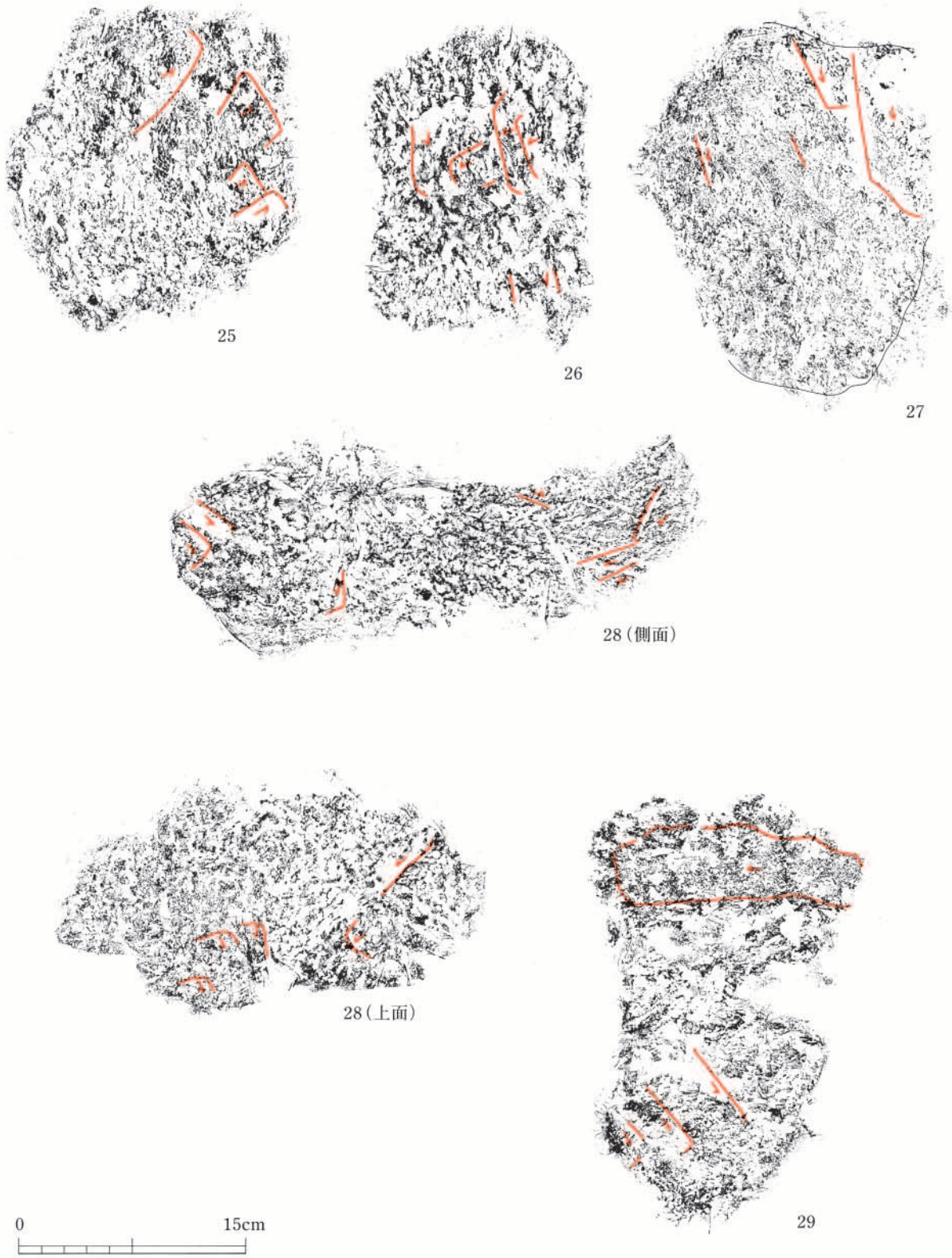
第11図 17トレンチ城壁加工痕模式図



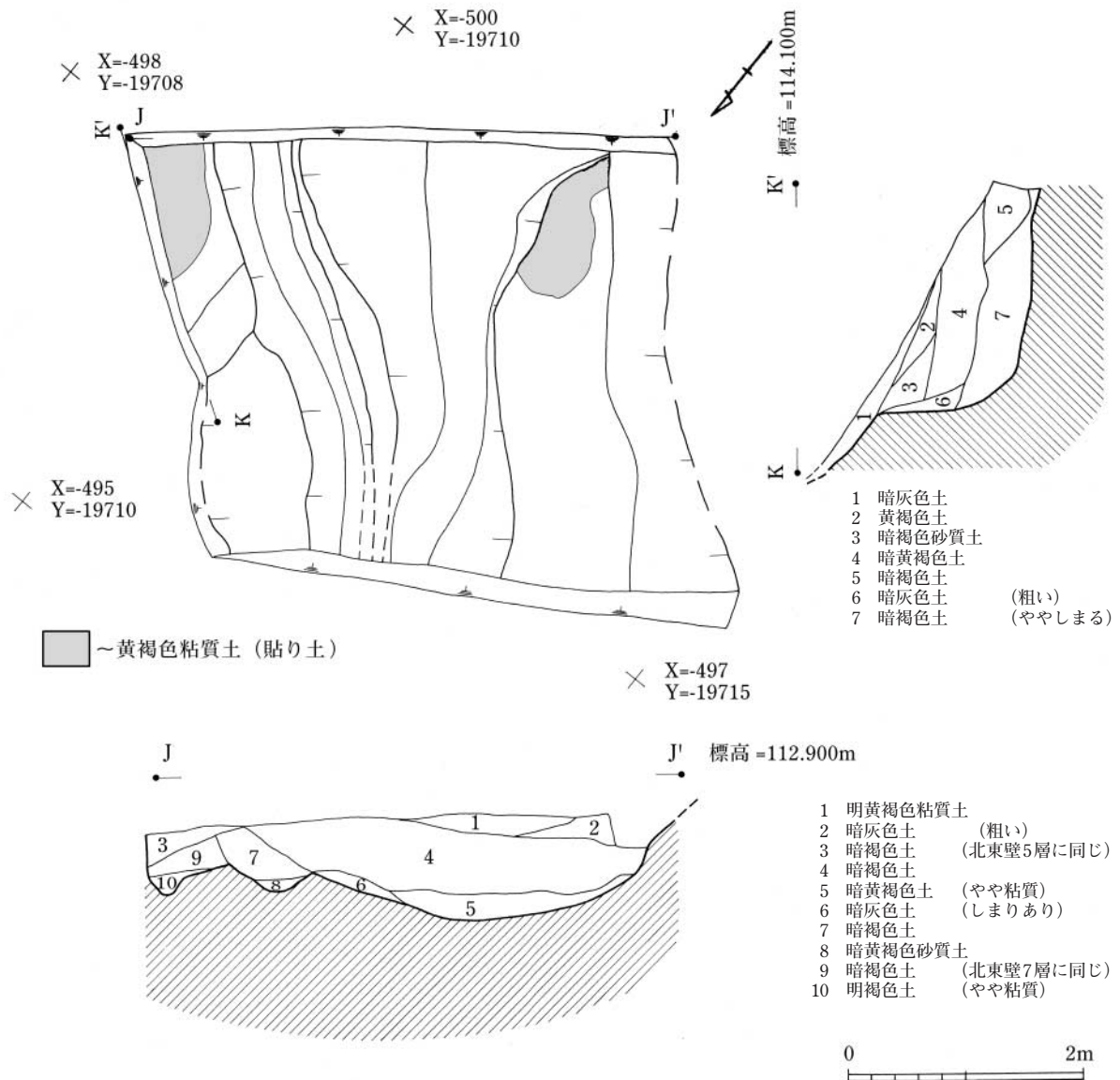
第12図 17トレンチ加工痕拓影図 (1)



第13図 17トレンチ加工痕拓影図 (2)



第14図 17トレンチ加工痕拓影図 (3)



第15図 18トレンチ実測図

18トレンチ (第15図)

10トレンチの上方、南西壁際の堀切状地形に設定したトレンチ(440~460cm×360~420cm)である。片側溝を有する道路跡が検出されたが、道路面は水流により攪乱され、その大部分を消失していた。また、トレンチ西隅において15トレンチ南西隅の平坦面に通じる平坦面が検出された。

道路跡の幅は205~273cmで、一部に貼り土が残存していた。側溝は幅65.0cmで、深さ15.0cmを測る。西隅の平坦面は東側の凝灰岩壁を削り出して形成されている。平坦面には黄褐色粘質土を貼って表面を調整している。

19トレンチ (第16図)

南西壁際の堀切状地形は斜面下方で北東方向に屈曲するが、その屈曲点のすぐ下に堀切と直交する形で設定したトレンチ(430cm×130cm)である。片側溝を有する道路跡を検出したが、道路面は水流により攪乱

されていた。両肩部にやや平坦面が残る。

道路跡の幅は232～242cmと屈曲点上方で検出された道路跡に比べやや狭い。道路面に貼り土の痕跡は認められなかった。北西側の側溝は幅32～38cmで、深さ42cmを測る。

20トレンチ (第17図)

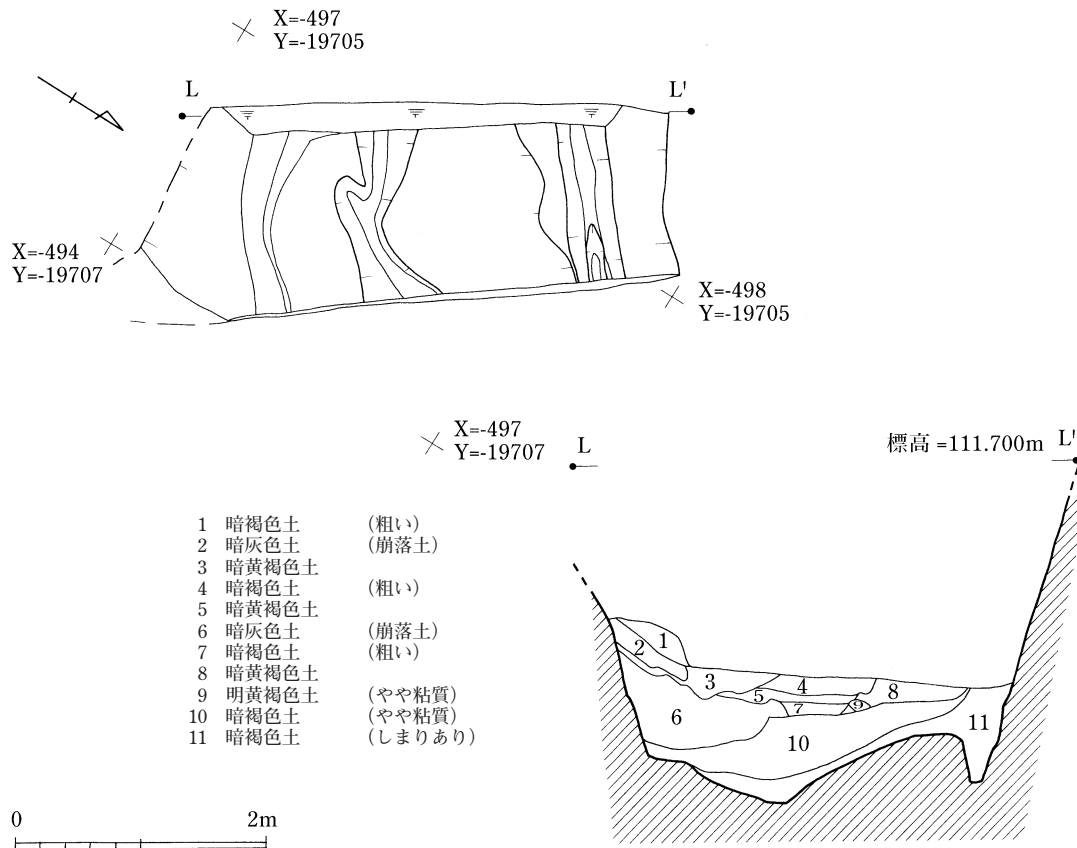
16トレンチの下方、堀切状地形に直交する形で設定したトレンチ (960cm×84～480cm) である。後世の道路 (Ⅲ・Ⅳ期) の造成によりかなりの部分消失していたが、2時期 (Ⅰ・Ⅱ期) の道路跡が検出された。

Ⅰ期は両側溝を有する道路跡で、道路幅は180～215cmと比較的狭い。東側溝は削平されており、検出幅35cm、深さ24cmで北側に向かって浅くなり、やがて消失する。西側溝は幅18cm、深さ6cmを測る。Ⅱ期の道路跡は大半を消失しており、一部に硬化面が残存する。

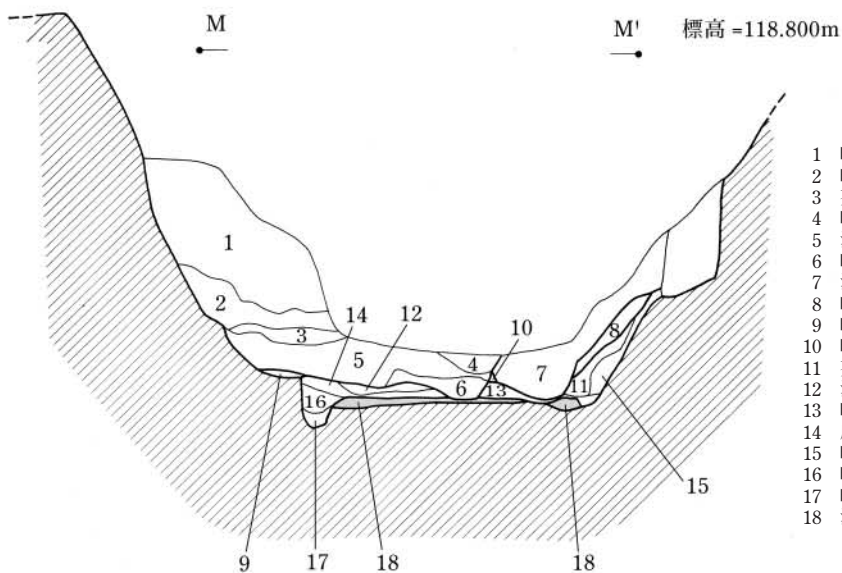
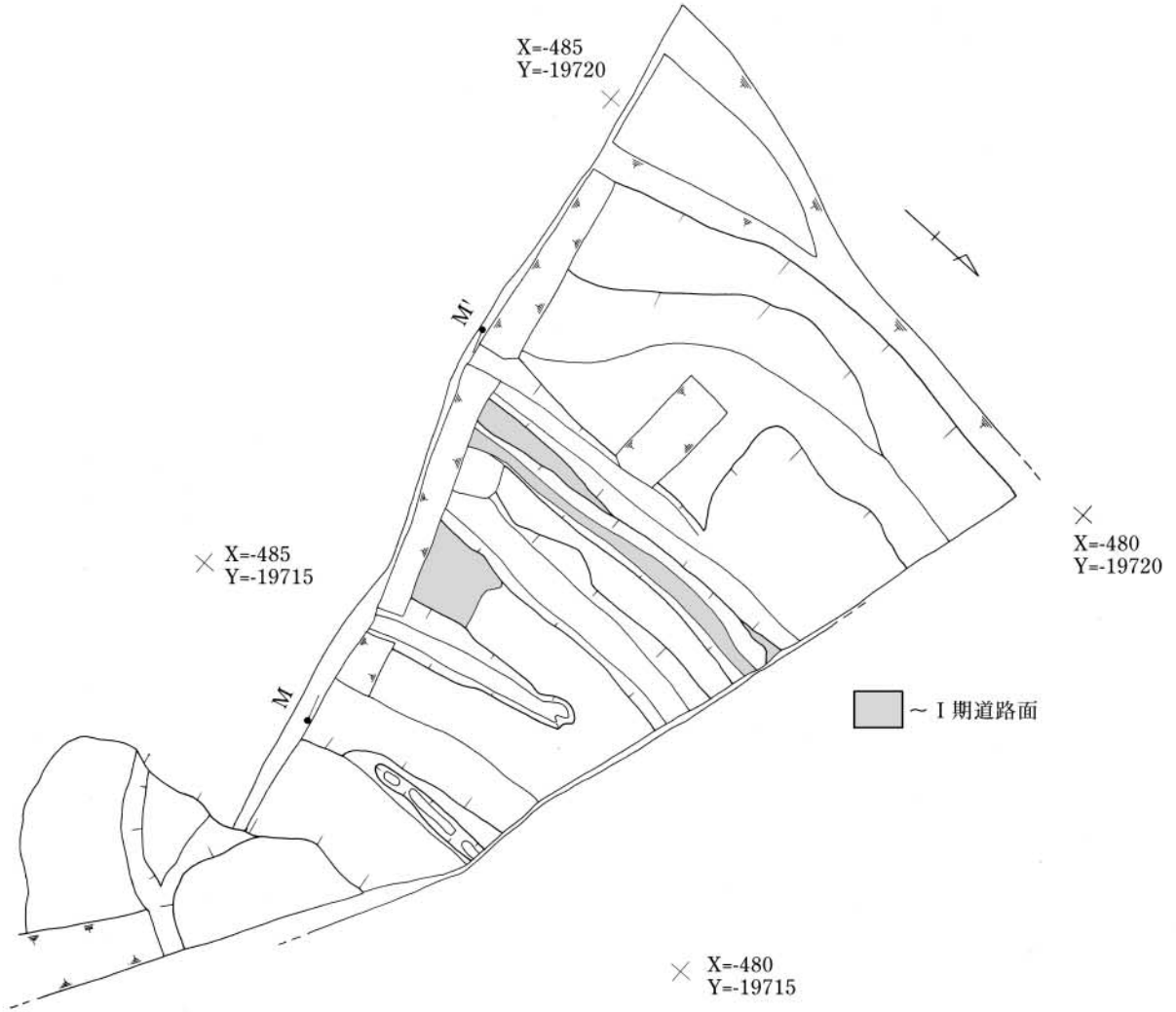
また、これら道路跡の東側の約70cm程上に細長い平坦面が所在する。この平坦面はⅢ期の道路跡で削平されており、もともとは東側溝までの幅があったものと思われる。その平坦面上に、南北端に小ピットを持つ検出長109cm、幅15cmの溝を検出した。遺構の性格については、両端に差込み突起をもつ板状のものを差込むための溝である可能性がある。

21トレンチ (第18図)

城壁上段のテラス状平坦面に設定したトレンチ (513cm×380cm) である。畑地として開墾されており、開墾時に削平を受けている可能性があった。調査の結果、城壁下位に向かいゆるやかに傾斜するのが見られるだけで、遺構等は検出されなかった。



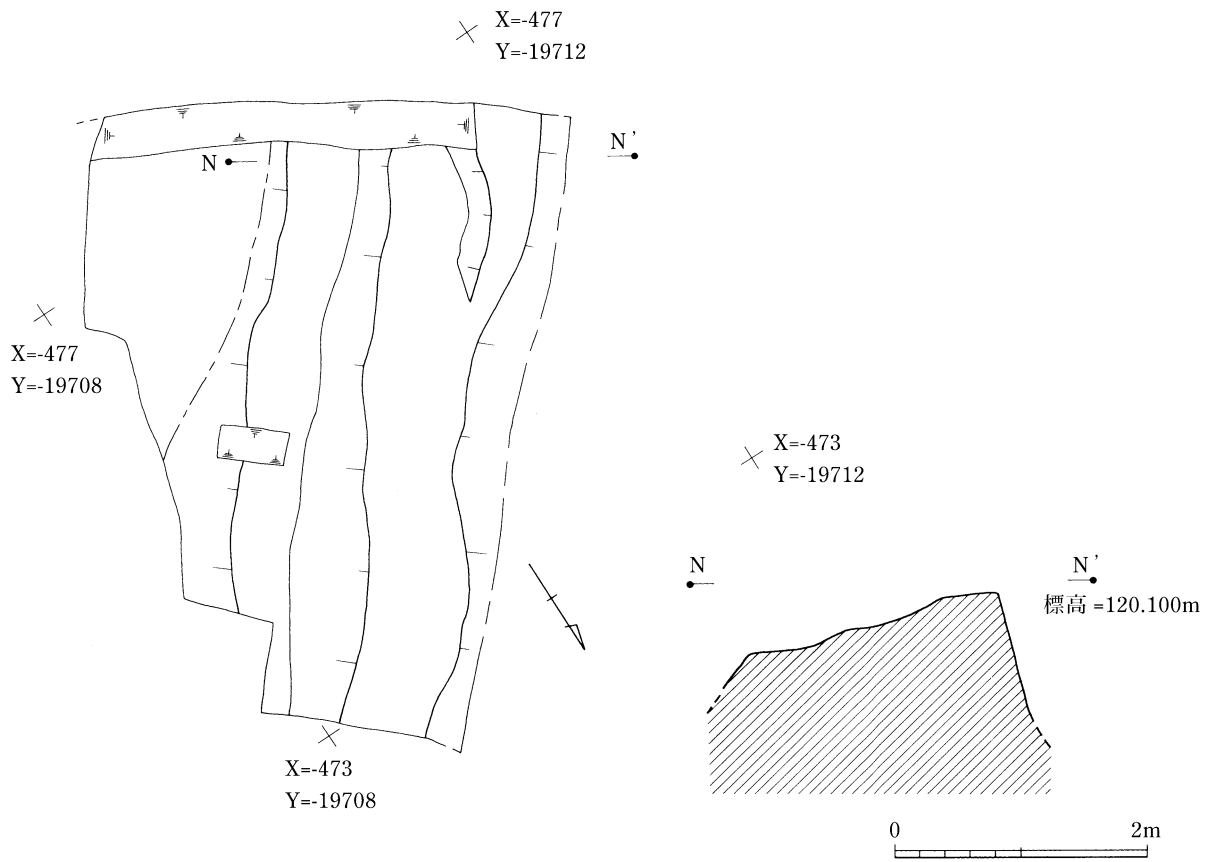
第16図 19トレンチ実測図



- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土 (粗い)
- 3 茶褐色土
- 4 暗褐色土
- 5 淡黄褐色土
- 6 暗茶褐色土 (粗い)
- 7 淡黄褐色土
- 8 暗褐色土 (やや粘質)
- 9 暗褐色土
- 10 暗褐色土 (やや粘質)
- 11 茶褐色土 (しまりあり)
- 12 淡黄褐色土 (しまりあり)
- 13 暗褐色土
- 14 灰褐色土
- 15 暗褐色土
- 16 暗褐色土 (粗い)
- 17 暗赤褐色粘質土
- 18 淡黄褐色土 (しまりあり・I期道路路面)



第17図 20トレンチ実測図



第18図 21トレンチ実測図

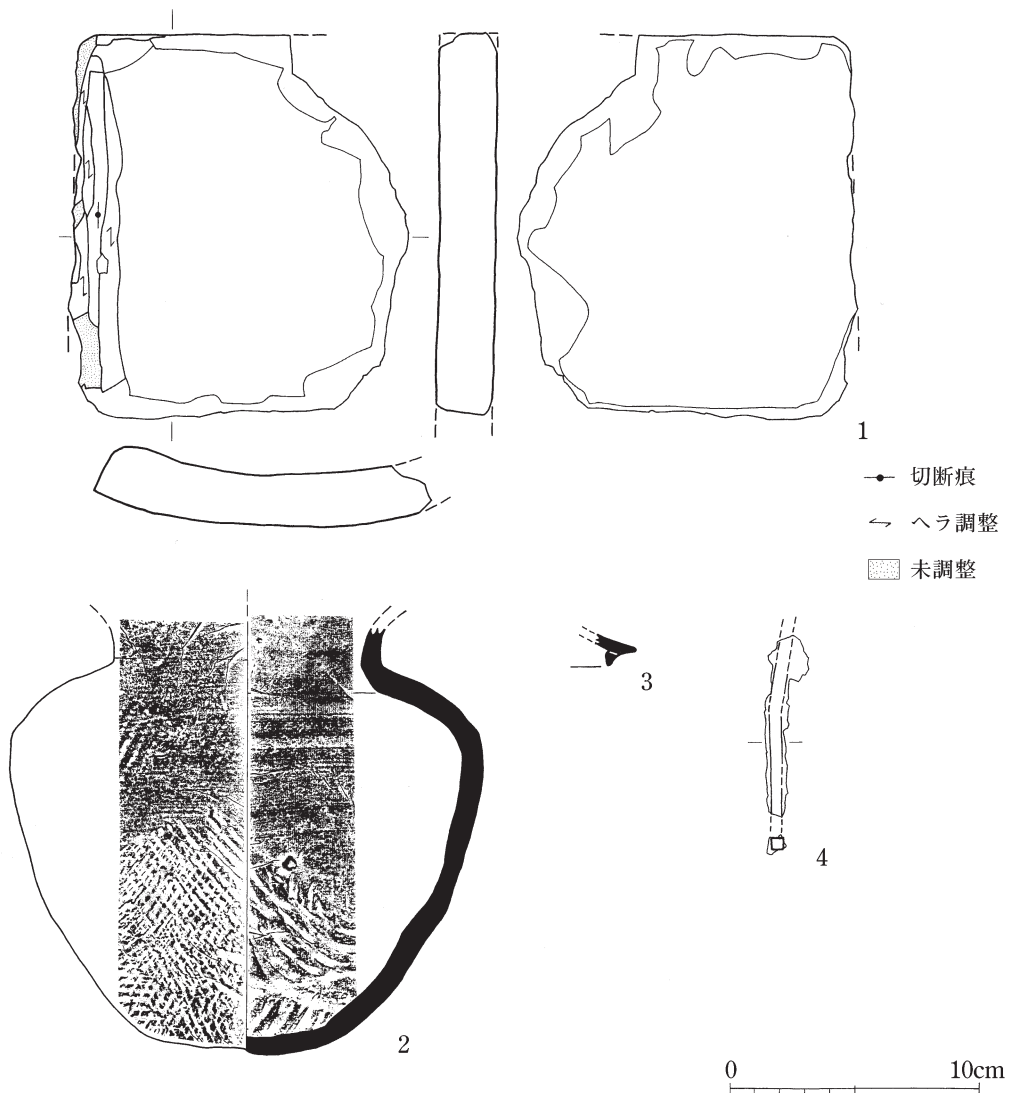
4 遺物について

堀切門跡周辺の出土遺物は、門という生活空間でない施設の性格上、極めて少ない。また、集落と集落をつなぐ生活道路として後世まで利用されていた関係で、明確に遺構に伴い出土したと判断できる遺物は皆無である。以下に紹介する遺物は、いずれも表土あるいは後世の攪乱土中からの出土で当時の遺物と判断できたものである。(第19図)

1は第21次調査時に9トレンチの表土層から出土した平瓦片である。残存部位は広端部で凹面・凸面ともナデ調整が施されている。

2、3は須恵器片である。2は第21次調査時に城壁下段平坦面の表土層から出土した甕片である。小型品で胴部最大径が上位にあり、底部は丸みを帯びる。頸部は外反しながら立ち上がる。胴部外面の上位3分の2程までは丁寧なナデ調整を施しているが、底部付近は不整方向の細長の格子タタキ痕が残る。また、胴部内面も上位2分の1程までは丁寧なナデ調整を施しており、底部付近は同心円文の当て具痕が残る。底部内面は平底を意識し、ケズリ調整を施している。3は第21次調査時に4Bトレンチ周辺で表採された蓋環の蓋口縁部片である。口縁端部はやや丸く納める。かえりは口縁部近くで内傾し端部付近で外反させ、端部はやや尖る。端部は口縁部より下位に延びる。

4は後世の道路跡の掘り込みの凝灰岩壁際から出土した鉄釘である。残存長7.2cm、幅0.5cmの角釘である。先端部と基部ともに破損している。



第19図 堀切門跡出土遺物実測図

第2節 池跡の調査

1 基本層序と調査区

池跡の基本層序について（第3表）

池跡では、第21次調査時にD地区南壁で検討した層序を基本層序としており、E・F地区ともその層序に基づき調査を実施した。以下は、その層序の概要である。

①層は池跡の最上層となる。建物跡が集中する長者原地区でも確認された層であり、建物跡を覆うⅢ層（古代の遺物が主に包含される）の上面にあたる。近世以降の遺物が主に含まれる。

②層～⑬層は粘土層であり、池跡が古代に利用された期間に堆積した層と考えられる。粘土層より出土する遺物は7世紀後半～9世紀後半と時期幅があり、特に⑧層出土の遺物が多い。各層の細かな堆積年代については今後検討が必要である。

⑭層・⑮層は池跡が形成される以前に堆積した砂質土層である。⑮層からは縄文時代後・晩期の土器と弥生時代後期の土器が出土する。⑮層が堆積した時期は、水を貯えるための池ではなく、湧水地帯の様な環境が想定される。

第3表 土層基本層序表

層序	名称	所見	備考	
①	暗褐色土	粘質で、赤色が強い。カーボン混入	部分的な層	
②	青灰色粘土	カーボン、黄褐色粒混入		
③	黒色粘土	砂粒、カーボン、黄褐色粒混入		
④	青灰色粘土	カーボン、黄褐色粒混入		
⑤	黒色粘土	カーボン、黄褐色粒混入		
⑥	青灰色粘土	カーボン、黄褐色粒混入		
⑦	淡褐色粘土	カーボン、砂粒混入。下部に灰色粘土が多い。		
⑧	茶褐色粘土	カーボン、黄褐色粒混入。2～3cm大の礫含む。		遺物を多量に含む。
⑨	灰褐色粘土	カーボン、黄褐色粒混入		
⑩	青灰色粘土	カーボン、1～2mmの砂粒混入		⑬層との境に、約1cm程の炭化物層 縄文後・晩期、弥生後期、石器を含む
⑪	青灰色粘土	⑩層よりやや黒い。カーボン混入		
⑫	灰緑色粘土	下部に固くしまる部分がある。固い部分は青緑色を呈し、砂粒が多い。カーボン混入		
⑬	淡黒色粘土	カーボン、砂粒混入。		
⑭	灰黒色粘土	砂粒多量に含む。下部に約2cmの幅で淡黒色の砂層が部分的に入る。		
⑮	黒茶褐色砂礫土	多量の小木質片を含む。		

調査区の設定について（第20・21・22図）

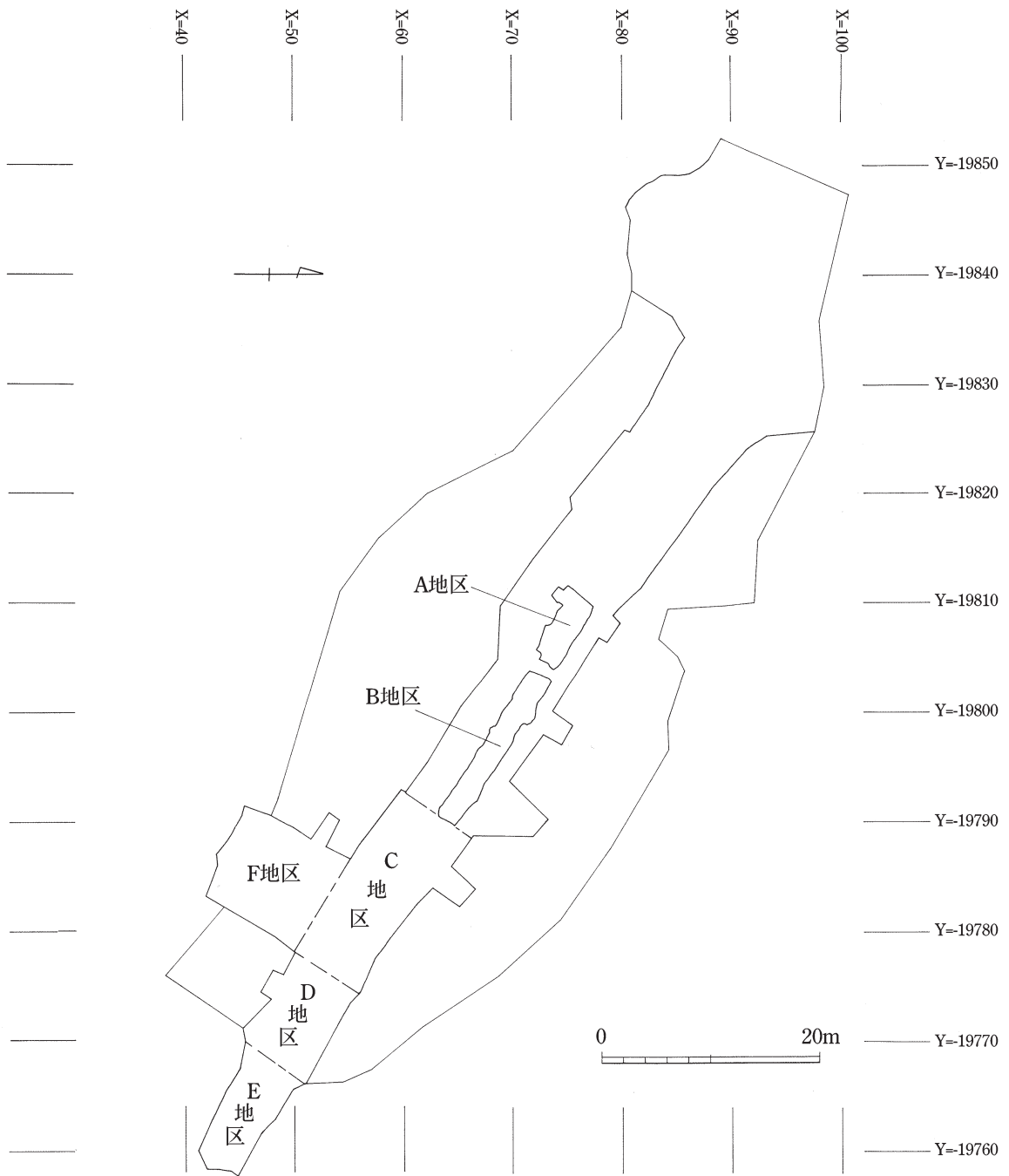
第22次調査では新しく調査区を設定することなく、C地区南壁の再調査とE・F地区の未掘削部分の掘下げを実施した。C地区南西壁では、第20次調査時に土層断面上で検出された堤防状遺構の再調査を実施した。また、E・F地区では、前回の調査で検出された池際を除く未掘削部分について掘下げを実施し、そのうちのF地区については、C地区南壁上に一部露出していた木組遺構（第20次調査）の全面調査を目的とし、木組遺構の形状を想定した部分的な掘下げを実施した（450cm×425cm）。

今回の報告では、第21次調査で検出されたE地区の池際南東端とF地区の池際南西端の調査成果についても掲載した。

2 遺構について

C地区南西壁（第23図）

第19次調査の際検出された堤防状遺構の再確認のため、C地区南壁の土層断面において再調査を実施した。



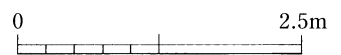
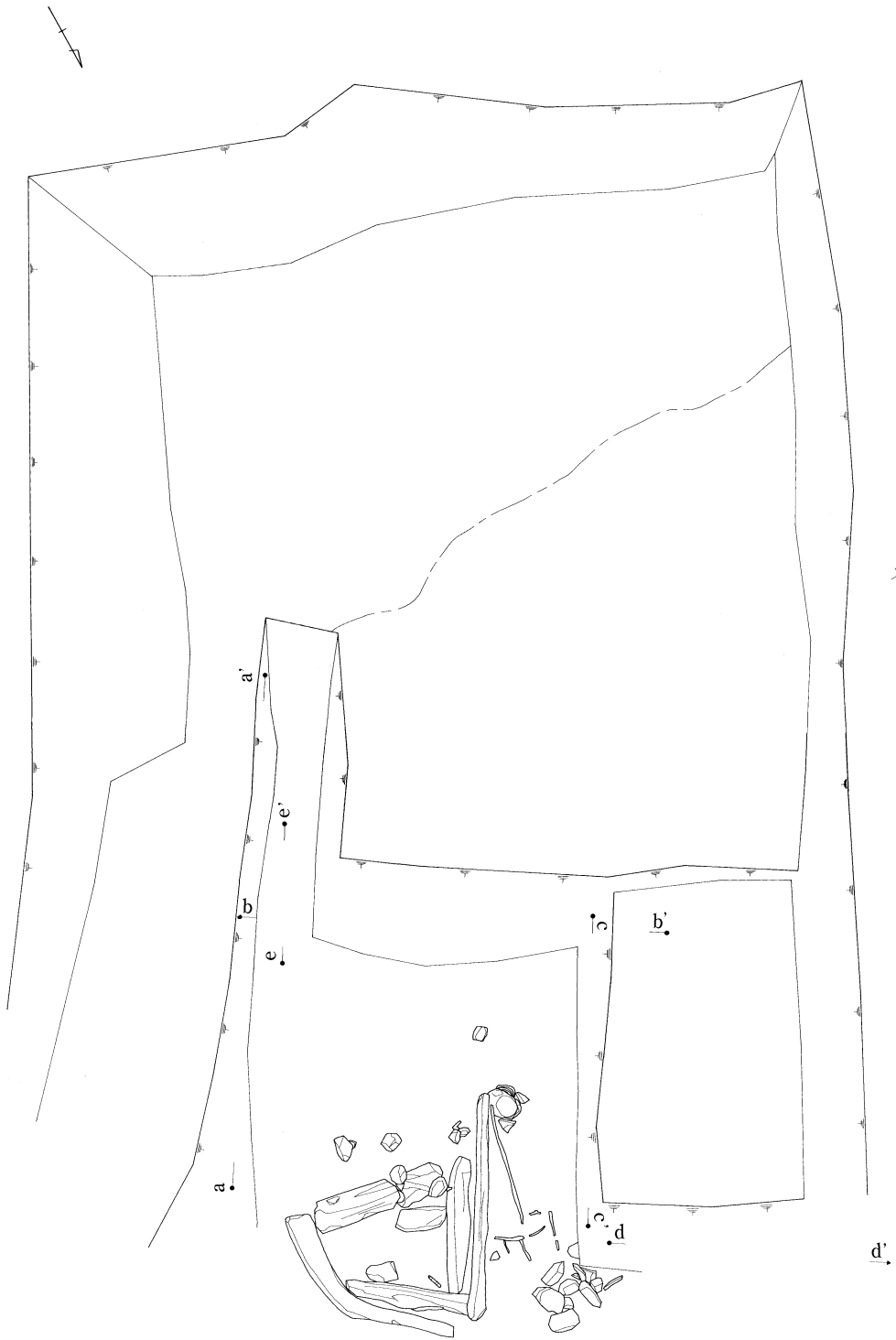
第20図 第22次調査箇所配置図

X=43
Y=-19782 ×

× X=43
Y=-19790

× X=51
Y=-19790

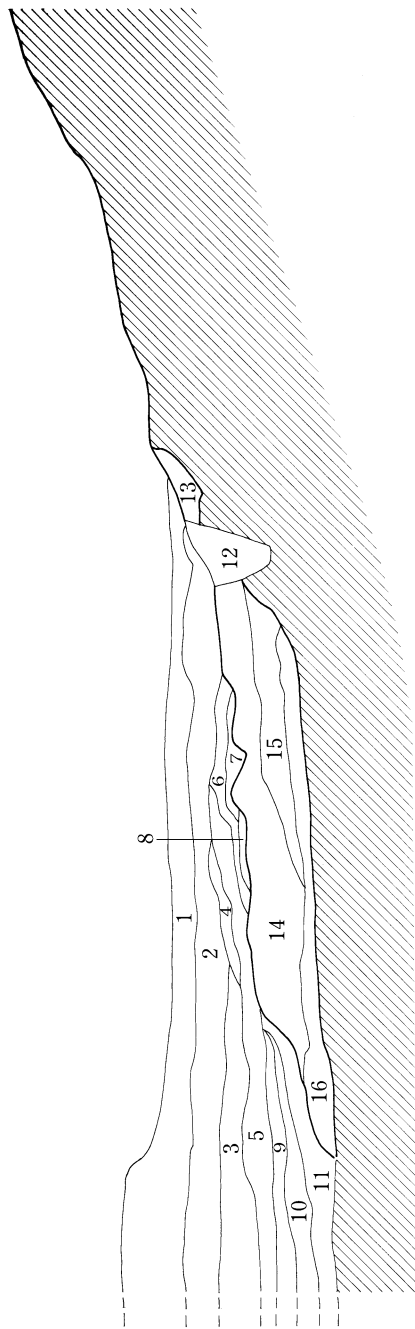
× X=58
Y=-19782



第21図 28TC・F地区土層断面ポイント

a

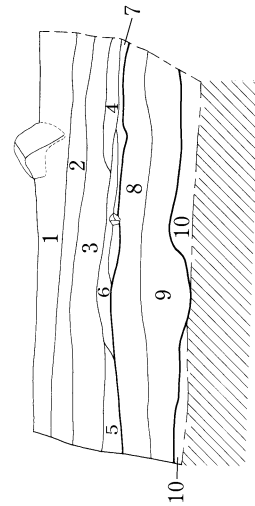
a' 標高 = 124.500m



- 1 黒色粘土 (基本層位⑤層)
- 2 青灰色粘土 (基本層位⑥層)
- 3 淡褐色粘土 (基本層位⑦層)
- 4 褐灰色粘土 (東壁⑥層に同じ)
- 5 淡黄灰色粘土 (東壁⑧層に同じ)
- 6 灰黒色土 (東壁⑩層に同じ)
- 7 青灰色粘土 (基本層位⑫層)
- 8 灰緑色粘土 (砂礫層)
- 9 灰緑色土
- 10 緑黄色土

b

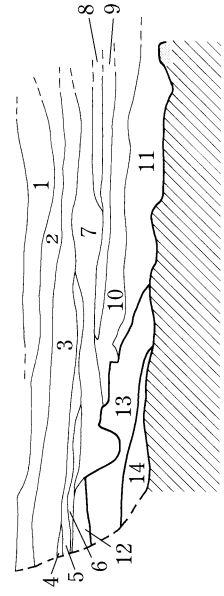
b' 標高 = 123.300m



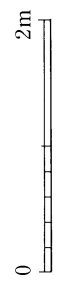
- 1 黒色粘土 (基本層位⑤層)
- 2 青灰色粘土 (基本層位⑥層)
- 3 淡褐色粘土 (基本層位⑦層)
- 4 褐灰色粘土 (炭化物多量)
- 5 淡黄灰色粘土 (基本層位⑧層)
- 6 黄灰色土 (やや粘質)
- 7 灰黒色土 (基本層位⑨層)
- 8 青灰色粘土 (基本層位⑩層)
- 9 青灰色粘土 (基本層位⑪層)
- 10 明青灰色粘土
- 11 青灰色粘土
- 12 黄灰色粘土
- 13 黄灰色粘土
- 14 灰緑色粘土
- 15 灰緑色粘土
- 16 (基本層位⑫層)

c

c' 標高 = 123.300m



- 1 黒色粘土 (基本層位⑤層)
- 2 青灰色粘土 (基本層位⑥層)
- 3 淡褐色粘土 (基本層位⑦層)
- 4 褐灰色粘土 (南壁⑥層に同じ)
- 5 灰緑色粘土 (基本層位⑧層)
- 6 暗灰褐色粘土 (基本層位⑨層)
- 7 茶褐色粘土 (基本層位⑩層)
- 8 暗褐色粘土 (基本層位⑪層)
- 9 青灰色粘土 (基本層位⑫層)
- 10 青灰色粘土 (基本層位⑬層)
- 11 青灰色土 (南壁⑧層に同じ)
- 12 灰緑色粘土 (基本層位⑭層)
- 13 灰緑色土
- 14 緑色土



第22図 F地区掘り下げ箇所断面図

当初、堤防状遺構は低く考えられていたが、土層の細かな観察からそれ以上の高まりであることが判明した。

断面形状は、底幅386cm、高さ73cmのやや台形状を呈する。土層構造については、最下部に黄褐色砂礫層（地山）を高き22cm程を削り出し、そのすぐ上層に、木屑が比較的多く含まれる明灰色粘土層（21層）が高さ4～21cmで認められる。基本的にはこの上層は粘土層であるが、砂粒が多く含まれる層（15、19層）が部分的に認められた。

工法的には、削り出した地山の上に粗朶を敷き（敷粗朶工法）、その上に粘質土と砂質土を交互に盛土し、土堤を築いている。やや粗雑な感があり、版築かどうかは今後の検討が必要である。また、断面形状についても欠落した可能性があり、平面的な調査が今後の課題といえる。

F地区SX01（第24図）

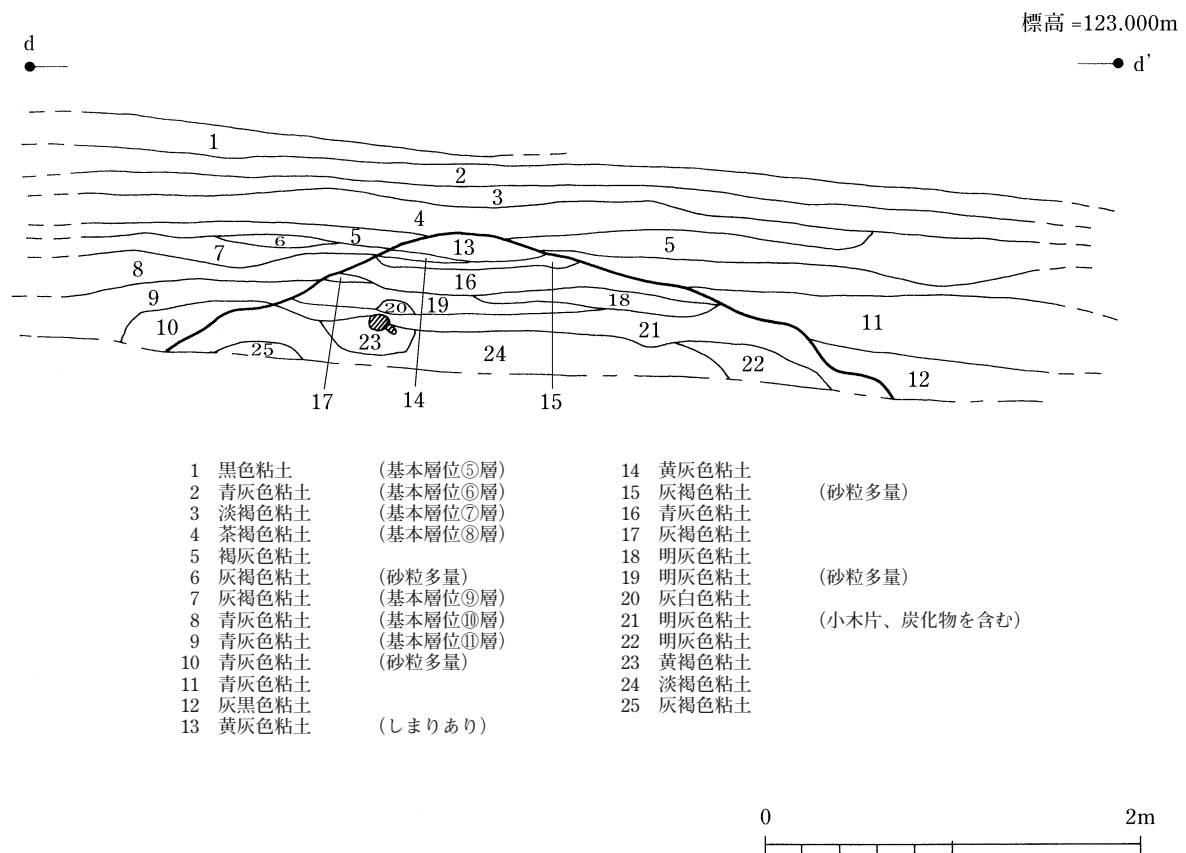
F地区掘り下げ箇所において、⑧層中から比較的残りのよい土器片がまとまって出土した。これら土器片から4点の土器（第33図3、11、14、15）が復元された。

いずれも原位置に近いものと思われ、祭祀跡の可能性はある。しかし、土器に時期幅があり、それをどう捉えるかという問題が残る。今後、類似遺構が発見されることに期待したい。

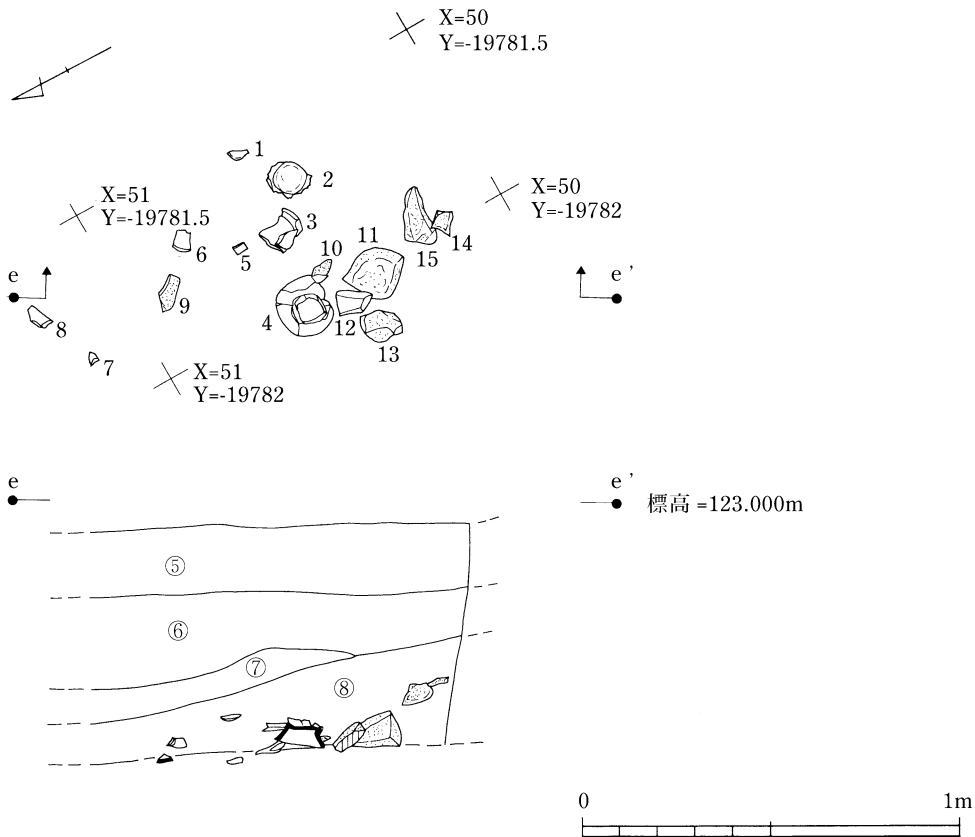
F地区木組遺構（第25図）

木組遺構は池際からやや離れた池底近くに位置する。第20次調査時にC地区南壁からその北隅の一部が検出されており、今回の調査で、木材で四方を囲った遺構であることが判明した。

木組みは東西幅282cmと南北幅233cmの範囲で検出され、平面形状はやや台形を呈する。使用木材は5本（No.1～No.5）で、いずれも加工痕跡が認められる。それら木材の内側には固定用の杭を3本（No.7～No.9）



第23図 堰堤土層断面図



第24図 F地区S×01実測図

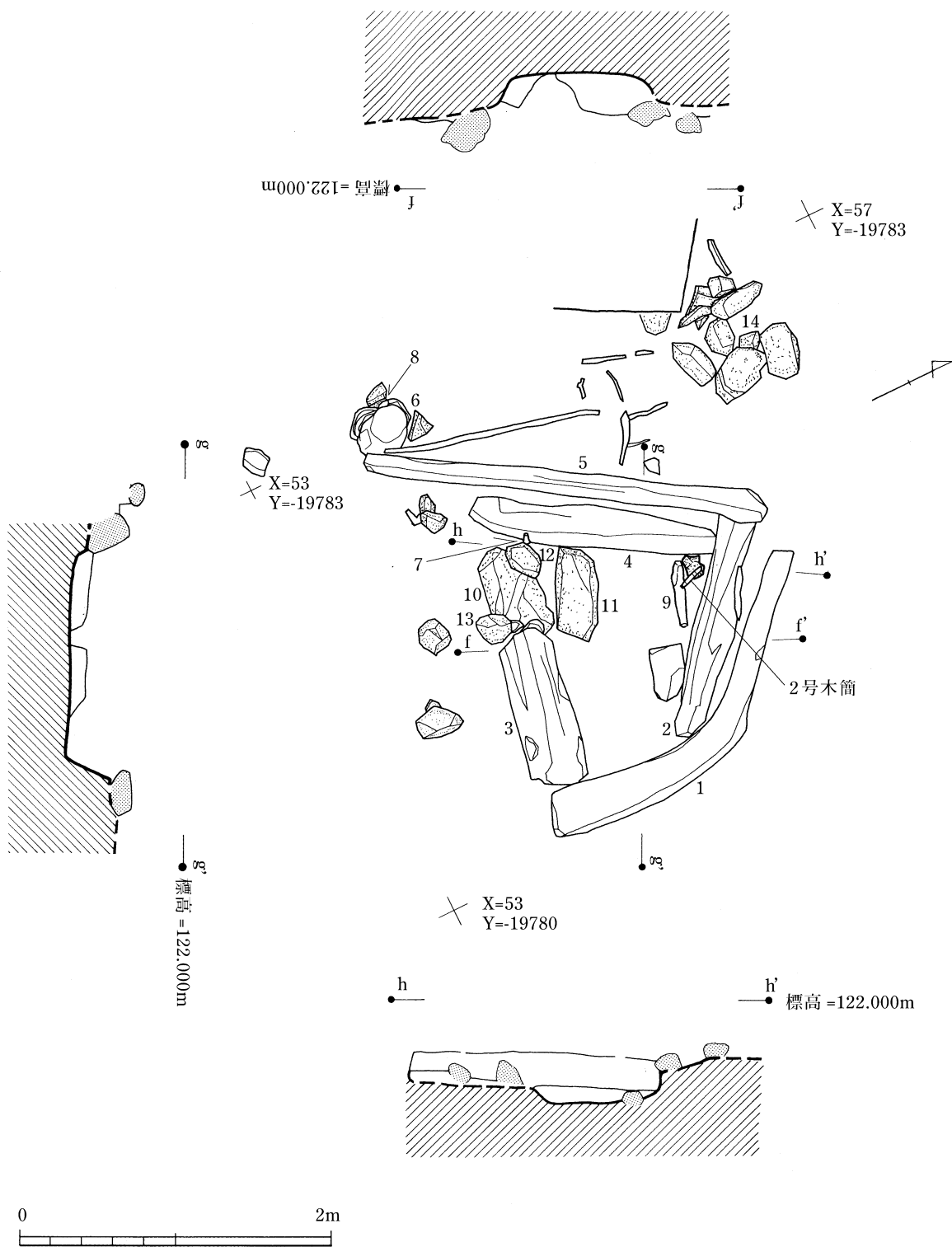
残存していた。また、やや離れた箇所に柱状の木材（No.6）が立ったままの状態で見出された。このほか、木組み枠の一部に礫2石（No.10、11）を使用する。石材は石灰岩で、加工痕は認められなかった。また、礫と木材との間隙を埋めるための小礫（No.12、13）を見出した。

また、この木組み内部に粘土層を掘り下げた土坑を一部見出した。土坑の形状は146cm×107cmの隅丸方形を呈するものと思われる、深さ23～29cmを測る。底は砂礫層となる。この土坑は一部木組みの下まで達しており、木組みが配される以前の段階で掘削されたものと判断される。

この木組遺構は、透水性の砂礫層まで及んでいることから湧水地点を囲った水汲み場と判断される。枠の一部に使用された礫（No.10、11）はほぼ原位置と思われる、水汲みの足場と想定される。この足場に至る経路については今回見出されなかったが、欠損している可能性が高い。また、今回の調査では保存・活用の措置を講ずる必要性からそのまま埋め戻して調査を終えたため、木組みの使用木材の形状分析が不十分となった。建築材等の転用材である可能性があり、木材形状の細かな分析調査が早急な課題といえる。

第4表 木組遺構計測表
木材

No.	計測値（長さ×幅×厚さ 単位；cm）	備考	No.	計測値（長さ×幅×厚さ 単位；cm）	備考
1	230×13～50×（20）	曲材	10	65×35×（10）	水汲み時の足場
2	140×20～25×（15）		11	55×35×（10）	水汲み時の足場
3	100×35～40×（40）	えつり孔（筏運搬のため）	12	25×15×（10）	間隙のため
4	150×15～20×25	建築材の肘木か	13	20×20×（10）	間隙のため
5	260×15～20×10		14		礫群、柱の根固め石か
6	直径25 長さ（20）	材の固定用あるいは柱			
7	直径2 長さ（15）	固定用の杭			
8	直径3 長さ（15）	固定用の杭			
9	直径7 長さ40	固定用の杭			



第25图 木组遗构实测图

F 地区南西端部（第26・27図）

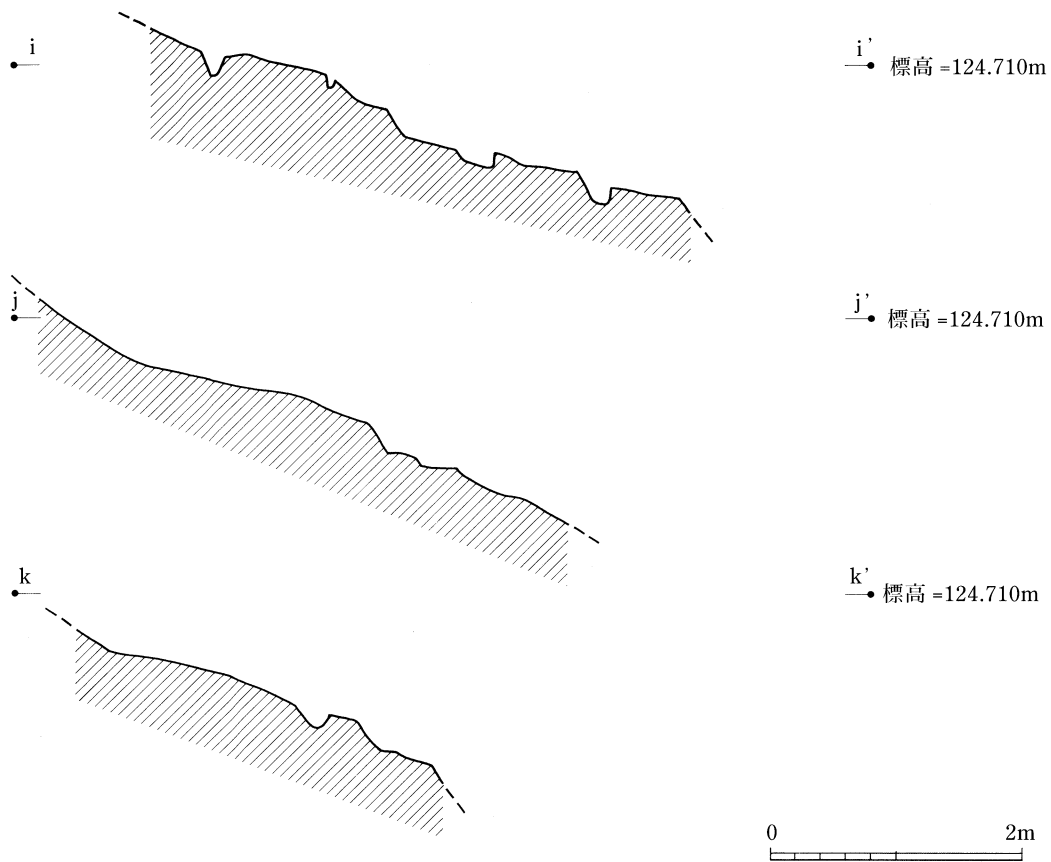
第21次調査でF地区南西端部から池際と平行した柱穴群が検出された。計6基の柱穴を検出したが、いずれも緩やかな斜面上に位置する。柱穴の平面形状は、径1.9～3.7cmの円形あるいは楕円形を呈し、深さは23～39cmを測る。底はいずれも平底である。

柱穴の配置は直線的でないが、ほぼ一定の間隔で並んでいるところから柵状の施設が想定できる。

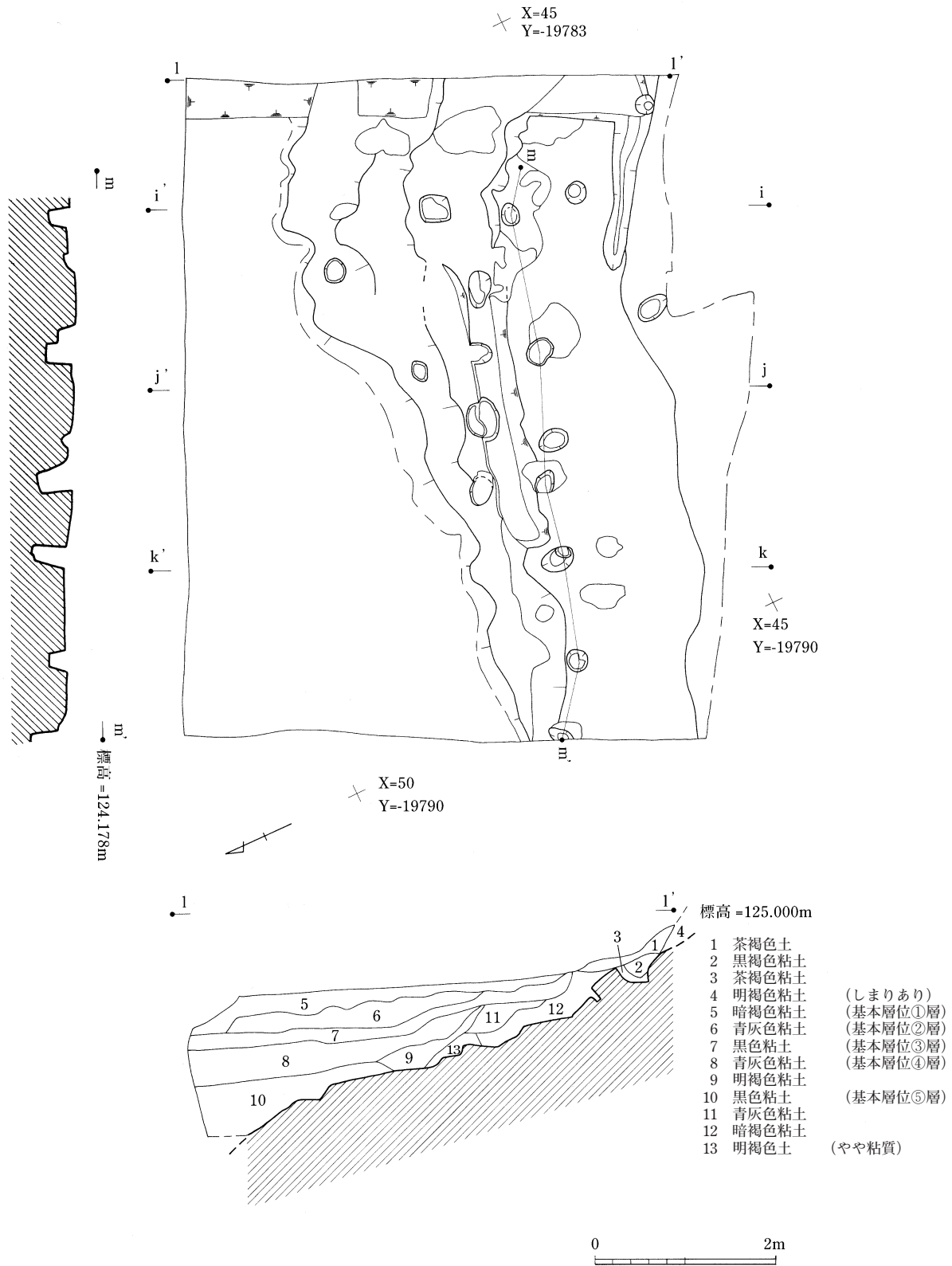
E 地区南東端部（第28図）

第21次調査で柱穴1基が検出された。柱穴は緩やかな傾斜地に位置し、平面形状は径22～33cmの円形を呈し、深さは31cmである。

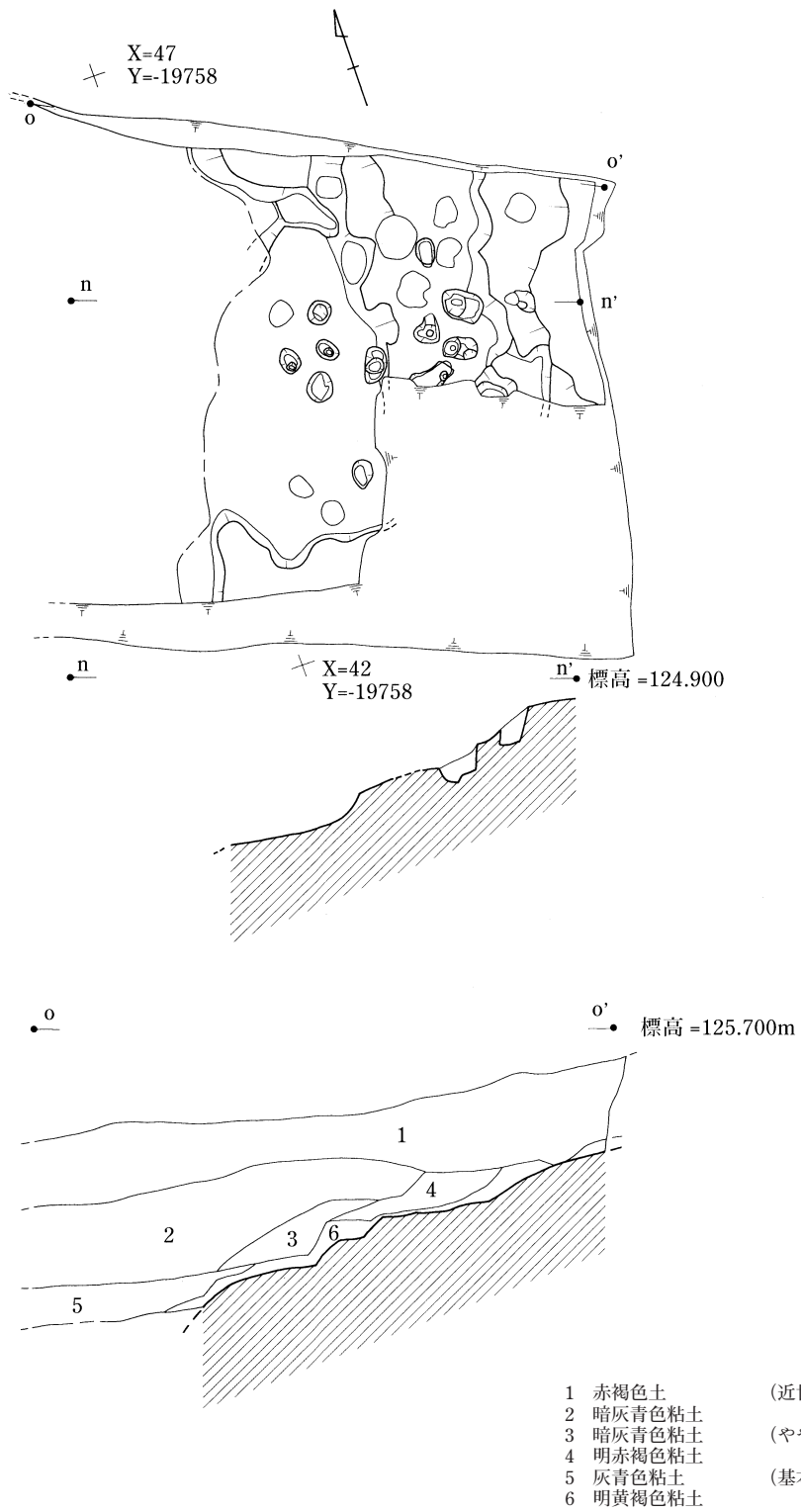
この柱穴もF地区南西端部同様、柵状施設に伴うものと判断される。



第26図 F地区南西端部断面図



第27図 F地区南西端部実測図



第28図 E地区南東端部実測図

3 遺物について

池跡における遺物の出土状況については、水成粘土層の各層から普遍的に出土しており、そのほとんどが細破片で散在した状況で検出されることから土砂の堆積過程で各段階に流入した遺物といった様相を呈している。そのような中、祭祀に関連すると思われる土器群（SX01）が基本層位⑧層中から検出された。いずれも土師器で完形に近い状況であった。

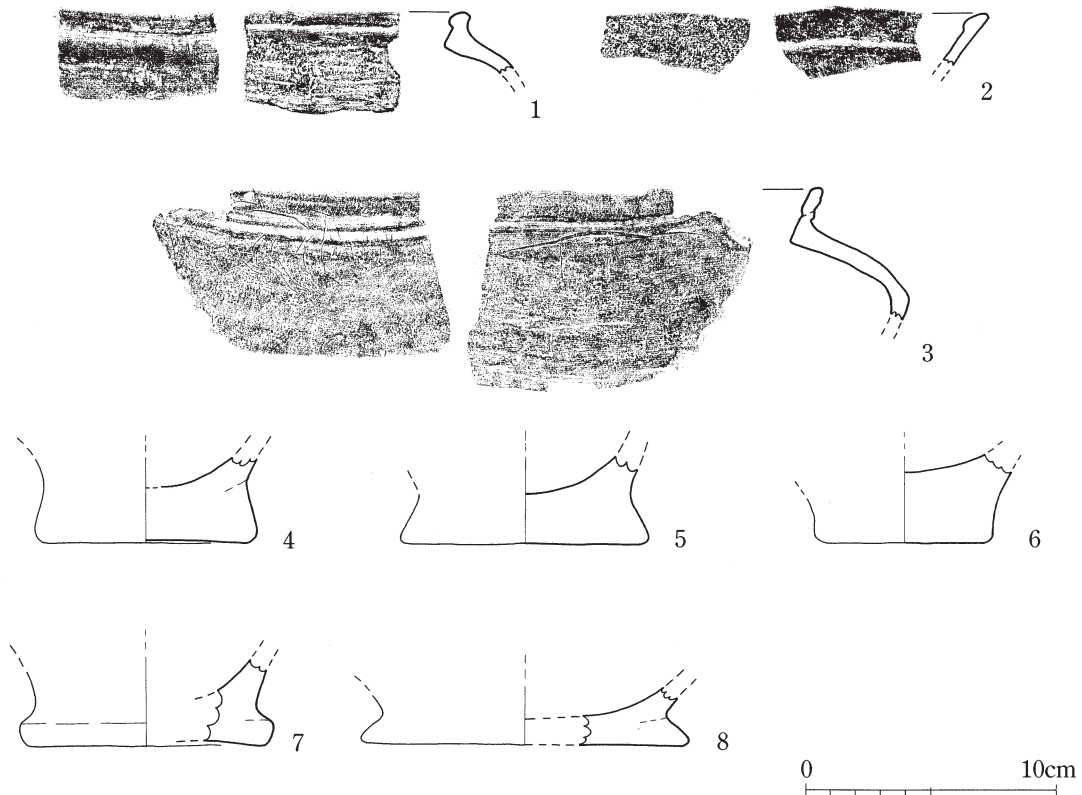
これら出土遺物の構成は、須恵器、土師器、瓦を主流とするが、中には縄文土器、弥生土器など時代が異なる遺物も見受けられる。これら遺物のうち比較的残りの良いものについて以下に記す。

縄文土器（第29図）

縄文土器の出土地点については、1、4はF区⑩層、2はE区⑦層、3はトレンチ壁面の崩落土中（出土層位は不明）、5はE区⑧層、6はE区⑩層、7はF区⑮層、8はE区①層からの出土である。いずれの土器片も細片で、出土地点・層位にばらつきがあり、池跡への流入遺物と認められるものである。

1～3は浅鉢形土器片である。1～3とも内外面に丁寧な磨研が施されているが、1の肩部内面の磨研はやや粗い。1は口縁部から肩部にかけての破片である。口縁部はほぼ直立に延び、口縁部直下の内面は段状に肥厚する。口縁端部は丸みを帯びる。2は口縁部片である。これも1同様に口縁部直下の内面が段状に肥厚し、口縁端部はやや尖る。また、胴部へのくびれ部が見られないことから、すり鉢状の器形であることが予想される。3は口縁部から胴部にかけての復元可能な比較的大きな破片である。口縁部はやや外傾しながら延び、口縁端部を丸く納める。これも口縁部直下の内面が段状に肥厚する。胴部は胴部上位でのく字状に屈曲する。また、くびれ部外面にはヘラ状工具による二条の凹線が観察できる。

4～8は深鉢形土器の底部片である。4、7、8については断面上で円盤状粘土の接合痕がよく観察できる。4、5の底縁部はやや外傾する形態で、5のくびれ部外面には粗いケズリによる器面調整を施している。



第29図 縄文土器実測図

6は底縁部が直線的に下がる形態である。7、8は底縁部を外側に屈曲させているが、7は底縁部を平たく尖り気味に仕上げているのに対し、8のほうは肥厚し、端部を丸く仕上げている。

石器 (第30図)

石器の出土地点については、1はF区⑥層、2はE区⑦層、3はE区⑩層、4はE区⑥層からの出土である。前遺物同様、いずれの石器片も池跡への流入遺物と認められるものである。

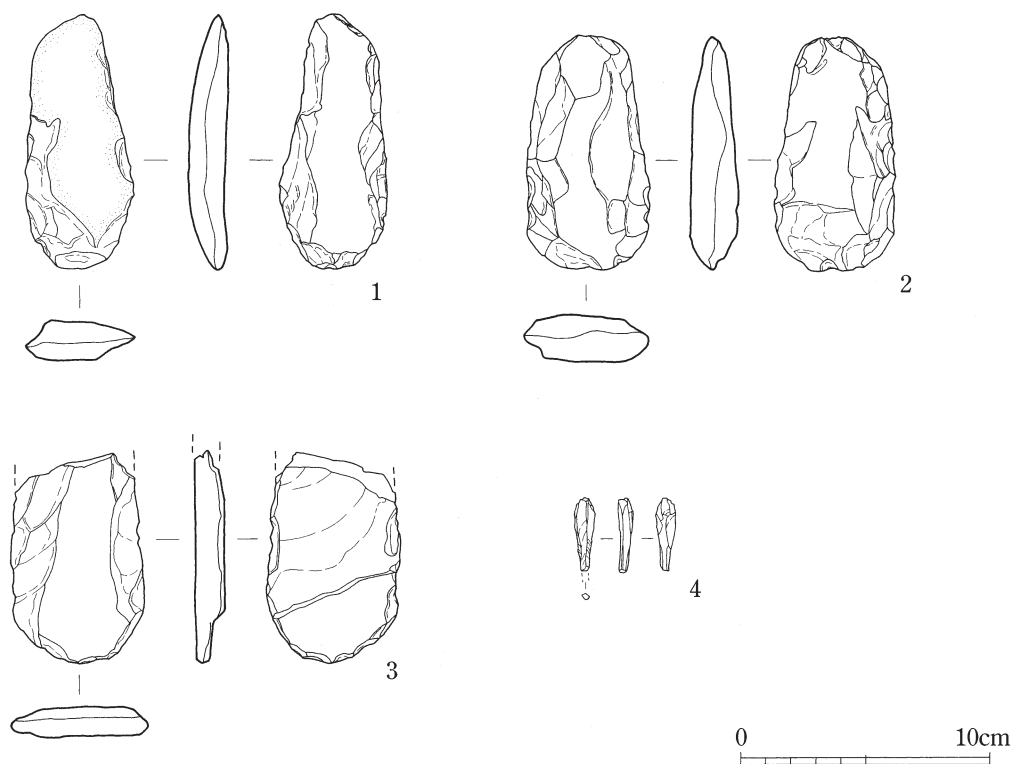
1～3は打製石斧である。1・2はほぼ完形の小型品で、3は頭部側が欠損している。1は縦長剥片の素材に、両側縁部及び刃部に縁辺部からの調整剥離を加えている。表面に礫面を残す。体部中位に挟りを意識した調整が僅かに認められる。また、刃部に敲打痕が認められる。2は縦長剥片を素材に、頭部、刃部、両側縁部に縁辺部からの調整剥離を加えている。表面には礫面を残す。3は縦長剥片を素材に、両側縁に粗く、刃部に細かく縁辺部からの調整剥離を加えている。

4は縦長剥片を素材に、打溜痕をうまく利用し、頭部にやや細かい調整剥離を加えているが、刃部に向っては細長い縦長剥離で器面を調整している。刃端部は欠損。器種としては石錐が予想される。

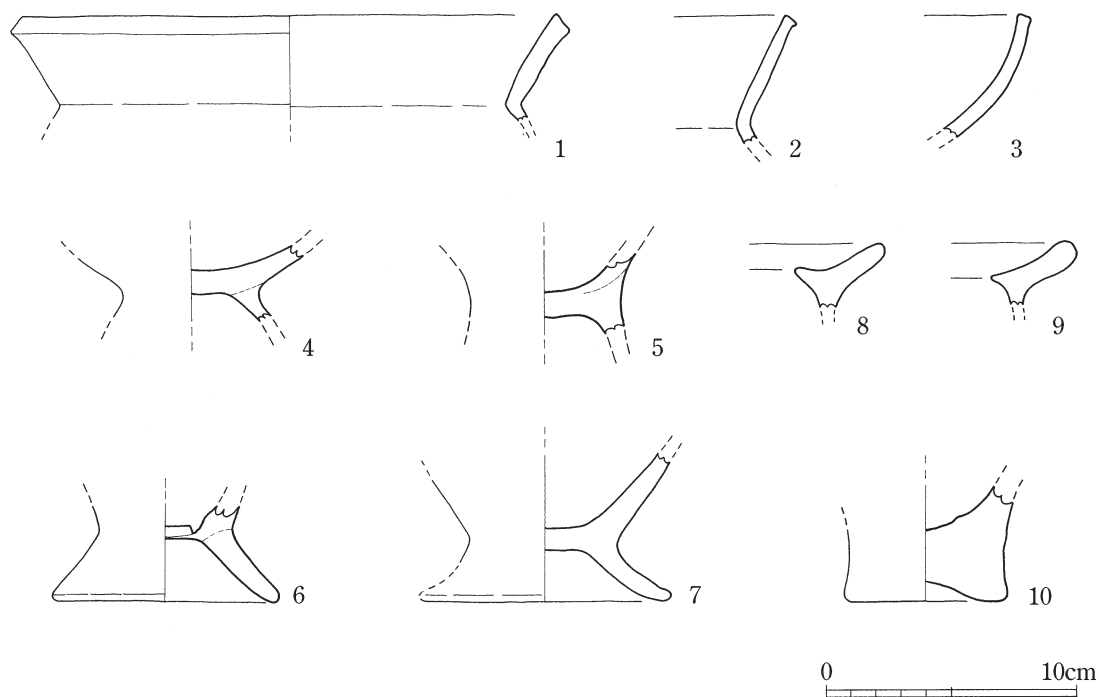
弥生土器 (第31図)

弥生土器の出土地点については、1はE区②層、2、6、9はE区⑦層、3、4はF区⑩層、5、8はE区④層、7は崩落土中、10はE区⑧層からの出土である。前遺物同様、いずれの土器片も流入遺物と認められるものである。

1、2は短頸壺の口縁部片で、内外面とも丁寧なナデ調整を施している。1は口縁部の器壁がやや厚く、端部付近でさらに外傾し、端部を平たく仕上げている。2は口縁端部を外側にややつまみ出し、平たく仕上げている。



第30図 石器実測図



第31図 弥生土器実測図

3は鉢の胴部から口縁部にかけての土器片である。内外面とも丁寧なナデ調整を施している。一定に内湾しながら立ち上がり、口縁端部を平たく仕上げている。外面に焼成痕が認められる。

4は高坏の脚部である。全体的に丁寧なナデ調整が施されているが、坏底部の外表面のみは未調整である。脚基部は比較的太く、坏部は緩やかに内湾気味に立ち上がるものと思われる。

5、6、7は脚付き甕の脚部片である。脚部内外面とも丁寧なナデ調整が施されており、比較的丁寧な作りである。5は残存部から脚部の開きは比較的急に開くような印象を与える。6はゆるやかに外反し、端部を丸く納める。7は脚基部付近の器壁が比較的厚く、ほぼ直線的に外傾しながら端部に延び、端部は丸く納める。底部内面はやや粗雑で凹凸が認められる。脚端部付近に赤色顔料の付着が認められる。

8、9は甕の口縁部片である。両者とも内外面に丁寧なナデを施している。8がくびれ部内面を内上方につまみ出しているのに対し、9のつまみ出しは水平で、口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。

10は甕の底部片である。底縁部が直線的に下がる形態で、上げ底になっている。

須恵器 (第32図)

須恵器の出土地点については、1、2、7～9はE区④層、3は接合資料でF区⑩・⑪層、4、14はF区④層、5はF区⑩層、6はF区⑤層、10はE区⑧層、11は表採、12、15はF区⑧層、13はF区⑥層からの出土である。前遺物同様、いずれの土器片も流入遺物と認められるものである。

1～3、5、6は蓋坏の蓋片である。1は天井部片である。天上部中央にボタン状のつまみを持つ。残存部から扁平な形状であることが推定される。2、3、6は返りを持つ蓋片である。2は僅かに天上部まで残存している。天上部は平たく、体部は内湾しながら下がり端部付近でやや外反し、端部を丸く納める。かえりは比較的長く、端部付近でやや外反し、端部は尖る。かえり基部外面にかえりを意識した沈線が巡る。3

も天上部まで残存しており、天上部にヘラ削り痕が残る。器高は3.4cmと比較的高い。天上部はやや丸みを帯び、体部は内湾しながら下がり端部付近で外反し、端部を丸く納める。かえりは端部から少し離れた位置から外反しながら下がり、端部は尖る。6は口縁部片である。かえりは形骸化しており、僅かにつまみ出ししている程度である。体部の傾斜が緩く、扁平な器形であることが推定される。5はかえり無しの口縁部片である。器高は低く、扁平な形状である。体部はやや外反しながら口縁部へ至り、端部を上下方につまみ出し、断面三角形の形状を呈する。

4、7～9は蓋環の坏身片である。8は胎土も精選されており、器壁も薄く丁寧な作りをしているが、4、7、9は胎土が粗く、やや粗雑な感じである。4は蓋受けから口縁部までの破片である。復元口径は9.4cmと小さい。蓋受けはやや上外方に延び、たちあがりは短く直立する。蓋受け端部に黒色の自然釉が付着する。7は蓋受けから底部の破片である。蓋受けは短く鈍い。体部は内傾し底部へと至る。底部内面にはヘラ削りによる凹凸が見られ、底部外面にも回転ヘラ削り痕が残る。8は胴部からたちあがりにかけての破片である。蓋受けは上外方につまみあげた感じで短く、たちあがりは長く直立する。体部はやや内湾しながら下がる。蓋受けから下方の外面に黒色の自然釉が付着する。9は底部片である。底部外面に回転ヘラ削り痕が残る。かなり歪んだ形状である。

10は体部下方から高台端部までの高台付き坏身片である。体部はやや内湾しながら底部へと至り、底部端よりやや内側に高台が付く。高台は開き気味で比較的長く、端部はやや外上方につまみ出している。

11は胴部下方から高台上方までの台付き長頸壺片である。胴部は丸みを帯びながら底部へと至る。高台は外反しながら下がり、内面に漆が付着する。

12、13は口縁部片である。12は器壁が薄く、口縁端部を丸く納める。外面に自然釉が付着する。13は器壁が厚く、端部は丸く納める。12は坏身片と思われるが、13については大型の器種が想定される。

14は甕の胴部片である。器壁が薄く、細長の格子叩きが施され、内面には当て具痕が残る。この当て具痕は車輪文の可能性はあるが、細片のため断定はできない。

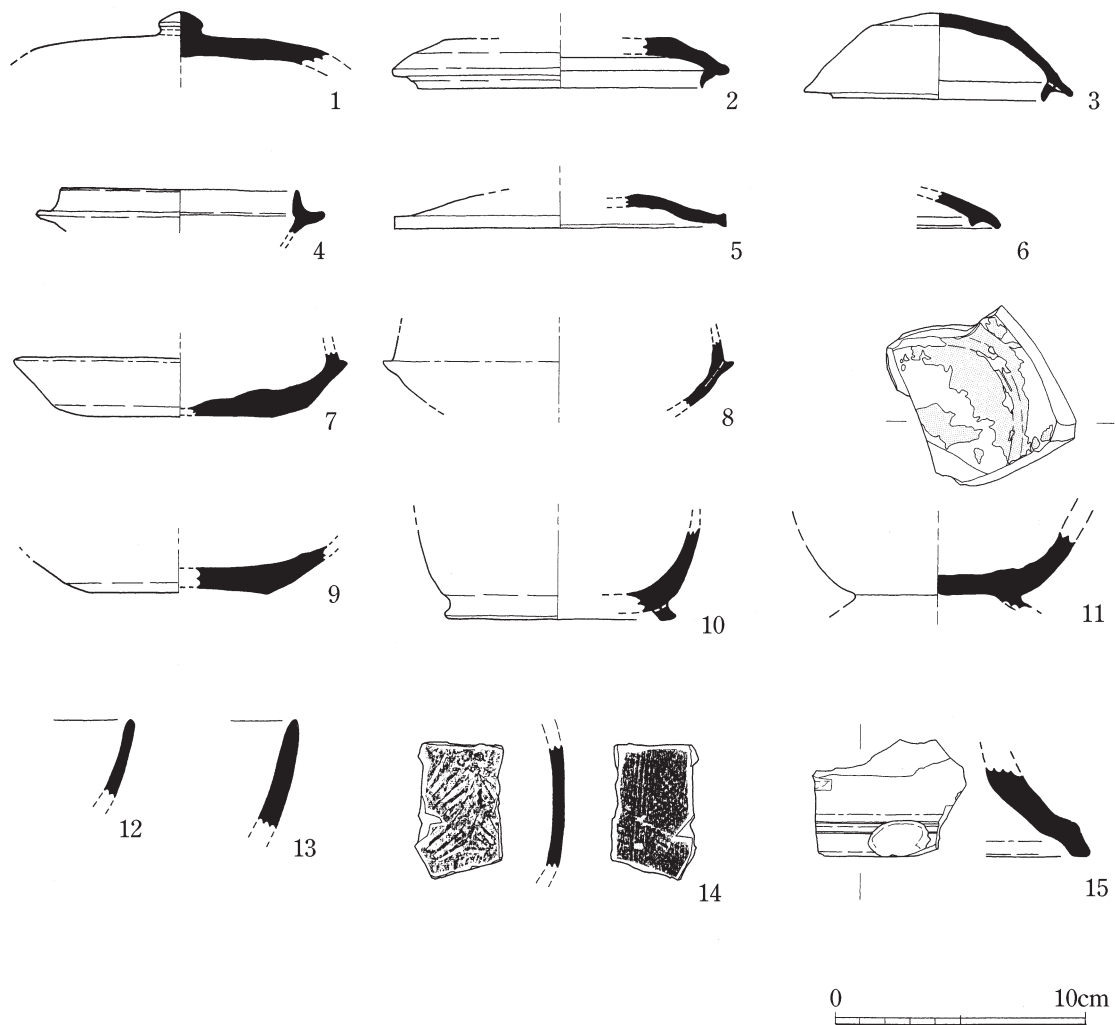
15は器台の脚部片である。脚端部へは外反しながら下がり、端部付近で下方に屈曲し、端部を平たく仕上げている。屈曲点外面には二条の泥線が巡る。外面に黒色の自然釉が付着する。

土師器（第33図）

土師器の出土地点については、1、2、4はF区⑩層、3、11、14、15はSX01、5、10はF区⑦層、6はF区⑤層、7、12、18はF区⑪層、8、17、19はF区④層、9は接合資料でF区⑩、⑪層、13は表採、16は接合資料でF区⑩、⑪層、20は第19次調査時に出土しておりC・D区⑥層からの出土である。SX01出土遺物以外は、いずれの土器片も流入遺物と認められるものである。

1～3は蓋環の坏身片である。1、3はほぼ同じ器形で、蓋受けは短くやや上向きで、たちあがりは内方向に外反しながら口縁端部付近でほぼ直立する。口縁端部は尖る。3については底部まで残存しており、比較的扁平な器形で、丸底である。器面には丁寧なナデ調整が施されているが、底部外面に回転ヘラ削り痕が残る。底部外面にヘラ記号があるが、意味は不明である。2は蓋受けの器壁が比較的厚く、たちあがりは短く外反し、端部は尖る。色調は土師器に似るが、焼成は硬質で須恵器の範疇に含まれる。

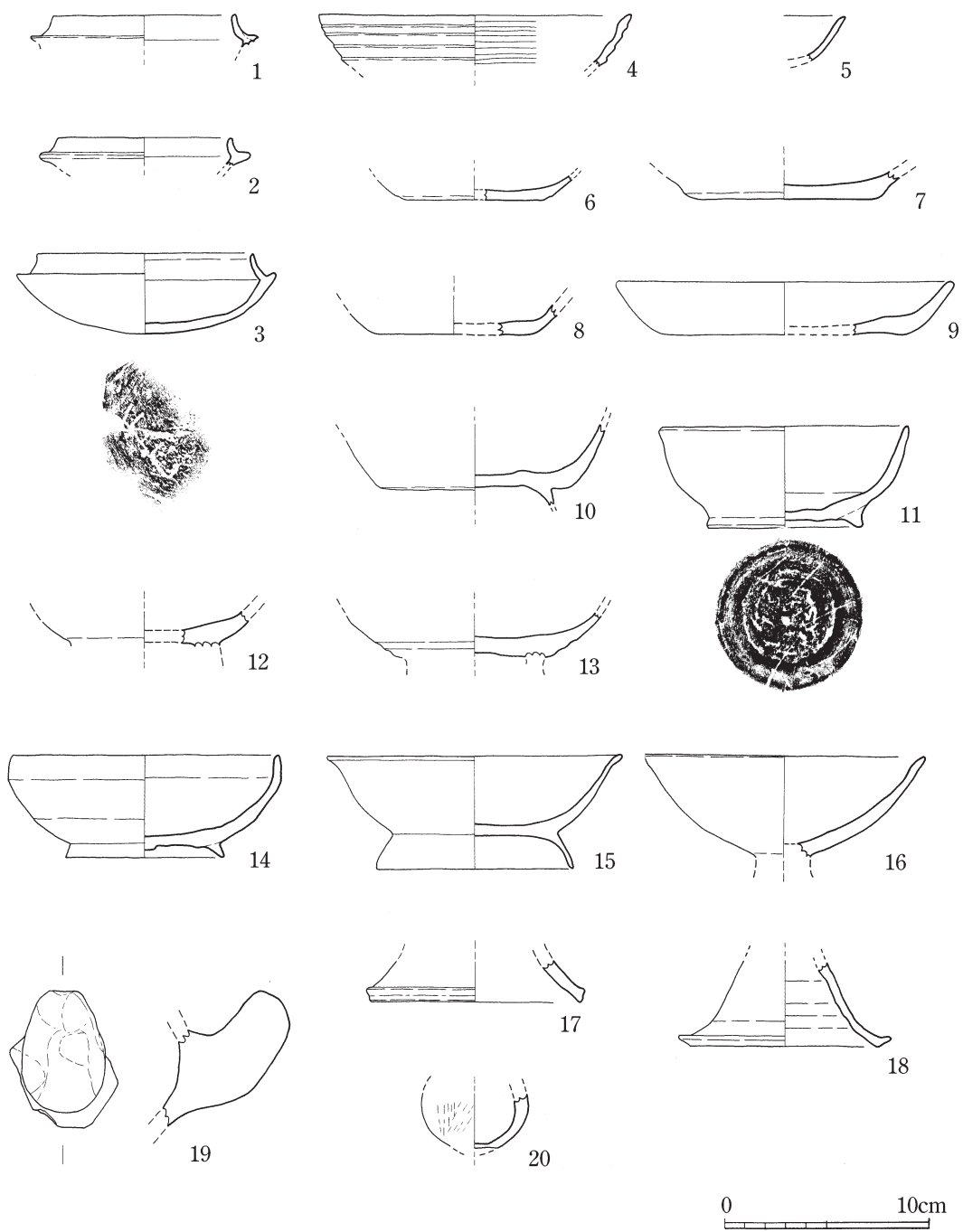
4～9は坏身片である。4、5は口縁部片で、4は丁寧な作りで、体部は内湾しながらたちあがり、口縁端部付近でやや外反する。口縁端部をやや尖り気味に仕上げている。内外面とも丁寧な回転ヘラミガキ調整を施している。外面に赤色顔料が付着する。5は内湾しながらたちあがり、口縁端部をやや尖り気味に仕上げる。外面に回転ヘラ削り痕が残る。6～8は底部片である。いずれも底部外面に回転ヘラ削り痕が残るが、その後、ナデ調整を施している。8については内底面に回転ヘラ削りによる凹凸がある。9は口縁部から底



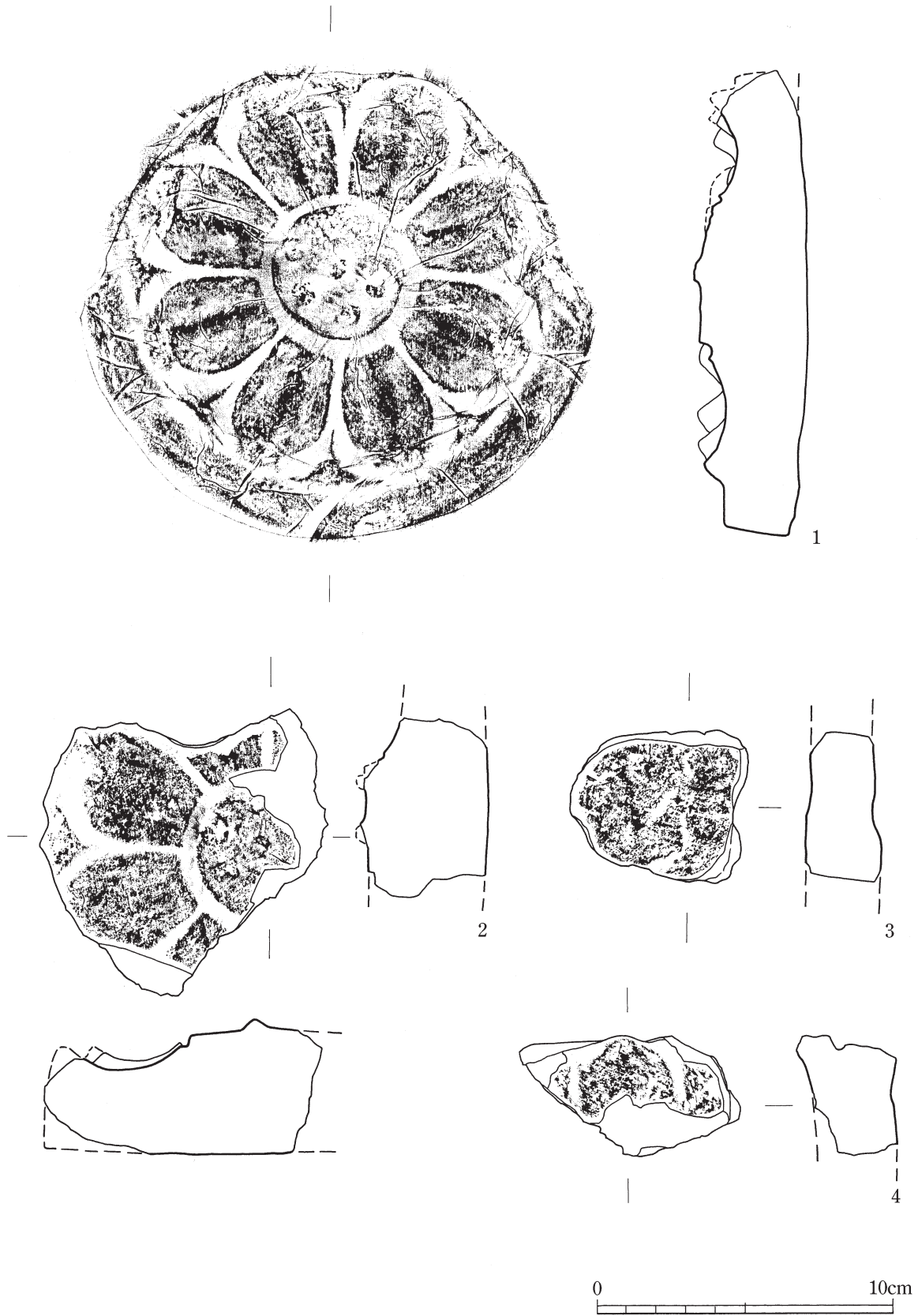
第32図 須恵器実測図

部まで残存しており、器壁はやや厚く、底部からやや内湾しながらたちあがり、口縁端部は丸く納める。底部内面には回転ヘラ削りによる凹凸がある。

10～15は高台付き坏身片である。10は体部から高台までの破片で、体部はやや内湾気味にたちあがる。高台は底部端よりかなり内側に付き、接合部からやや内湾しながら端部へと至る。断面三角形の形状を呈する。12、13は高台が欠落しているが、底部端に接合痕跡が見られた。残存部から高台は底部端に付いていたものと思われる。11、14、15は口縁部から高台まで復元可能な個体である。11は体部は内湾しながらたちあがり、口縁端部を丸く納める。高台は底部端に付き、斜め下方に下がり端部を丸く納める。高台は比較的 lowく、断面三角形の形状を呈する。底部外面に回転ヘラ削り痕が残る。14は体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部付近で屈曲し直立する。口縁端部はやや尖り気味に仕上げている。高台は底部端に付き、やや外傾し、端部は尖る。断面三角形の形状を呈する。底部外面中央に切り離し時に生じた粘土塊が残る。15はほぼ完形品で、体部はやや内湾しながら開き口縁部付近で外反し、口縁端部を丸く納める。高台は比較的高く底部端に付き、細長く内湾しながら端部へと至る。端部を丸く納める。底部内面に不整方向のナデ調整を施している。



第33图 土師器実測図



第34图 軒丸瓦瓦当实测图

16～18は高坏片である。16は坏部片で、脚接合部から内湾気味に立ち上がり、口縁端部を丸く納める。内面は丁寧なナデ調整を施しており、外面に回転ヘラ削り調整痕が残る。17、18は脚部片である。いずれも硬質で、須恵器の範疇に含まれる可能性がある。17は脚端部をやや上方につまみ出している。内外面に赤色顔料が付着する。18は外傾しながら下がり、脚端部付近でさらに外傾し、端部を上方に跳ね上げている。内面に回転ヘラ削り痕が残る。

19は甑の取手片である、上外方に延び、端部は尖り気味に仕上げている。胴部から取手下面の大半に2次焼成痕が見られる。

20はミニチュア土器片ある。内湾しながら立ち上がるが、底部に剥離痕が見られ、脚が付くものと思われる。

軒丸瓦（第34図）

1～4は軒丸瓦の瓦当部分で、いずれも丸瓦からはずれた状態での出土である。どの瓦当も単弁八葉蓮華文の範が使用されたとみられる。瓦当の厚さは一定ではない。

1は⑧層から出土した軒丸瓦瓦当で、丸瓦から脱落しているが、瓦当としてはほぼ完全な形で出土した。表面には単弁八葉蓮華文、中房部分には中心に1つと周囲に6つの蓮子を配す。上半分は花卉のすぐ外側が、丸瓦との接合面となっており、そのまま周縁となる下半分が一回り大きい。接合面はやや粗いナデ調整、裏面からは補強のため粘土を充填している。下半の周縁側と側面には丁寧なナデを施す。裏面は全体にやや粗いナデ調整を行っている。胎土は精選され、きめ細かい土が使われている。

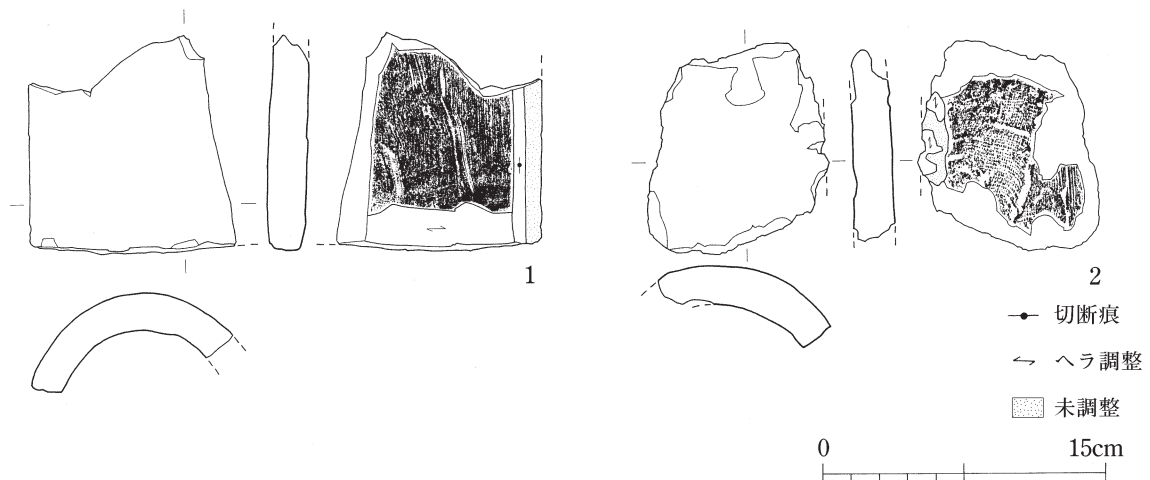
2は中房と花卉数枚分がわかるもので、1と同範と見られる単弁八葉蓮華文の瓦当である。胎土にはやや粗い土が使われ、大きさ2mm程の砂粒が多く含まれる。

3・4は瓦当片で、残存部分から単弁八葉蓮華文になるとみられる。

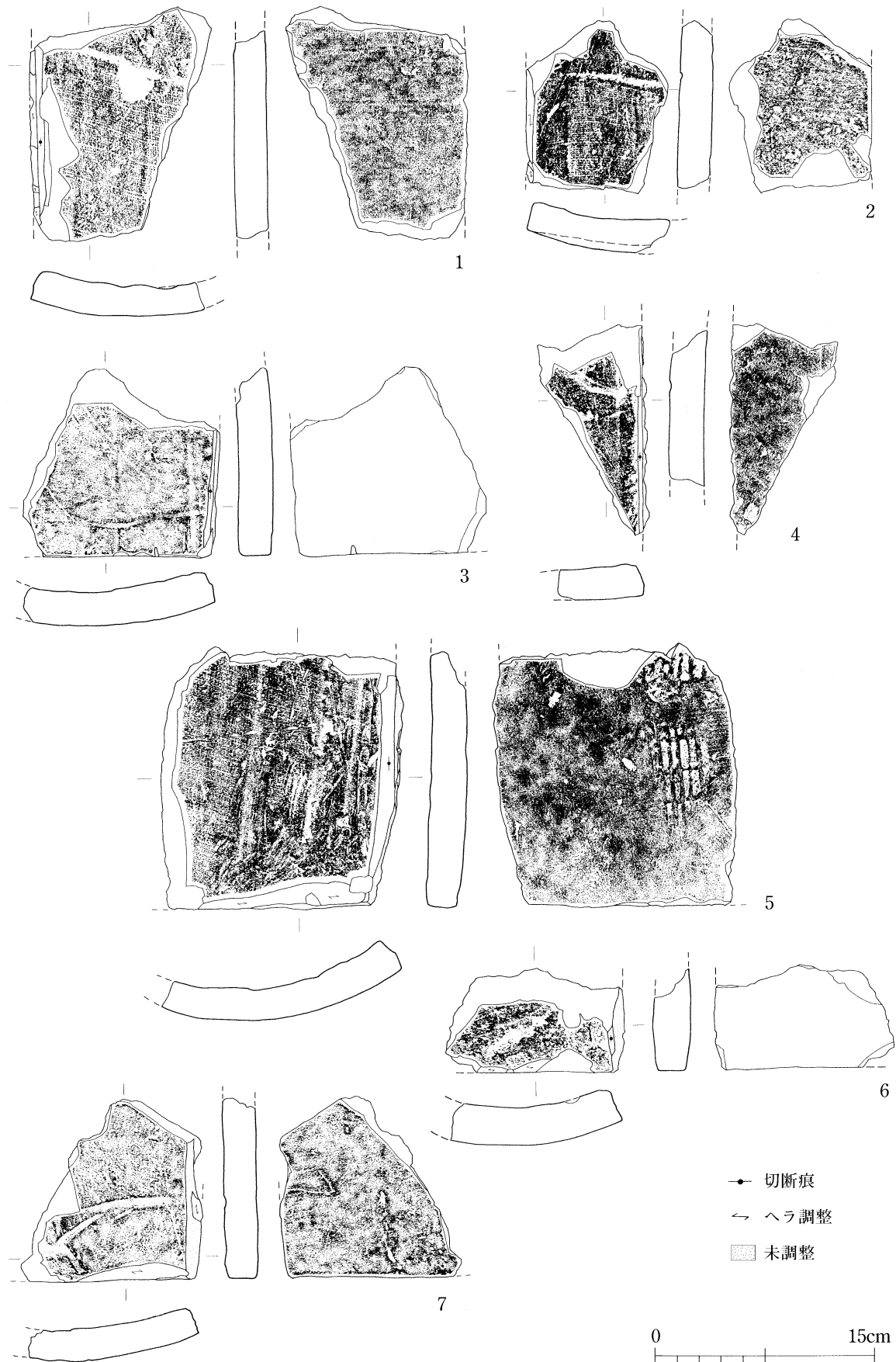
丸瓦（第35図）

1は灰青色を呈する丸瓦下端部で、側面には刃物を当てて分割した際の切断痕が残り、折り取られた部分は未調整のままである。凹面下端部には横方向のヘラ調整、凸面には全面にナデ調整が施される。

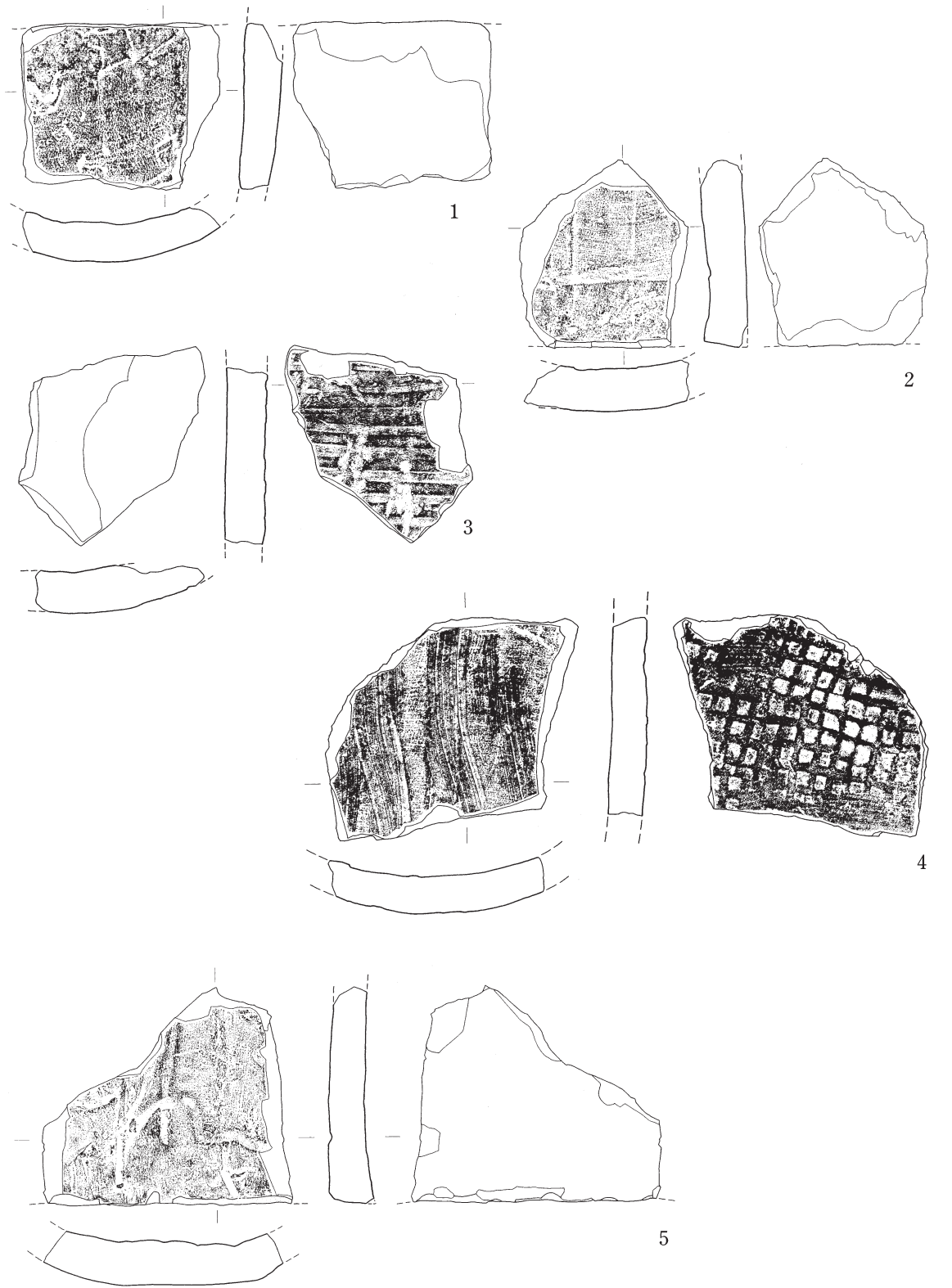
2は丸瓦側縁部で、側面に弱いヘラ調整を行っている。



第35図 丸瓦実測図



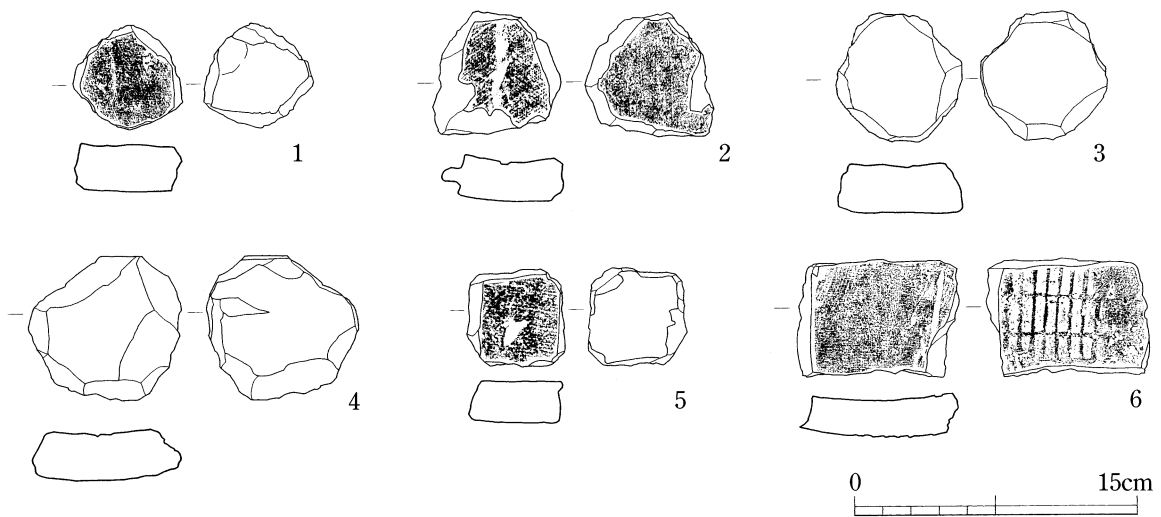
第36図 平瓦実測図(1)



第37图 平瓦实测图(2)



第38図 平瓦実測図(3)



第39図 瓦二次加工品実測図

平瓦（第36～38図）

平瓦の凹面にはいずれも布目圧痕や模骨痕が見られる。紐圧痕（第35図2、7、第36図2、4）や端部ヘラ調整（第35図5、6、7、第36図4、5）が施されるものがある。凸面の調整についてもほとんどはロクロによるヨコナデやナデ調整で仕上げられる。正方形や長方形の格子目タタキを残すもの（第35図4、5、第36図4）、紐圧痕を残すもの（第37図1）、太い凹線文で仕上げるもの（第36図3）などがある。

第35図2は凹面が淡赤褐色、凸面が淡白褐色の色調を呈しており、断面では色調の違いによる粘土接合部分が確認できる。

第35図6は池跡28トレンチF地区SX01出土の平瓦で、下端部の資料と見られる。SX01内では土師器周辺に置かれた状態での出土である。

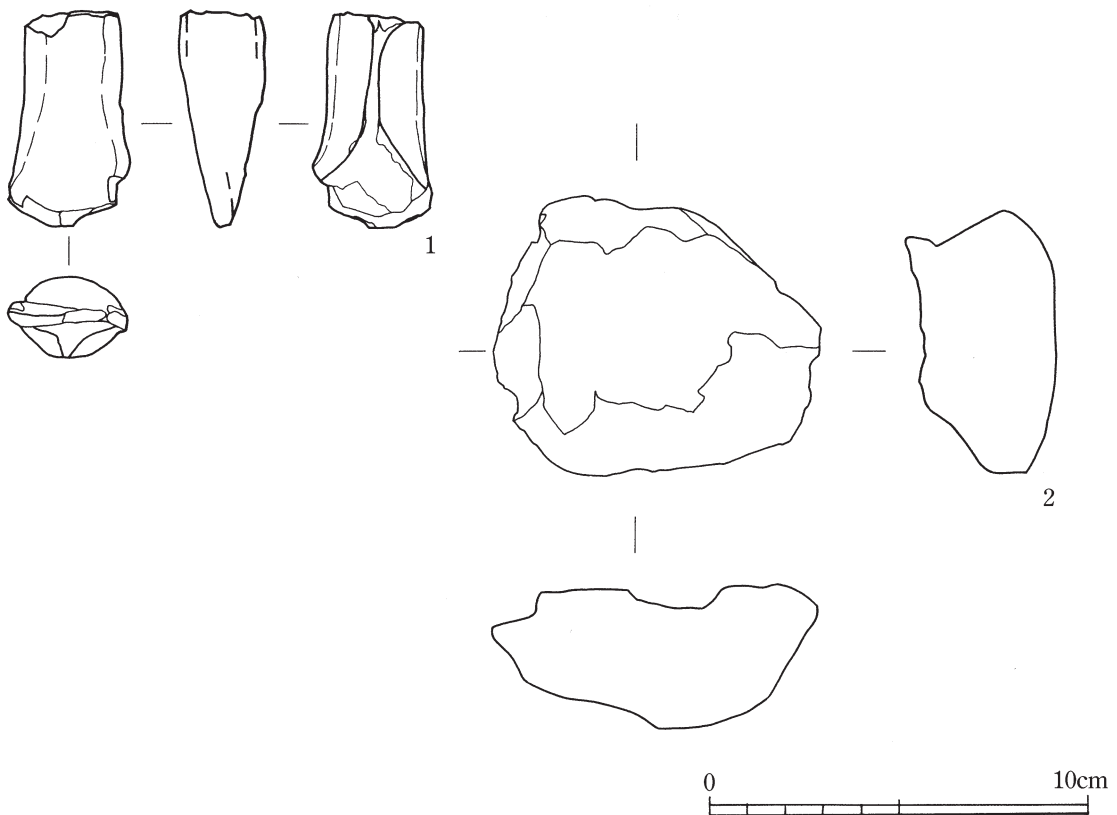
第36図2の下端面には、模骨痕より小さい幅2.3cmと3.0cmの調整痕が残る。

第36図4は凹面に篋（工具幅2.5cm）で縦方向にヘラナデを行い、布目圧痕と模骨痕が一部消えている。このように平瓦凹面の上・下端部以外にヘラ調整が残っている例は珍しい。

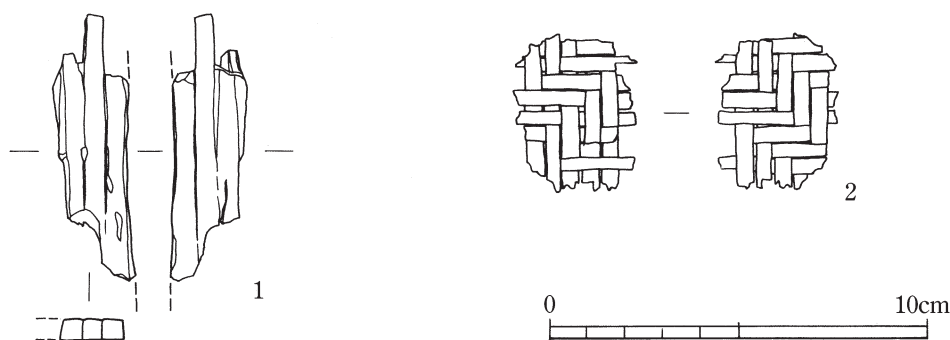
第37図1は⑥層出土の平瓦である。凹面の左側面と凸面の右側部分には灰黒色のススが付着しており、火災等による二次焼成と考えられる。

瓦二次加工品（第39図）

平瓦の縁辺に連続的で細かな打撃を加え、円形や方形に整えた二次加工品である。2のように円形になりきれていないものがある一方、5、6など方形の加工品は各辺が直線に近く、かなり方形・長方形を意識した作りである。3のような摩耗が著しいものや、2のように紐圧痕が中央に通るものなど、共通した特徴をいくつか挙げることはできるが、機能・用途は不明である。



第40図 鉄製品実測図



第41図 木製品実測図(1)

鉄製品(第40図)

鉄製品の出土地点については、1はF区⑩層、2はF区⑤層からの出土である。前遺物同様、いずれの鉄製品も流入遺物と認められるものである。

1は手斧で、刃部は摩滅しているもののほぼ完形の鍛造品である。全長5.8cm、刃部幅3.2cmで、断面はペン先型である。装着部には一部木質が残る。

2は鉄滓である。最大長8.6cm、幅7.4cm、厚さ3.6の大きさで、底は椀状になる。重さは272gである。

木製品(第41図～第43図)

第19次調査で出土した木製品を追加資料として掲載する。出土層は概ね基本層位⑩層からの出土である。

第40図1は木筒状木製品である。上下端部及び左右側端部を欠損し、残存部にも亀裂が入る。厚さ0.5cmを測り、両面を平滑に仕上げている。墨書は看取されず。

第40図2は網代である。技法的には三つ超え三つ潜り一つ送りの綾編みである。

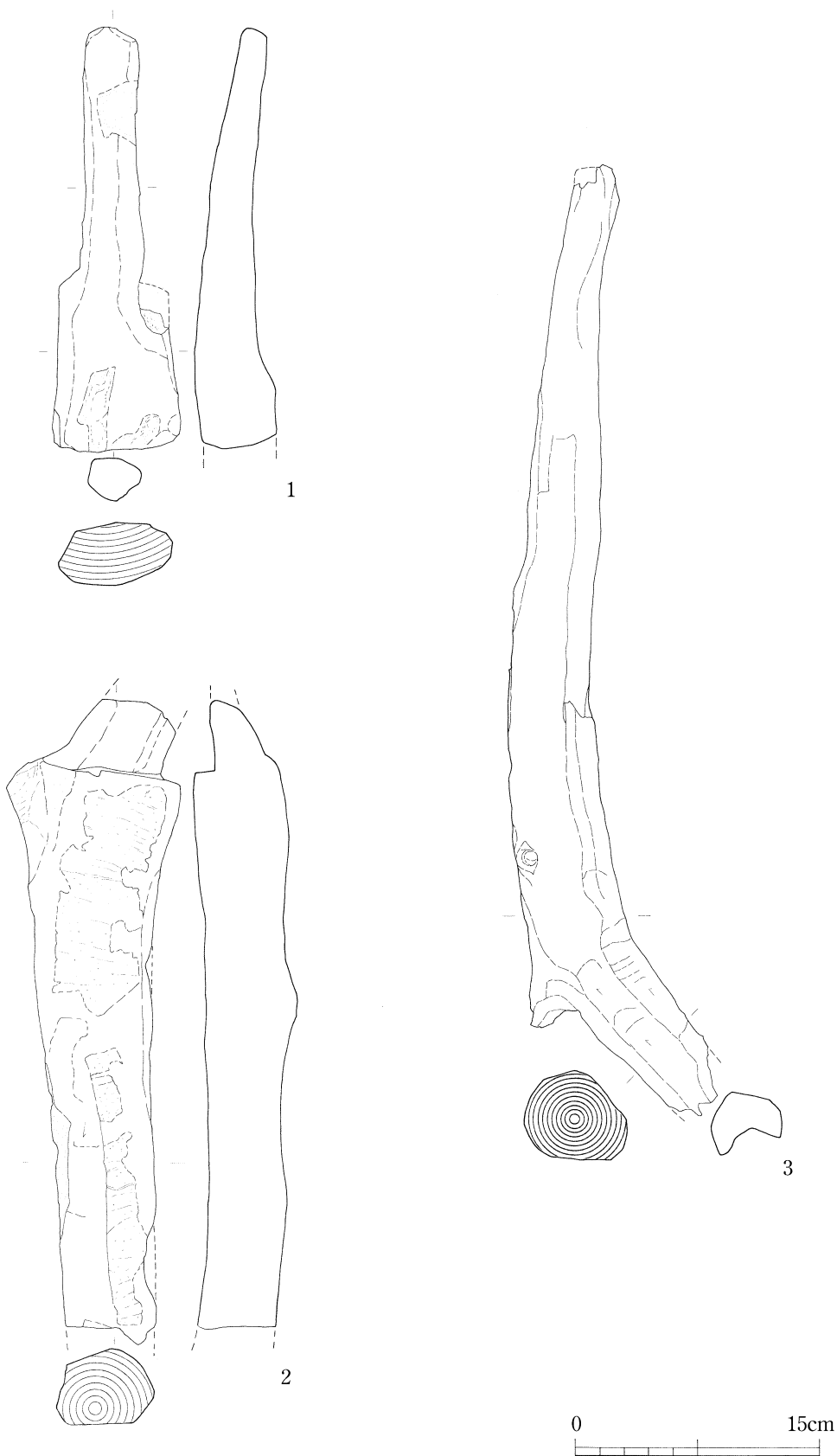
第41図1は建築材の鎌継ぎ部である。残念ながら乾燥により材が変形しているが、長さ26cm、最大厚3.8cmを測る。桁材は欠損している。先端部を幅3.9cmと細長く、基部の方を幅7.8cmと幅広く造りだしていることを特徴とする。

第41図2は仕口部分のある建築材である。一部自然面が残るものの、先端部に向い調整加工を施し、仕口部分も精緻な調整加工を施している。仕口部分で屈曲を伴うが、外角部分で枝を切断した痕跡が見られ、当初から屈曲を意識し曲材を利用したことが認められる。

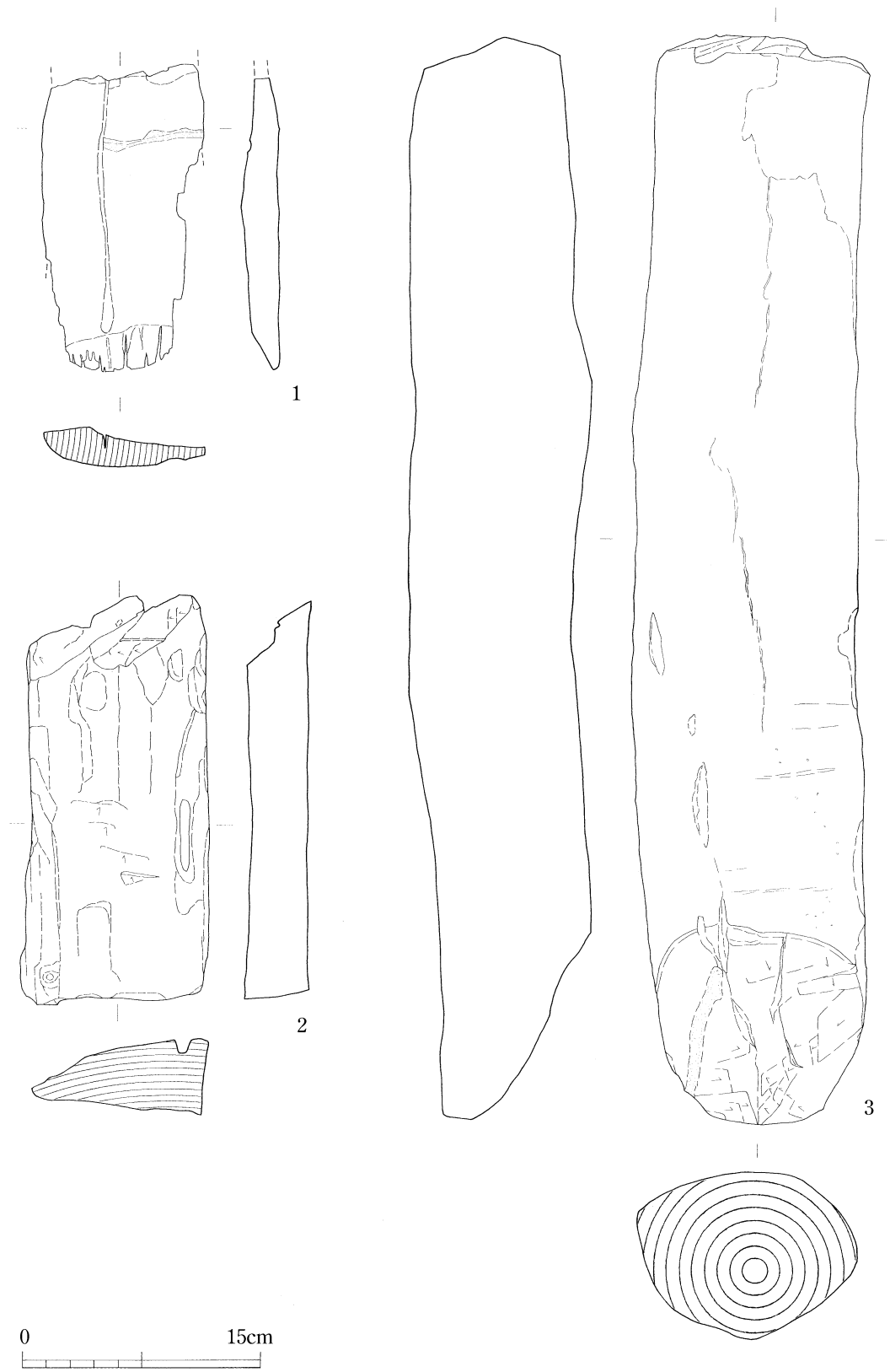
第41図3は木舞の束を固定するための杭として利用されていた材である。頭部は調査時に水面から露出する期間が長く乾燥により収縮し原形をとどめていない。先端部は欠損しているが、先端部に向い細かな調整加工を施している。これも曲材を利用し屈曲部の外角部分で枝を切断していることから建築材からの転用の可能性がある。

第42図1、2は板材である。1は板目材、2は柁目材と木取りが異なる。1は薄手で、下方端を斜めに切断している。材が収縮し変形しているものの、表裏面とも平たく仕上げている。表面に紐状のもので縛った痕跡と思われる細長い窪みが見られる。2はやや厚手で、上下方端に切断痕が観察できる。上方端はやや斜めに切断している。また、表裏面とも平たく仕上げており、表面に斜方向の加工痕が顕著に見られる。

第42図3は完形の杭材である。長さ68.0cm、幅14.3cm、厚さ11.3と太く、先端部を斜めに切断して作り出している。頭部には縁辺部から中心部に向う調整加工痕が観察できる。



第42図 木製品実測図 (2)



第43図 木製品実測図 (3)

第5表 遺物観察表

第19図

No.	出土地点	層	部位	計測値 (cm)	色調 (凹/凸)	胎土	調整・文様			焼成	備考
							凹面	凸面	側面		
1	堀切門跡 9トレンチ	表土	平瓦広端部	最大長 15.2 最大幅 13.3 厚さ 2.2~2.5	暗黄灰色	中型砂粒少量 細砂粒中量	布目圧痕?	ナデ?	へら調整 切断痕 切断後 未調整	良	

No.	出土地点	層	器種・部位	計測値 (cm)	色調 (内/外)	胎土	調整・文様			焼成	備考
							外器面	内器面	口唇・底部		
2	堀切門跡 西側上段平場	表土	須恵器甕 頸部~底部	器高 (17.2) 頸部径 10.5 体部最大径18.8 厚さ 0.4~1.0	灰色 自然釉の部分 黒灰色	中型砂粒少量 細砂粒多量	ヨコナデ 斜方格子タタキ後ナデ 不定方向格子タタキ	ヨコナデ 同心円当て具痕	不定方向 格子タタキ	良	自然釉付着
3	堀切門跡 4トレンチB周辺	表彩	須恵器蓋	器高 (1.3) 厚さ 0.4	暗灰青色	細砂粒多量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	

No.	出土地点	層	種別	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
4	堀切門跡 14トレンチ	凝灰岩 直上	鉄釘	7.2	1.6	0.5	8.0	先端部・基部とも破損

第29図

No.	出土地点	層	器種・部位	計測値 (cm)	色調 (内/外)	胎土	調整・文様			焼成	備考
							外器面	内器面	口唇・底部		
1	池28トレンチD・E	崩落土	縄文浅鉢形土器 体部~口縁部	器高 (5.6) 厚さ 0.5~1.2	内 茶褐色 白褐色 外 赤茶褐色 灰黒色	細砂粒多量 黒雲母少量	丁寧な磨研 凹線文	丁寧な磨研 粗い磨研 凹線文	丁寧な磨研	良	
2	池28トレンチF No.7966	①	縄文浅鉢形土器 口縁部	器高 (2.4) 厚さ 0.5~1.0	内 白灰色 外 白灰色 暗灰色	中型砂粒多量 黒雲母中量	丁寧な磨研	丁寧な磨研 粗い磨研 凹線文	丁寧な磨研	良	
3	池28トレンチE No.5306	⑦	縄文浅鉢形土器 口縁部	器高 (1.6) 厚さ 0.4~0.7	淡黄褐色	細砂粒少量 黒雲母微量	ナデ	ナデ	ナデ	良	
4	池28トレンチE 東側	①	土器底部	底径 (13.0) 器高 (2.3) 厚さ 0.6~1.3	淡褐色	中型砂粒多量 細砂粒多量 黒雲母少量	ナデ	不定方向ナデ	ナデ	やや不良	
5	池28トレンチF No.7873	⑮	土器底部	底径 (10.0) 器高 (3.5) 厚さ 0.9	内 暗灰色 外 淡褐色	細砂粒多量 黒雲母少量	ナデ	不明	不定方向ナデ	やや良	
6	池28トレンチE No.6580	⑧	土器底部	底径 9.8 器高 (3.5) 厚さ 1.1~2.1	暗黄褐色	中型砂粒中量 細砂粒多量 黒雲母少量	横方向ナデ	ナデ	ナデ	やや良	
7	池28トレンチF No.4648	⑪	土器底部	底径 (8.8) 器高 (3.4) 厚さ 1.0~2.8	内 暗灰色 外 淡茶褐色	中型砂粒多量 細砂粒多量 黒雲母少量	横方向ナデ	ナデ	不定方向ナデ	良	
8	池28トレンチE No.7404	⑩	土器底部	底径 6.8 器高 (3.5) 厚さ 1.3~2.4	内 暗灰褐色 外 淡黄褐色	中型砂粒多量 細砂粒多量 金雲母少量	ナデ	不定方向ナデ	ナデ	やや良	

第30図

No.	出土地点	層	種別	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
1	池28トレンチF No.7582	⑥	打製石斧	安山岩	10.1	4.3	1.6	75	
2	池28トレンチE No.5380	⑦	打製石斧	粘板岩	9.3	5.0	1.8	100	
3	池28トレンチE No.7397	⑩	打製石斧	片岩	(8.4)	5.4	1.1	58	基部破損
4	池28トレンチE No.4862	⑥	石錐	黒曜石	(2.9)	0.8	0.3	1	

第31図

No.	出土地点	層	器種・部位	計測値 (cm)	色調 (内/外)	胎土	調整・文様			焼成	備考
							外器面	内器面	口唇・底部		
1	池28トレンチE No.4515	④	弥生甕形土器 肩部~口縁部	口径 (22.2) 器高 (4.1) 厚さ 0.4~0.9	黄褐色	中型砂粒多量	ナデ	ナデ	ナデ	やや不良	
2	池28トレンチE No.5026	⑦	弥生甕形土器 肩部~口縁部	器高 (5.1) 厚さ 0.5~0.6	淡黄褐色	中型砂粒多量 黒雲母微量	ナデ	ナデ	ナデ	やや良	
3	池28トレンチF No.7777	⑩	弥生鉢形土器 口縁部	器高 (4.8) 厚さ 0.5~0.6	内 淡黄褐色 外 淡黄褐色 黒色	細砂粒多量 黒雲母少量	ナデ	ナデ	ナデ	良	
4	池28トレンチF No.7831	⑩	弥生甕形土器 脚部	底部径 5.4 器高 (2.9) 厚さ 0.5~1.0	内 淡褐色 外 淡赤褐色	中型砂粒少量 細砂粒少量 黒雲母微量	ナデ	不定方向ナデ 脚内面 ケズリ→ナデ	ナデ	良	
5	池28トレンチE No.4185	④	弥生甕形土器 脚部	底部径 6.0 器高 (3.2) 厚さ 0.8~1.1	淡黄褐色	細砂粒多量	ナデ	不定方向ナデ 脚内面 ナデ	ナデ	やや不良	
6	池28トレンチE No.5316	⑦	弥生甕形土器 脚部	脚径 (10.0) 器高 (5.9) 厚さ 0.4~0.9	内 黒褐色 外 赤茶褐色	中型砂粒多量 細砂粒多量 金雲母微量	ナデ	ナデ 脚内面 ナデ	ナデ	やや不良	

第31図 (続き)

No.	出土地点	層	器種・部位	計測値 (cm)	色調 (内/外)	胎土	調整・文様			焼成	備考
							外器面	内器面	口唇・底部		
7	池28トレンチD・E	崩落土	弥生甕形土器 脚部	脚径(9.0) 器高(3.8) 厚さ0.6~1.2	内 灰白色 外 灰白色 淡桃色 脚内面 灰白色 灰黒色	中型砂粒少量 細砂粒多量	不明	不明		やや不良	摩耗している 脚内面 砂粒付着
8	池28トレンチE No4201	④	弥生甕形土器 口縁部	器高(2.5) 厚さ0.4~0.8	淡黄褐色	中型砂粒多量 細砂粒多量 黒雲母少量	ナデ	ナデ	ナデ	やや不良	
9	池28トレンチE No5053	⑦	弥生甕形土器 口縁部	器高(2.5) 厚さ0.5~1.0	内 淡黄褐色 外 暗褐色	中型砂粒多量 細砂粒多量 黒雲母微量	ナデ	丁寧なナデ	ナデ	やや不良	
10	池28トレンチE No6219	⑧	土器底部	底径6.4 器高(4.7) 厚さ0.9~2.2	内 淡褐色 外 淡橙色	大型砂粒少量 細砂粒多量 黒雲母微量	ナデ	ケズリ	ナデ	良	

第32図

No.	出土地点	層	器種・部位	計測値 (cm)	色調 (内/外)	胎土	調整・文様			焼成	備考
							外器面	内器面	口唇・底部		
1	池28トレンチE	④	須恵器環蓋 天井部	つまみ径1.7 器高(1.9) 厚さ0.7	灰色	細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	つまみ部 ヨコナデ	良	
2	池28トレンチE No4161	④	須恵器環蓋 口縁部~体部	口径(11.4) 器高(1.9) 厚さ0.5~0.6	内 淡黄灰色 外 淡青灰色	砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
3	池28トレンチF No7875 No7999	⑩ ⑪	須恵器環蓋 口縁部~天井部	口径(10.6) 器高3.4 厚さ0.2~0.6	暗灰色	中型砂粒多量 細砂粒多量	ヨコナデ	ヨコナデ	天井部 ヘラ切り→ナデ	良	環身?
4	池28トレンチF No6374	④	須恵器環口縁部	口径(9.4) 器高(1.7) 厚さ0.2~0.4	内 黒灰色 外 淡白灰色 黒色	砂粒多量	ヨコナデ	ナデ	ナデ	良	
5	池28トレンチF	⑩	須恵器環蓋 口縁部~体部	口径(13.2) 器高(1.3) 厚さ0.4	内 暗赤灰色 外 赤灰色	精選	ナデ	ナデ	ナデ	良	
6	池28トレンチF No7284	⑤	須恵器環蓋 口縁部	器高(1.4) 厚さ0.3~0.5	灰色	細砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
7	池28トレンチE No4208	④	須恵器環 底部~体部	底径(7.4) 器高(2.6) 厚さ0.5~1.0	内 淡青灰色 外 黒灰色	砂粒多量	ヨコナデ	ヨコナデ	回転ヘラケズリ 水引き痕	良	
8	池28トレンチE No4516	④	須恵器環体部	体部最大径 (14.0) 器高(2.8) 厚さ0.3	淡黒灰色	砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ		良	
9	池28トレンチE No4344	④	須恵器環底部	底径(7.0) 器高(1.8) 厚さ0.5~1.0	内 青灰色 外 淡青灰色	中型砂粒多量 細砂粒多量	ヨコナデ	ヨコナデ	回転ヘラケズリ 水引き痕	良	
10	池28トレンチE No6466	⑧	須恵器高台付環 高台~体部	高台径(8.8) 器高(3.6) 厚さ0.4~1.0	暗灰色	精選	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
11	池	表採	須恵器高台付環 底部	底径(6.6) 器高(2.7) 厚さ0.7~0.8	内 暗黒灰色 外 淡青灰色 高台内 緑灰色	中型砂粒多量	ヨコナデ	ヨコナデ	高台内 ヨコナデ 不定方向ナデ	良	内面に 漆?付着
12	池28トレンチF No5500	⑧	須恵器環口縁部	器高(3.1) 厚さ0.3~0.5	内 灰色 外 黒灰色	細砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
13	池28トレンチF No7791	⑥	須恵器環口縁部	器高(4.3) 厚さ0.5~0.8	灰色	細砂粒多量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
14	池28トレンチF No6402、6403	④	須恵器甕体部	最大長5.4 最大幅3.4 最大厚0.5	内 暗灰色 外 黒灰色	中型砂粒多量	平行タタキ →ナデ	ナデ 車輪文? 当て具痕		良	
15	池28トレンチF No6319	⑧	須恵器器台脚部	器高(4.6) 厚さ0.7~1.1	内 暗茶灰色 淡灰色 外 黒褐色 淡黄灰色	細砂粒少量	沈線 細工具による 回転ナデ	太工具による 回転ナデ	ヨコナデ	良	

第33図

No.	出土地点	層	器種・部位	計測値 (cm)	色調 (内/外)	胎土	調整・文様			焼成	備考
							外器面	内器面	口唇・底部		
1	池28トレンチF No7702	⑩	土師器環口縁部	口径(8.8) 器高(1.5) 厚さ0.2~0.3	橙褐色	細砂粒少量	ナデ	ナデ	ナデ	良	
2	池28トレンチF No7720	⑩	土師器環口縁部	口径(8.4) 器高(1.4) 厚さ0.3	内 茶褐色 外 暗茶褐色	細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
3	池28トレンチF SX01 No7,8ほか	⑧ほか	土師器環 底部~口縁部	口径(10.6) 器高3.9 厚さ0.2~0.5	淡黄褐色	細砂粒多量	ヨコナデ	ヨコナデ	底部 不定方向ヘラ 口唇部 ヨコナデ	良	接合 底部外面 ヘラ記号
4	池28トレンチF No7697、7698など	⑩	土師器高環 環口縁部	口径(15.2) 器高(2.5) 厚さ0.3~0.4	橙褐色	細砂粒少量	工具による 回転ナデ	ヨコナデ→ 回転ヘラミガキ	ヨコナデ→ 回転ヘラミガキ	良	接合
5	池28トレンチF No7614	⑦	土師器環口縁部	器高(2.2) 厚さ0.2~0.4	茶褐色 黒茶褐色	細砂粒多量 黒雲母微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	

第33図 (続き)

No.	出土地点	層	器種・部位	計測値 (cm)	色調 (内/外)	胎土	調整・文様			焼成	備考
							外器面	内器面	口唇・底部		
6	池28トレンチF No.7785	⑤	土師器坏底部	底径(6.6) 器高(1.2) 厚さ0.2~0.6	内 淡黄褐色 淡橙色 外 淡橙色	細砂粒多量 黒雲母少量	ナデ	ナデ	回転ヘラ切り→ ナデ	やや良	
7	池28トレンチF No.4592	⑩	土師器坏底部	底径(8.4) 器高(1.4) 厚さ0.6~1.2	灰白色	細砂粒多量	ヘラナデ ナデ	ヨコナデ	回転ヘラ切り	良	
8	池28トレンチF	④	土師器坏底部	底径(7.4) 器高(1.5) 厚さ0.5~0.7	黒茶褐色	細砂粒中量	ナデ	ヨコナデ ヘラケズリ	糸切り	良	
9	池28トレンチF No.4542 No.4599	⑩ ⑩ ⑩	土師器盤 底部~口縁部	口径(16.4) 底径(11.4) 器高2.6 厚さ0.3~0.9	暗灰色	細砂粒多量 金雲母中量	ヨコナデ	ヨコナデ	回転ヘラ切り →ナデ	やや良	
10	池28トレンチF No.7796	⑦	土師器高台付杯 底部~体部	底径(9.2) 器高(4.0) 厚さ0.4~0.7	内 橙褐色 外 淡黄白色 高台内 橙褐色	細砂粒多量	ヨコナデ 焼成痕	ヨコナデ	底部 不定方向ナデ	良	
11	池28トレンチF SX01 No.1,2ほか	⑧ほか	土師器高台付环 底部~口縁部	口径(12.2) 高台径7.4 高台高0.5 器高4.9 厚さ0.3~0.7	淡赤褐色 灰褐色	細砂粒多量 赤色砂粒多量 金雲母多量	ヨコナデ	ヨコナデ	高台内 ヘラ記号 回転ヘラ切り →ナデ	良	接合
12	池28トレンチF No.4587	⑩	土師器高台付环 底部	底径(7.2) 器高(1.7) 厚さ0.5~0.9	灰白色	中型砂粒中量 細砂粒多量	ナデ	ナデ	高台内 不明	不良	
13	池28トレンチE	表採	土師器高台付环 底部~体部	底径(7.6) 器高(2.1) 厚さ0.4~1.2	内 淡赤褐色 外 黄白色	大型砂粒微量 細砂粒多量 金雲母多量	ヨコナデ	ヨコナデ		やや不良	
14	池28トレンチF SX01 No.3,6ほか	⑧ほか	土師器高台付环 高台~口縁部	高台径7.6 高台高0.7 口径(13.0) 器高5.0 厚さ0.3~0.7	白褐色	細砂粒多量 黒雲母微量	ヘラケズリ ヨコナデ	ヨコナデ	底部 回転ヘラ切り→ ナデ 口唇部 ヨコナデ	やや良	接合
15	池28トレンチF SX01 No.4ほか	⑧ほか	土師器高台付环 底部~口縁部	口径14.4 高台径(9.6) 高台高1.7 器高5.5 厚さ0.3~0.6	淡黄褐色	細砂粒微量 黒雲母微量	ヨコナデ	ヨコナデ	高台内 不定方向ナデ 回転ヘラ切り →ナデ	良	
16	池28トレンチF No.7669 No.7741 No.7974	⑨ ⑩ ⑩	土師器高环 坏体部~口縁部	口径(13.6) 器高(5.0) 厚さ0.3~0.7	内 橙褐色 外 淡橙褐色 黒斑	中型砂粒多量 細砂粒多量	ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	良	
17	池28トレンチF No.6946	④	土師器高环脚部	脚径(10.2) 器高(2.0) 厚さ0.5~0.6	内 暗赤褐色 丹塗り 外 赤褐色 丹塗り	精選	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
18	池28トレンチF 木組遺構北側 No.8175	⑩	土師器高环 脚部	脚径(10.4) 器高(4.2) 厚さ0.3~0.6	赤褐色	細砂粒微量 金雲母微量	回転ヘラケズリ →ナデ	回転ヘラケズリ →ナデ	回転ヘラケズリ →ナデ	良	
19	池28トレンチF No.6990	④	土師器甌把手部	器高6.7	灰白色	中型砂粒中量 細砂粒微量	ナデ	ケズリ? ナデ		やや良	
20	池28トレンチC・D No.2970	⑥	ミニチュア壺形? 体部	体部最大径 (5.2) 器高(2.7) 厚さ0.4~0.6	淡黄褐色	中型砂粒中量 細砂粒中量	横方向ナデ 縦方向ハケ →ナデ	粗いナデ		良	

第34図

No.	出土地点	層	部位	計測値 (cm)	色調 (表/裏)	胎土	調整・文様			焼成	備考
							表面	裏面	側面		
1	池28トレンチF No.7635	⑧	軒丸瓦瓦当	瓦当径15.6 厚さ3.8	表 橙褐色 裏 暗橙褐色	大型砂粒多量	単弁八葉蓮華文 ナデ	粗い不定方向ナデ	ナデ	良	接合部に 充填粘土
2	池28トレンチ 周辺	表採	軒丸瓦瓦当	最大長8.5 最大幅9.3 厚さ3.0~4.1	暗橙褐色	大型砂粒多量 中型砂粒多量 細砂粒多量	単弁八葉蓮華文	ナデ		やや良	
3	池28トレンチ 周辺	①	軒丸瓦瓦当	最大長5.0 最大幅5.5 厚さ2.1~2.5	表 淡灰褐色 裏 橙褐色	大型砂粒多量	ナデ	ナデ		やや良	表面摩耗
4	池28トレンチ 周辺	①	軒丸瓦瓦当	最大長4.0 最大幅6.5 厚さ2.4~3.2	橙褐色	大型砂粒多量	単弁八葉蓮華文 ナデ	ナデ		やや良	

第35図

No.	出土地点	層	部位	計測値 (cm)	色調 (凹/凸)	胎土	調整・文様			焼成	備考
							凹面	凸面	側面		
1	池28トレンチD 南壁	⑤	丸瓦下端部	最大長11.4 最大幅10.1 厚さ1.8~2.0	灰青色	中型砂粒少量 細砂粒中量	布目圧痕 ヘラ調整 ナデ	ヨコナデ	切斷痕 切斷後 未調整	良	
2	池28トレンチF No.4637	⑩	丸瓦側縁部	最大長10.2 最大幅9.0 厚さ2.0~2.2	凹 暗灰色 凸 青灰色 暗青灰色	大型砂粒微量 中型砂粒少量 細砂粒多量	布目圧痕 紐圧痕 ハケ目?	ナデ	ヘラ調整 切斷後 未調整	やや良	

第36図

No.	出土地点	層	部 位	計 測 値 (cm)	色 調 (凹/凸)	胎 土	調 整 ・ 文 様			焼成	備 考
							凹 面	凸 面	側 面		
1	池28トレンチF No.7511	⑥	平瓦側縁部	最大長 14.2 最大幅 11.8 厚さ 2.0~2.3	凹 淡黒褐色 凸 淡黄褐色	中型砂粒中量 細砂粒多量 黒雲母少量	布目圧痕 模骨痕	ココナデ	ヘラ調整 切断痕 切断後 未調整 ヘラ調整	やや良	二次焼成?
2	池28トレンチF No.4656	⑪	平瓦側縁部	最大長 11.3 最大幅 9.6 厚さ 2.2	凹 淡赤褐色 凸 淡白褐色	中型砂粒微量 細砂粒多量	布目圧痕 模骨痕 紐圧痕	ココナデ	ヘラ調整	やや良	
3	池28トレンチF No.7565	⑥	平瓦狭端部	最大長 12.3 最大幅 13.1 厚さ 2.2~2.4	凹 白灰色 暗灰色 凸 白灰色	中型砂粒微量 細砂粒多量 黒雲母少量	布目圧痕 模骨痕	ココナデ	切断痕 切断後 未調整	良	粘土接合痕
4	池28トレンチF No.4652	⑪	平瓦側縁部	最大長 14.3 最大幅 7.0 厚さ 2.3~2.4	凹 淡灰色 凸 青灰色	中型砂粒微量 石英少量	布目圧痕	格子目タタキ ナデ	切断痕 切断後 未調整	良	
5	池28トレンチF No.8121	⑥	平瓦狭端部	最大長 17.9 最大幅 16.3 厚さ 2.0~2.4	灰色	大型砂粒少量 細砂粒多量	布目圧痕 模骨痕 ヘラ調整	長格子タタキ ナデ	切断痕 切断後 未調整 ヘラ調整	良	
6	池28トレンチF SX01 No.12	⑧	平瓦狭端部	最大長 7.1 最大幅 11.9 厚さ 2.0~2.6	凹 淡灰色 凸 暗灰色	大型砂粒多量 中型砂粒中量 細砂粒多量	布目圧痕 ヘラ調整	ナデ	切断痕 切断後 未調整	やや良	
7	池28トレンチF No.7801	⑧	平瓦狭端部	最大長 12.3 最大幅 12.1 厚さ 2.0~2.2	凹 淡黄褐色 灰黒色 凸 淡黄褐色 淡白褐色	中型砂粒中量 細砂粒多量	布目圧痕 模骨痕 紐圧痕 ヘラ調整	ココナデ ナデ	切断痕 切断後 未調整 ヘラ調整	良	二次焼成?

第37図

No.	出土地点	層	部 位	計 測 値 (cm)	色 調 (凹/凸)	胎 土	調 整 ・ 文 様			焼成	備 考
							凹 面	凸 面	側 面		
1	池28トレンチF No.4661	⑪	平瓦広端部	最大長 10.2 最大幅 12.7 厚さ 2.1~2.5	白灰色	細砂粒多量 黒雲母微量	布目圧痕 模骨痕	ココナデ		やや良	
2	池28トレンチF No.4635	⑩	平瓦端部	最大長 12.1 最大幅 10.7 厚さ 2.4~2.8	凹 灰色 凸 灰青色	中型砂粒微量 細砂粒多量	布目圧痕 模骨痕 紐圧痕	ココナデ ナデ		良	端部に ヘラ調整
3	池28トレンチF No.4698	⑩	平瓦体部	最大長 11.3 最大幅 11.0 厚さ 2.4~2.8	灰白色	細砂粒少量	模骨痕	凹線文		やや良	
4	池28トレンチF No.8126	⑥	平瓦体部	最大長 13.0 最大幅 13.8 厚さ 2.1~2.4	凹 暗灰色 凸 青灰色	大型砂粒微量 細砂粒中量	布目圧痕 模骨痕 紐圧痕	格子目タタキ ココナデ		良	
5	池28トレンチF No.4653,4657	⑪	平瓦端部	最大長 14.0 最大幅 15.6 厚さ 2.6~2.9	灰色	大型砂粒微量 中型砂粒多量 細砂粒多量	布目圧痕 模骨痕 ヘラ調整	ココナデ		良	

第38図

No.	出土地点	層	部 位	計 測 値 (cm)	色 調 (凹/凸)	胎 土	調 整 ・ 文 様			焼成	備 考
							凹 面	凸 面	側 面		
	池28トレンチF No.7510	⑥	平瓦広端部	最大長 38.0 最大幅 23.2 厚さ 2.5~2.8	凹 灰白色 暗灰色 凸 灰褐色	中型砂粒少量 細砂粒多量 黒雲母中量	布目圧痕 模骨痕	紐圧痕 ナデ	切断痕 切断後 未調整 ヘラ調整	やや良	二次焼成?

第39図

No.	出土地点	層	器 種	計 測 値 (cm)	色 調 (内/外)	胎 土	調 整 ・ 文 様		重 量 (g)	焼成	備 考
							凹 面	凸 面			
1	池28トレンチF No.4502	⑩	瓦二次加工品	直径 (5.6) 厚さ 2.3~2.6	青灰色	細砂粒中量	布目圧痕 模骨痕	ナデ	87	良	
2	池28トレンチF No.5874	⑧	瓦二次加工品	直径 (6.6) 厚さ 1.8~2.2	凹 淡灰褐色 凸 暗紫褐色	大型砂粒微量 中型砂粒少量 細砂粒多量	布目圧痕 紐圧痕	ナデ	93	良	
3	池28トレンチF No.4151	④	瓦二次加工品	直径 (6.6) 厚さ 2.4	灰白色	中型砂粒多量 細砂粒多量	布目圧痕 紐圧痕	ナデ	114	やや良	
4	池28トレンチF No.4678	⑪	瓦二次加工品	直径 (7.6)	白灰色	中型砂粒多量 細砂粒多量	布目圧痕 紐圧痕	ナデ	167	やや良	
5	池28トレンチE	⑧	瓦二次加工品	長さ 5.0 厚さ 2.1~2.2	明赤褐色	中型砂粒微量 細砂粒多量	布目圧痕		77	良	
6	池28トレンチF No.7516	⑥	瓦二次加工品	長さ 6.1 幅 8.4 厚さ 1.9~2.0	白灰色	細砂粒少量	布目圧痕 ヘラナデ	長格子タタキ ナデ	135	良	

第40図

No.	出土地点	層	種 別	最 大 長 (cm)	最 大 幅 (cm)	最 大 厚 (cm)	重 量 (g)	備 考
1	池28トレンチF No.7738	⑩	鉄斧	5.8	3.2	2.3	25	鍛造・一部木質が残る
2	池28トレンチF No.7496	⑤	鉄滓	8.6	7.4	3.6	272	熱を受け赤変

第41図

No.	出土地点	層	器種	樹種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	備考
1	池28トレンチ No.805	①	木筒状木製品		6.9	1.6	0.5	断面0.5cm四方の箸様の木製品
2	池28トレンチ No.955	④	網代	イネ科タケ亜科	3.5	2.3	—	三つ超え三つ潜り一つ送りの綾編み

第42図

No.	出土地点	層	器種	樹種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	備考
1	池28トレンチ No.1178	①下	建築材 鎌継仕口	ブナ科シイ属	26.0	7.7	3.8	木舞の束（Aブロック）を固定
2	池28トレンチ No.1141-1	①下	建築材仕口	セシダン科セン ダン属センダン	39.2	10.6	5.5	
3	池28トレンチB No.1128	①下 ～⑤	杭	ブナ科クリ属クリ	58.0	6.1	6.7	

第43図

No.	出土地点	層	器種	樹種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	備考
1	池28トレンチ No.1336	①下	板材	ブナ科コナラ属 アカガシ亜属	18.1	10.0	2.5	板材？ 樹皮を残して加工
2	池28トレンチ No.1285	①下	建築材	ブナ科コナラ属 アカガシ亜属	25.0	11.4	4.7	
3	池28トレンチ No.379	①下 ～⑤	杭	ブナ科コナラ属 アカガシ亜属	68.0	14.3	11.3	

第Ⅳ章 まとめ

第1節 堀切門跡について

今回の調査で門の位置が確認されたことの意義は大きく、堀切門跡の調査における大きな画期といえる。このほかにも登城道の経路及び構造、城壁の構造なども次第に解明されつつあり、これまでの調査成果をまとめると以下のとおりである。

門の構造について

城壁上段近く、下方より延びる南西壁際の堀切状地形がやや緩傾斜となる変化点に門跡は位置する。後世の道路に伴う削平によりその大部分は既に消失していたが、堀切の壁際から門の支柱と思われる柱穴1基（16トレンチ）を検出した。掘方の2/3程は削平されているが、一辺82cmの方形を呈し、深さは1.0mと比較的大きい。その前後から柱穴が検出されていないことから構造的には二脚門が想定される。

また、この柱穴の掘り込み面とその下方の道路面（16トレンチ南壁断面）との比高差が約1.2m程あることについては、門の直前に階段を付設した可能性がある。

登城道の経路及び構造について

登城道は南西壁際の堀切状地形を通る経路が想定される。現在のところ約30mの範囲（16トレンチ～19トレンチ）で道路跡を検出した。登城道の傾斜角は約20°で、城壁下位付近で屈曲を伴う。

道路跡は地山（凝灰岩）を堀切状に削り出し、その礫面に粘質土を貼り路面を成形する。道路幅は180～270cmと一定しないが、門直前と屈曲点より下方の幅は比較的狭い。道路跡の側溝については、両側溝（8、20トレンチ）と片側溝（10、18、19トレンチ）の両者が確認されているが、片側溝を検出した道路跡の残存状況は悪く、消失した可能性がある。

登城道の時期については部分的に2期の道路跡が確認されている。時期比定できる遺物が検出されていないことから詳細な時期は判断できない。

城壁構造について

城壁中段にテラス部を設けた2段構造の城壁である。城壁の高さは約19mで、勾配は約45°を測る。城壁礫面に加工痕が検出された（17トレンチ）ことから削り出しの城壁であることが確実なものとなった。

また、城壁中段のテラス状平坦面で検出された3面のテラス部（9トレンチ）については時期差と捉えていたが、段々に削り込んだ凝灰岩壁に粘質土を版築状に重ねた構造である可能性が生じた。

第2節 池跡について

今回の調査で池跡から堰堤が発見されたことは池構造の解明に向けて大きく前進する結果となった。これまでの調査成果をまとめると以下のとおりである。

池の堰堤について

池跡は、総面積5,300 m²の範囲で確認され、南東から中程で北に屈曲する細長い形状である。池の南東端

(池頭) から谷が最も狭まる北端(池尻) までの比高差は約7mとなり、これまでは池の北端に高さ7m以上の堰堤が必要と考えられていた。しかし、池の中途に小堰堤が検出されたことにより、池の数箇所に小堰堤を設けて水量を調整していたと想定され、当初考えていた大規模な堰堤は必要ないことが判明した。

池の利用について

今回の調査で検出された木組遺構(水汲み場)は、堰堤の南東側に位置する。第19次調査で検出された建築材等の貯木場跡は堰堤の北西側に位置しており、堰堤を境に池の利用目的が異なることが判明した。これにより、堰堤は水量を調整するとともに、池の利用を異にする小区画を作り出すために設けられたことが想定される。

参考文献

- 熊本県教委 『鞠智城跡―第10次～第12次調査報告―』 熊本県文化財調査報告第116集 1991
- 熊本県教委 『鞠智城跡―第19次調査報告―』 熊本県文化財調査報告第169集 1998
- 熊本県教委 『鞠智城跡―第20次調査報告―』 熊本県文化財調査報告第181集 1999
- 熊本県教委 『鞠智城跡―第21次調査報告―』 熊本県文化財調査報告第191集 2000
- 熊本県教委 『上鶴頭遺跡』 熊本県文化財調査報告第63集 1983
- 熊本県教委 『うてな遺跡』 熊本県文化財調査報告第121集 1992
- 野田拓治 「熊本県鹿本町・御宇田遺跡群の官衙遺構」『古代文化』第50巻5号 1998

(付論)

鞠智城跡貯水池跡出土の種子同定・微細物分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

鞠智城跡は菊鹿町南端部と菊池市西端部をまたぐ米原台地に築城された古代山城である。発掘調査では、台地を開析する谷を堰き止めて構築された池が確認されている。これまでに貯木されていた木材の樹種同定をはじめ、谷の埋積物の珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析、種実同定を行なっている。今回は池内から出土した種実の同定と、池内土壌の微細植物片の分類・同定を行うことにより、当時の周辺植生と植物利用に関する情報を得る。

1. 試料

種実同定用試料は、池内から検出された種実107点である。Ⅲ層から検出されたものがほとんどであるが、試料の詳細については結果と合わせて表1に示す。微細植物片分類・同定用試料は池から採取された土壌試料1点である。この試料には、採取地点や層位などの記載がみられない。

2. 分析方法

(1) 種実同定

双眼実体顕微鏡下で、その形態的特長から種類を同定する。

(2) 微細植物片分類・同定

土壌約300ccに数%の水酸化ナトリウム水溶液を加えて放置し、試料を泥化させる。0.5mmの篩を通して水洗し、残渣を集める。残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な植物遺体を抽出し、同定・計数する。

3. 結果

(1) 種実同定

結果を表1に示す。以下に検出された種類の形態的特長を示す。

・イヌガヤ (*Cephalotaxus harringtonia* (Knight) K.Koch) イヌガヤ科イヌガヤ属

種子が検出された。黒褐色で側面観は長卵形、上面観は凸レンズ型。大きさは1.5cm程度。種皮は黒色で堅く、表面に顆粒状の隆起がある。

・アカガン亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科コナラ属果実が検出された。大きさは約1.5cm程度。褐色で楕円形。座についていた部分は円形、淡褐色でざらつく。花柱の部分に輪状の模様がみられる。全体的に薄くてやや堅く、表面は平滑で光沢がある。検出されたもののうち、花柱の部分が明瞭でないものはコナラ属、細片でスタジイやシリブカガシとの区別がつかないものはブナ科とした。

・スタジイ (*Castanopsis cuspidata* var. *Sieboldii*) ブナ科シイノキ属

果実が検出された。大きさは1 cm程度。垂三角形で、先端部が尖る。基部の座についていた部分は褐色でざらつき、円形でやや突出する。

・シリブカガシ (*Pasania glabra* (Thunberg) Oersted) ブナ科マテバシイ属

果実が検出された。大きさは1.5cm程度で楕円形。座についていた部分は小さく円形、淡褐色で凹む。

全体的に薄くてやや堅く、表面は平滑で光沢がある。

・ムクノキ (*Aphananthe aspera* (Thunb.) Planchon) ニレ科ムクノキ属

種子が検出された。黒色で大きさは8 mm程度。いびつな楕円形で、明瞭な「へそ」が存在する。

・カジノキ属 (*Broussonetia*) クワ科

種子が検出された。褐色。大きさは1 mm程度。倒卵型、表面にはいぼ状の模様が粗く配列し、側面の隅に突起がみられる。

・ホオノキ? (*Magnolia cf. obovata* Thunb)

種子が検出された。扁平で不定形。黒色でやや光沢があり、やや堅い。大きさは1 cm程度。腹面は中央部が深く窪み、基部に大きな「へそ」がある。背面には筋が多数入る。

・マタタビ属 (*Actinidia*) マタタビ科

種子が検出された。黒色。側面観は長楕円形。大きさは2 mm程度。表面は硬質で光沢があり、丸いへこみが不規則に配列しているように見える。網目は基部の付近では細かく縦長になる。

・クスノキ科 (*Lauraceae*)

種子が検出された。球形、黒色で大きさは5 mm程度。表面は薄くて堅く、表面は平滑。

・モモ (*Prunus persica* Batsch) バラ科サクラ属

核 (内果皮) が検出された。褐色～黒褐色で大きさは3 cm程度。核の形は楕円形でやや扁平である。基部は丸く大きな臍点がありへこんでおり、先端部はやや尖る。一方の側面にのみ、縫合線が顕著に見られる。表面は、不規則な線状のくぼみがあり、全体としてあらいしわ状に見える。

・センダン (*Melia Azedarach* L. var. *subtripinnata* Miquel) センダン科センダン属

核が検出された。褐色で堅い。側面観は楕円形で、上面観は星型。大きさは1 cm程度。縦方向に数本の陵が見られる。

・エゴノキ属 (*Styrax*) エゴノキ科

核が検出された。灰黒色。側面観は楕円形、上面観は円形。長さ1 cm程度。下端に大きな「へそ」があり、表面に3本の浅い溝がある。核は厚く硬い。

・タデ属 (*Polygonum*)

果実が検出された。大きさは2 mm程度。3稜形で表面は薄くて堅く、ざらつく。

・アカザ科ーヒユ科 (*Chenopodiaceae - Amaranthaceae*)

種子が検出された。黒色。側面観は円形で、上面観は凸レンズ形を呈している。大きさは1 mm程度。側面に「へそ」がある。表面は細胞が亀甲状に配列している構造がみられる。

・キジムシロ属ーヘビイチゴ属ーオランダイチゴ属 (*Potentilla-Duchesnea-Fragaria*) バラ科

種子が検出された。褐色。大きさは、1 mm程度。半月形で、一端に「へそ」が存在する。表面全体はすじ状の模様があるが、不鮮明である。表面模様の違いによりAとBに分類した。

・ハス (*Nelumbo nucifera* Gaertn) スイレン科ハス属

果実が検出された。大きさは1 cm程度。果皮は黒褐色で、厚くて非常に堅く、表面はざらつく。先端に大きな丸い「へそ」がある。

・ヒシ属 (*Trapa*) アカバナ科

果実が検出された。褐色、棘を含む一部が残っている。果皮は厚い。

表1 種実同定結果(1)

No.	試料名	イヌガヤ	ブナ科	コナラ属	コナラ属アカガシ亜属	スダジイ	シリブカガシ	ムクノキ	ホオノキ?	クスノキ科	モモ(完形)	モモ(破片)	センダン	エゴノキ属	ハス	ヒシ属	キカラスウリ	不明	材破片	備考	
126	池28T粘	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
141	池28T粘土1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	食痕あり
333	池28T粘土Ⅲ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
510	池28T粘土Ⅲ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
512	池28T粘土Ⅲ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
531	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
533	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	食痕あり
535	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
539	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
540	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
557	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
560	池28TⅢ	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	1	2	-	-	-	1	1	-	-	
561	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
563	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
565	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	食痕あり
566	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
573	池28T粘Ⅲ	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
575	池28T粘Ⅲ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
576	池28T粘Ⅲ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
624	池28TⅢ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
625	池28TⅢ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
635	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	2	-	-	-	-	-	-	-	-	1個食痕あり
644	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
651	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7	8	-	-	-	-	-	-	-	-	1個食痕あり
660	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
661	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
667	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
671	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
673	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
674	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
700	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
701	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
707	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
708	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	
709	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
710	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	食痕あり
722	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
723	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
735	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
740	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	-	-	-	-	-	-	-	
741	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
747	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
758	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
759	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	
766	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	破	-	-	-	-	
767	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
772	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
774	池28TⅢ層	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
775	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	破	-	-	-	-	
784	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	食痕あり
785	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
787	池28TⅢ層	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
797	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
798	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	

表1 種実同定結果(2)

No.	試料名	イヌガヤ	ブナ科	コナラ属	コナラ属アカガシ垂属	スダジイ	シリブカガシ	ムクノキ	ホオノキ?	クスノキ科	モモ(完形)	モモ(破片)	センダン	エゴノキ属	ハス	ヒシ属	キカラスウリ	不明	材破片	備考	
803	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
809	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
814	池28TⅢ層	-	破	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
815	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	
816	池28TⅢ層	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	
817	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
826	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
832	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
840	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	破	-	-	-	-	
864	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
865	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
868	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
876	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1個食痕あり
879	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
881	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
882	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
890	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
891	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
893	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
897	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
902	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
903	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
919	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
923	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
924	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
925	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
926	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
932	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
933	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
934	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
937	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
938	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
945	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
946	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
948	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
954	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
959	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
960	池28TⅢ層	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
961	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
965	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	
967	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
968	池28TⅢ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
969	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
971	池28TⅢ層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	池28TⅢ層一括	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1個食痕あり
1424	KKJ SG 28T	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
1426	KKJ SG 28T	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
1428	KKJ SG 28T	-	-	-	-	-	-	-	4+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
1507	KKJ SG 28T	-	-	-	-	-	-	-	17+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
1509	KKJ SG 28T	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
	KKJ 28TⅢ下一括	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	SG 28T C地区粘土層一括	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
	KKJ SG 28T 周辺表採	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	

モモは半分以下を破片とした。

・キカラスウリ (*Trichosanthes Kirilowii* Maxim. var. *japoica* (Miq.)

Kitamura)ウリ科カラスウリ属

種子が検出された。楕円形で扁平。大きさは1 cm程度。縁はやや明瞭。一端に大きなへそがある。種皮は厚くて弾力があり、ざらつく。

(2) 微細植物片分類・同定

結果を表2に示す。同定の結果、種実が少量検出されたほか、材片や昆虫などもみられた。材片はいずれも微細なため、同定することは難しかった。検出された種実の種類や形態的特長については、種実同定の項に合わせて示す。

表2 微細植物片分類・同定結果

種類名	
カジノキ属	破
マタタビ属	1
タデ属	8
アカザ科-ヒユ科	1
キジムシロ属-ヘビイチゴ属-	
オランダイチゴ属A	6
キジムシロ属-ヘビイチゴ属-	
オランダイチゴ属B	3
材	破
同定不能	破
昆虫	破

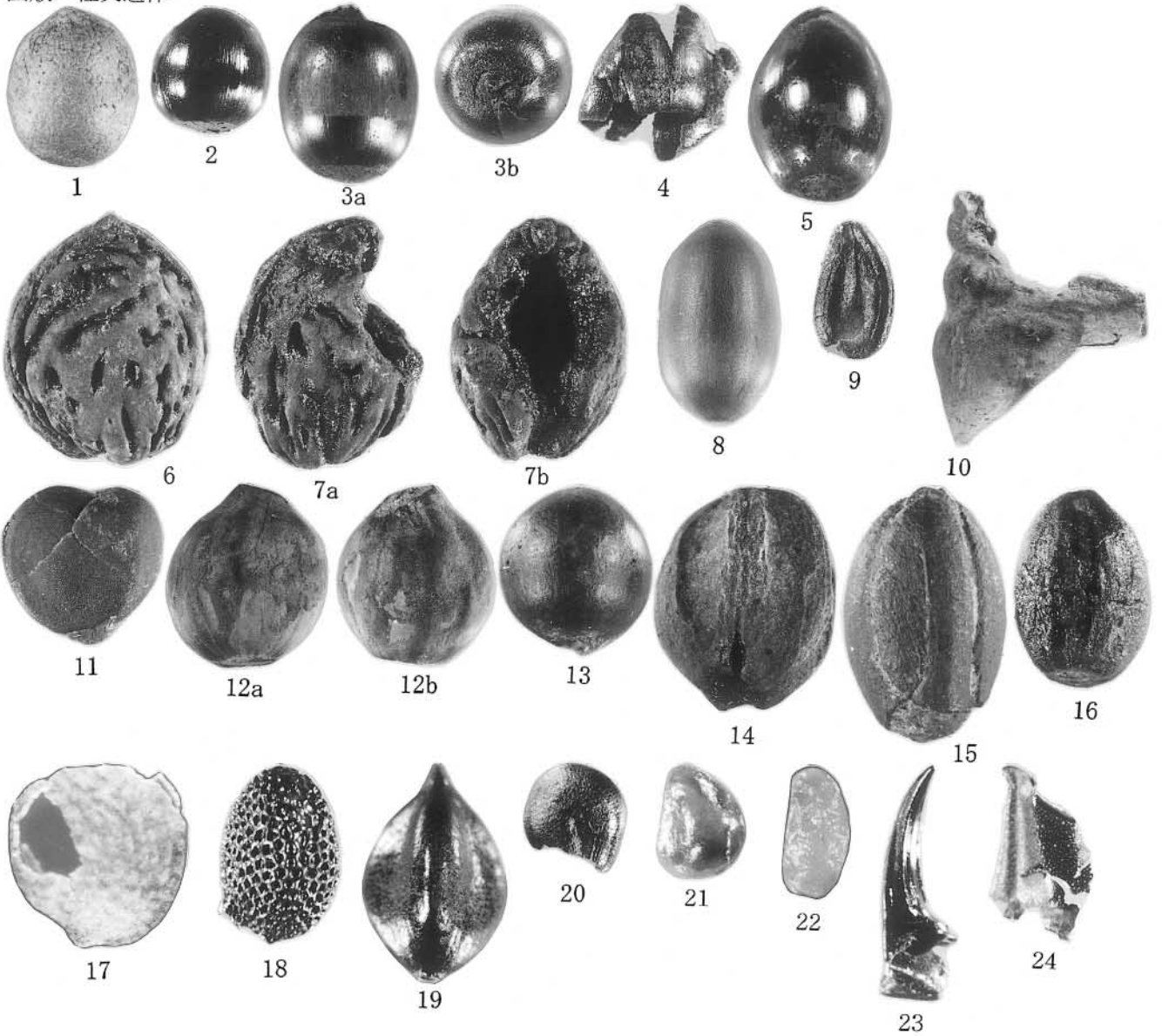
4. 考察

前報では、花粉化石や種実遺体がほとんど検出されず、化石が好氣的状況により分解した可能性が指摘されているが、今回は比較的多くの種実遺体が検出された。

今回検出された木本類のうち、アカガシ亜属、スタジイ、シリブカガシ、クスノキ科などは主に山地に安定した森林を作る種類である。これまでの成果では、山地の森林植生としてカシ類を主体とした常緑広葉樹林からなる植生が推定されているが、これと調和する結果である。また、イヌガヤ、ムクノキ、カジノキ属、ホオノキ、マタタビ属、センダン、エゴノキ属は谷沿いや林縁部にみられる中低木やつる植物である。おそらく城郭の整備のため開発が進んだため、森林との林縁には、比較的明るいところを好むこれらの種類が生育するようになったと思われる。また、池周辺の谷沿いなどの明るい林地にも、これらが生育していたと考えられる。これまでの成果では、ニレーケヤキ属やエノキ属-ムクノキ属などの溪谷林やタケ亜科からなる草地在池の周辺に広く分布していたことが推定されているが、これと調和的な結果である。なお、今回最も多く検出された種類はモモである。モモは渡来種であることから、観賞用や薬用、食用として当時栽培されていたと考えられる。

一方草本類をみると、タデ属、アカザ科-ヒユ科、キジムシロ類、キカラスウリは人里近くの開けた草地などに普通に見られる人里植物（いわゆる雑草）であることから、これらは城内に生育していたものと考えられる。また、ハスとヒシ属はともに水生植物であり池内に生育していたものと見られる。共に食用となることから、当時の食料として利用されていた可能性もある。特にハスは仏教との関連が深い植物であり、鑑賞用として植えられることから、池内に植栽されていたと考えられる。

図版 種実遺体



- | | |
|------------------------------------|------------------------------------|
| 1. イヌガヤ (No. 816; 池 28T III層) | 2. コナラ属 (No. 787; 池 28T III層) |
| 3. アカガシ亜属 (No. 774; 池 28T III層) | 4. スダジイ (No. 960; 池 28T III層) |
| 5. シリブカガシ (No. 826; 池 28T III層) | 6. モモ (No. 651; 池 28T III層) |
| 7. モモ (食痕あり) (No. 651; 池 28T III層) | 8. ハス (No. 815; 池 28T III層) |
| 9. キカラスウリ (No. 560; 池 28T III) | 10. ヒシ属 (No. 840; 池 28T III層) |
| 11. ムクノキ (No. 1424; KKJ SG 28T) | 12. ホオノキ? (No. 1507; KKJ SG 28T) |
| 13. クスノキ科 (No. 560; 池 28T III) | 14. センダン (No. 740; 池 28T III層) |
| 15. エゴノキ属 (No. 816; 池 28T III層) | 16. 不明 (No. 1509; KKJ SG 28T) |
| 17. カジノキ属 (土壌試料) | 18. マタタビ属 (土壌試料) |
| 19. タデ属 (土壌試料) | 20. アカザ科-ヒユ科 (土壌試料) |
| 21. キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属A (土壌試料) | 22. キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属B (土壌試料) |
| 23. 昆虫 (土壌試料) | 24. 昆虫 (土壌試料) |

圖 版



堀切門跡全景（北から）



池跡28トレンチF地区全景（北東から）



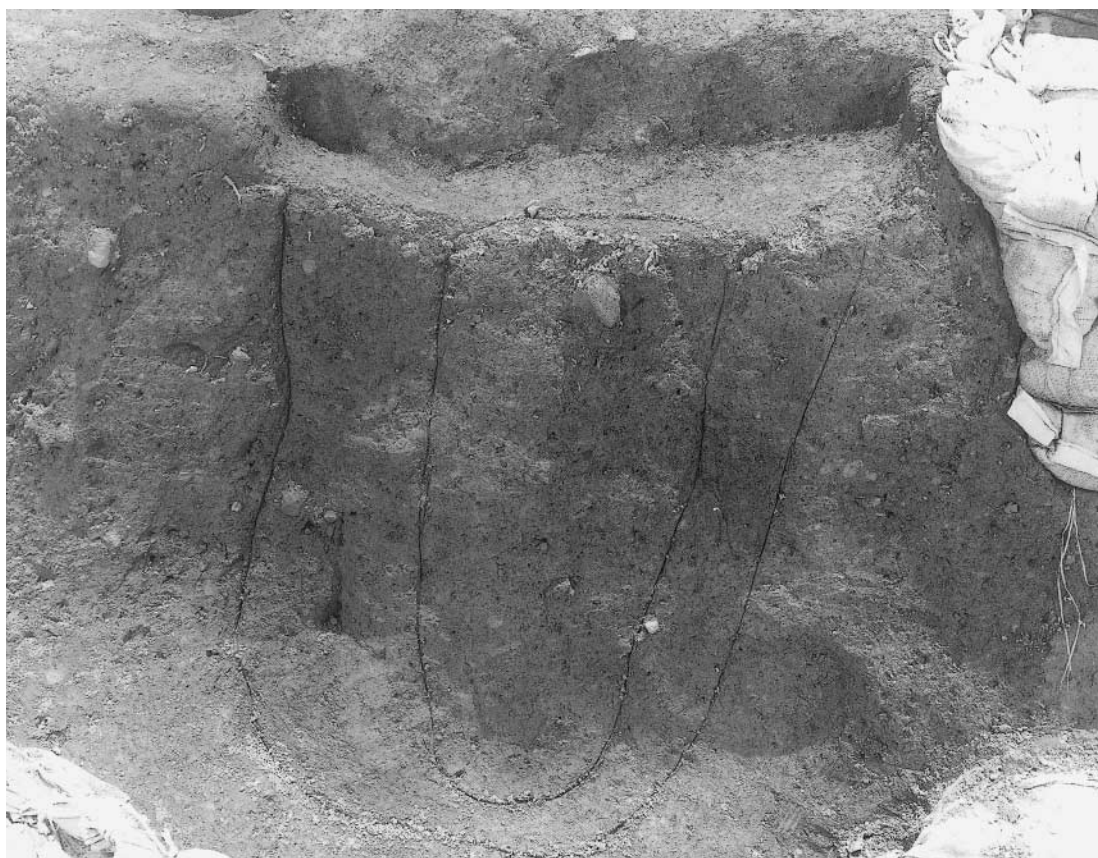
堀切門跡4cトレンチ拡張部（南から）



堀切門跡10トレンチ拡張部（東から）



堀切門跡15トレンチ（北東から）



堀切門跡16トレンチ柱穴（北西から）



堀切門跡17トレンチ域壁（南東から）



堀切門跡18トレンチ（南東から）



堀切門跡10、15、18トレンチ（南東から）



堀切門跡19トレンチ（北東から）



堀切門跡16、20トレンチ（西から）



堀切門跡登域道（北から）



池跡28トレンチE地区全景（西から）



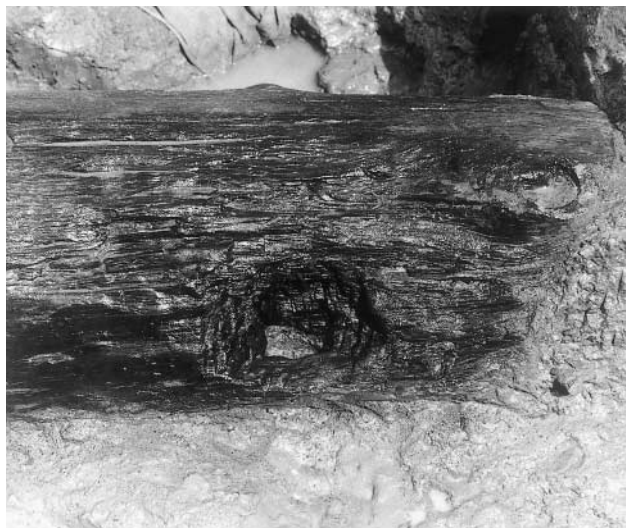
池跡28トレンチF地区柵状柱列（西から）



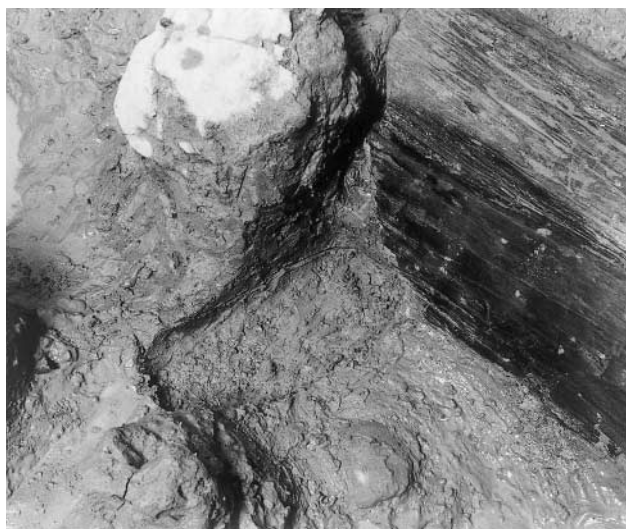
池跡28トレンチC地区堰堤断面（北東から）



池跡28トレンチF地区木組遺構（北東から）



木組遺構木材No.3 えつり孔（南から）



木組遺構木材No.3 加工痕（南東から）



木組遺構木材No.4 加工痕（南西から）

図版11

縄文土器



第29図1・2・3

第29図4・5・6



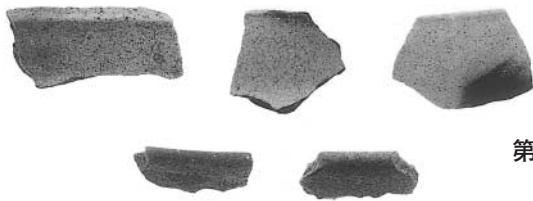
第29図7・8

石器



第30図1・2・3・4

弥生土器



第31図1・2・3
8・9



第31図4



第31図5・6・7



第31図10

図版12

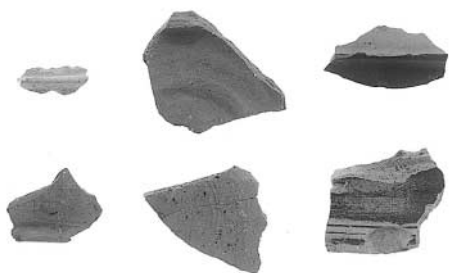
須恵器



第32図1・2・3
5・6



第32図11



第32図4・7・8
10・9・15



第32図12・13・14

池跡28トレンチF地区SX01出土遺物



第33図3



第33図11



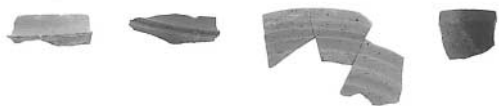
第33図14



第33図15

図版13

土師器



第33図1・2・4・5



第33図6・7・8
9



第33図10・12・13



第33図16



第33図17・18・19・20

鉄製品



表



裏

第40図1



第40図2

軒丸瓦瓦当



表面



裏面

第34图1

图版15

軒丸瓦瓦当



第34图2·3·4

丸瓦

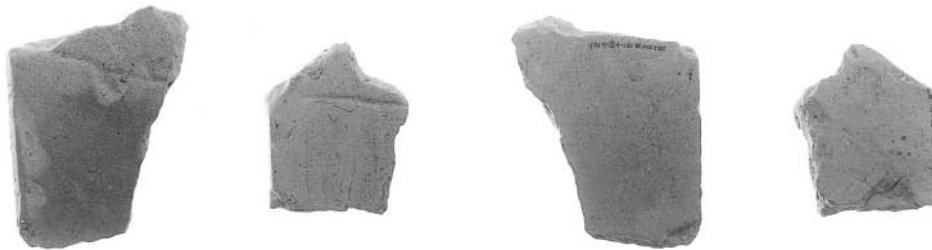


凸面

凹面

第35图1·2

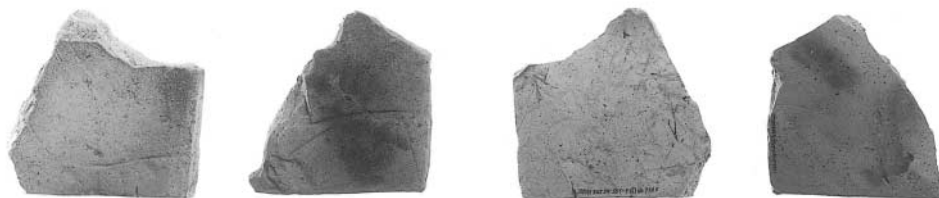
平瓦



凹面

凸面

第36图1·2



第36图3·7

图版16

平瓦



凹面



凸面

第36图5

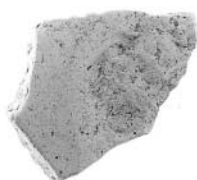


凹面



第36图4·6

凸面



凹面



第37图1·3
2

凸面



凹面



第37图4·5

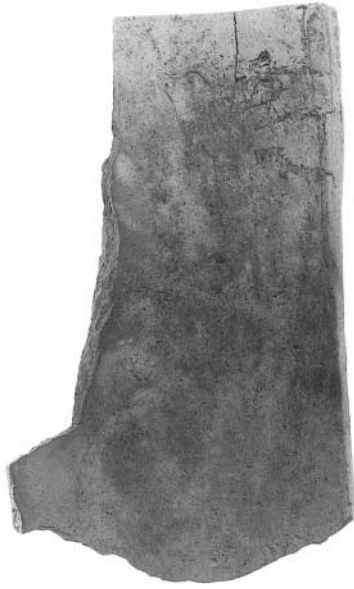
第37图4·5



凸面

图版17

平瓦



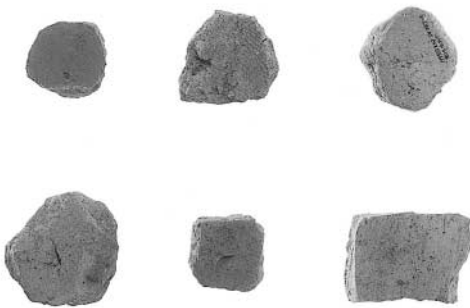
凹面



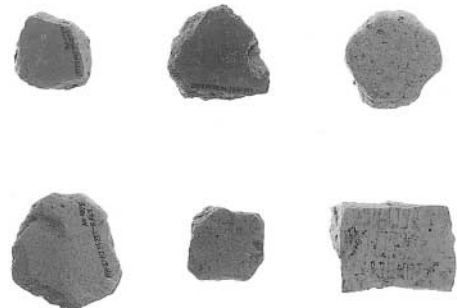
凸面

第38图1

瓦二次加工品



凹面



凸面

第39图1·2·3

4·5·6

堀切門跡出土遺物



第19图3·4



凹面



凸面

第19图1



第19图2

図版18

木製品



表



裏

第41図1



表



裏

第41図2



表



裏

第42図1



表



裏

第42図2



第42図3

図版19

木製品



表



裏

第43図1



表



裏

第43図2



第43図3

報告書抄録

ふりがな	きくちじょうあと							
書名	鞠智城跡							
副書名	第22次調査報告書							
巻次								
シリーズ名	熊本県文化財調査報告							
シリーズ番号	第207集							
編著者名	矢野裕介							
編集機関	熊本県教育委員会							
所在地	熊本市水前寺6丁目18-1							
発行年月日	2002（平成14）年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きくちじょうあと 鞠智城跡	くまもとけんかもとぐんきつかまち 熊本県鹿本郡菊鹿町 おおあぎよなぼる 大字米原 くまもとけんきくちほりきり 熊本県菊池市堀切			度 分 秒	度 分 秒	(自)・ 20000417 (至) 20010329	約5,000㎡	遺跡調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
鞠智城跡	城跡	古代	堀切門跡 門跡 道路跡 城壁 池跡 木組遺構 堰堤 柵列		須恵器、瓦、鉄釘 須恵器・土師器・ 瓦・木製品・鉄斧・ 木製品 縄文土器・石器・ 弥生土器		門跡に伴う柱穴を 検出。 水汲み場と思われ る木組遺構を検出。 堰堤を検出したこ とにより池跡に区 画があったことが 判明する。	

熊本県文化財調査報告 第207集

鞠智城跡

—第22次調査報告—

平成14年 3月31日

編集発行 **熊本県教育委員会**
〒860-8609 熊本市水前寺6丁目18-1
TEL.(096)383-1111(代表)

印刷 **株式会社 大和印刷所**
〒862-0931 熊本市戸島町920-11
TEL.(096)380-0303(代表)

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 207 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：鞠智城跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL： <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日